小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ

白江遺跡

矢崎宮の下遺跡

薬師遺跡Ⅴ次

薬師遺跡Ⅵ次

矢田新遺跡

2011.3

石川県小松市教育委員会

例　言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金事業により実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当は次のとおりである。

【白江遺跡】（平成 19 年度）
[調 査 地]　石川県小松市白江町
[調査原因]　個人住宅建設
[調査面積]　92m²
[調査期間]　2007. 6. 4 ～ 2007. 6.25
[調査担当]　岩本信一

【矢崎宮の下遺跡】（平成 19 年度）
[調 査 地]　石川県小松市矢崎町
[調査原因]　店舗併用住宅建設（個人事業）
[調査面積]　108m²
[調査期間]　2007.11.15 ～ 2007.12.10
[調査担当]　岩本信一

【薬師遺跡Ⅴ次】（平成 19 年度）
[調 査 地]　石川県小松市矢崎町
[調査原因]　個人住宅建設
[調査面積]　125m²
[調査期間]　2007. 4. 9 ～ 2007. 5. 9
[調査担当]　西田（大橋）由美子

【薬師遺跡Ⅵ次】（平成 20 年度）
[調 査 地]　石川県小松市矢崎町
[調査原因]　個人住宅建設
[調査面積]　65m²
[調査期間]　2008. 5.19 ～ 2008. 6. 4
[調査担当]　下濱貴子

【矢田新遺跡】（平成 19 年度）
[調 査 地]　石川県小松市矢田町
[調査原因]　個人住宅建設
[調査面積]　222.96m²
[調査期間]　2007. 5.21 ～ 2007. 7.12
　　2007.10.29 ～ 2007.11.5
[調査担当]　岩本信一、坂下義視

4. 試掘調査及び発掘調査は、（社）小松市シルバー人材センターより作業員の派遣を受けて実施し、一部臨時作業員も補助員として雇用した。遺構の実測は、各担当者が行った。
5. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 22 年度に実施した。
6. 写真撮影については、遺構は各調査担当者が、遺物は各執筆担当者が実施した。
7. 本書の執筆担当は、各担当者を目次に付記し、編集は下濱貴子が担当した。
8. 本調査において出土した遺物及び遺構・遺物の実測図,写真等の資料は,小松市教育委員会が保管している。

凡　例

1. 本書に示す座標は世界測地系（Ⅶ系）に準拠している。
2. 本書に示す方位は、全て座標北である。
3. 本書に示す高度は標高（T.P.）である。
4. 本書に示す土色は,マンセル表色系に準拠している。
5. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として『石川県遺跡地図』の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目　次

Ⅰ　位置と環境 ……（宮田）…… 1
Ⅱ　白江遺跡発掘調査 ……（岩本）……15
Ⅲ　矢崎宮の下遺跡発掘調査　（岩本・宮田・望月）21
Ⅳ　薬師遺跡Ⅴ次発掘調査 …（大橋・宮田）……43
Ⅴ　薬師遺跡Ⅵ次発掘調査 …（大橋）……63
Ⅵ　矢田新遺跡発掘調査 ……（岩本）……69
写真図版 1 ～ 16
報告書抄録

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

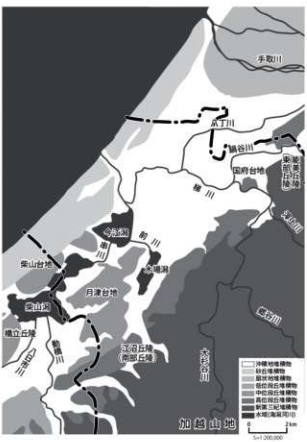
１　市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約 20km、南北約 30km に跨る市域は面積 371.13km^2 を測る。南は大日山（1368m）で福井県勝山市と境し、ここより約 5km 北に位置する鈴ヶ岳（1174m）を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約 11 万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣７町村を合併して昭和 15 年市制施行、その後２次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

第１図　小松の位置

２　加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地（加越山地）は新第三紀火砕流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約 20m 程度あるが、平均的には５～ 10m 程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約３分の２が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

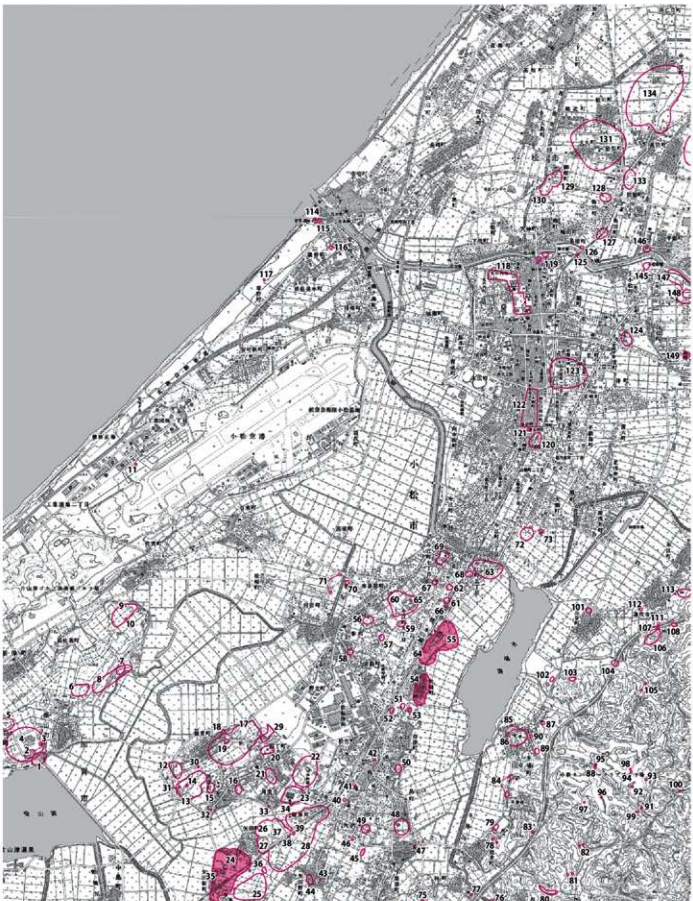


第２図　小松市の地形

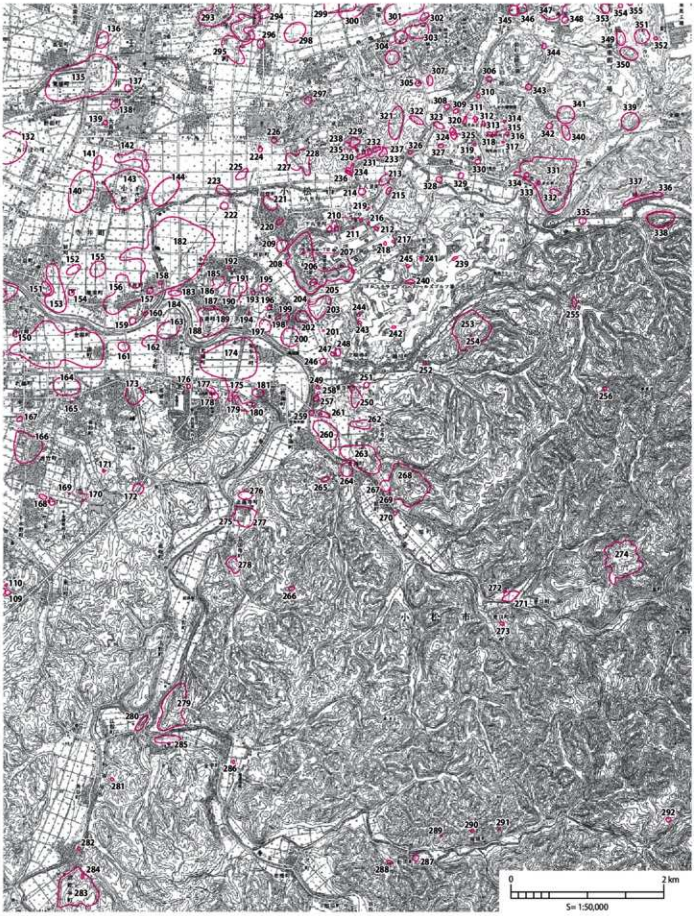
梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・滓上川等を合わせて国府台地をえぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図２は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

３　梯川と梯川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返されてきた。明治 44 年～大正 12 年に石田橋～安



第３図　遺跡分布図


0
2 km
S= 1:50,000

宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江潟・木場潟を結んだ領域を指している。図2に表示はないが、この領域には明治20年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治32年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

第2節　歴史的環境

1　旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡（205）や八里向山A～F遺跡（229～234）など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、明確な集落遺跡としての確認例はない。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷A～D遺跡や宮竹うっしょやまA･B遺跡（いずれも図郭外）など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡（22）が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。多くが、近現代の開発も含め、後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一事例を提供してくれる。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2　弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡（123）が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡（135）、大長野A遺跡（140）、漆町遺跡（150）、荒木田遺跡（174）のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡（205）や八里向山A遺跡（229）で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3　古　墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山5・6号墳、秋常山1号墳（いずれも図郭外）、和田山5号墳（294）を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群（206）や下開発茶臼山古墳群（303）など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在ないしいずれかのみの構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代オオキダ遺跡（156）で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では臼のほぞ古墳（29）や御幸塚古墳（67）などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群（37）のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

4　古墳時代～古代の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6 世紀以降 8 世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7 世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7 世紀代の月津台地では、額見町遺跡（17）の発掘調査以降、矢田野遺跡（28）、薬師遺跡（55）で L 字形カマドを設えた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の趨向が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との関係性が留意される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8 世紀、在郷の財（たから）氏関連遺跡とされる佐々木遺跡（161）が異彩を放つほかは、概ね盛期が 9 世紀後半～ 10 世紀前半になる傾向が知られている。墨書土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図 3 には中宮八院（248、251、260、267、276、277、278、281）を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺（すみずでら）跡（172）、八里向山 B 遺跡（230）、里川 E 遺跡（243）が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、平成 18 年度より目下調査中の松谷寺跡（278）において 8 世紀前半に遡る山林寺院跡が確認され、「松谷廃寺」と名称上での区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6 世紀前半には二ツ梨東山古窯跡（図郭外）で須恵器生産が確認され、以後、10 世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。紙幅の都合で殆どが図郭から外れているが、辛うじて図郭に収まる林タカヤマ古窯跡（75）は、7 世紀前半の須恵器窯 3 基が調査されている。一方の能美丘陵では、7 世紀前半に八里向山 J 遺跡（地蔵谷古窯跡：238）で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群（347）に操業の拠点を移動する。8 世紀前半には和気古窯跡群（321）へさらに移動し、9 世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯 1 基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッショウタン遺跡（108）で製鉄に伴うと見られる製炭窯が 7 世紀後半～末ないし 8 世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡（300）、下開発遺跡（301）が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡（147）、漆町遺跡（150）は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡（148）は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念仏寺塔遺跡（150）周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りにおいては、ここに比定すべきだろう。

5　中世の遺跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩渕城跡（268）、岩倉城跡（274）、波佐谷城跡（283）など、縄張図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加

賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12 世紀末までには二ツ梨奥谷 1 号窯（図郭外）で操業を開始したが、14 世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（図郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6　近世～現代

近代窯業の関連で、19 世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（165）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯（111）、小野窯（192）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括りで言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（土百（ドヒヤク）古墳：66）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿（ヒダリモンデン）古墳：30）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている訳である。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第 1 表　遺跡地名表

No	名　　称	種　別	時　代	備　　考
1	柴山水底貝塚	貝塚	縄文	
2	柴山中世墓	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城館跡	中世	
5	一台 A 遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡	縄文	加賀市指定史跡
		集落跡	古代	
7	柴山水底遺跡	貝塚	弥生	柴山出村遺跡 A 地点に所在する貝塚
8	柴山出村遺跡（A 地点）	集落跡	弥生	
	柴山出村遺跡（B 地点）	集落跡	古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	山の上遺跡	散布地	縄文	
10	佐美経塚	経塚	不詳	
11	日末経塚	経塚	不詳	
12	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
13	茶臼山 A 遺跡	散布地	不詳	
	茶臼山 B 遺跡	散布地	縄文	
14	茶臼山祭祀遺跡	その他（祭祀）	古代（奈良）	
15	月津オカ遺跡	散布地	古墳・中世	
16	月津 A 遺跡	散布地	古代（奈良）	
17	額見町遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古墳～中世	
18	額見神社前 A 遺跡	散布地	古墳	額見町遺跡の一部
19	額見神社前 B 遺跡	散布地	縄文	額見町遺跡の一部
20	串町遺跡	散布地	縄文・不詳	
21	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
22	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
23	念仏林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
24	**矢田新遺跡**	**集落跡**	**古代（奈良）**	

No	名　　称	種　別	時　代	備　　考
25	刀柯塚遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古代～中世	
26	矢田Ａ遺跡	散布地	縄文	
27	矢田Ｂ遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部
28	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
29	白のほぞ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
30	左門殿古墳	古墳	古墳	円墳
31	茶臼山古墳	古墳	古墳	円墳、２段築成
32	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
33	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
34	念仏林古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
35	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室、家形石棺
36	狐森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
37	矢田俣屋古墳群	古墳	古墳	円墳 14、前方後円墳 3、不明 1、木芯粘土室
38	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
39	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳 3、前方後円墳 1
40	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
41	養輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
42	狩津石山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
43	中村古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
44	矢田野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
45	下栗津Ａ横穴群	横穴墓	不詳	横穴７～８
46	慈経塚	経塚	不詳	
47	下栗津Ｂ横穴群	横穴墓	不詳	横穴２
48	慈遺跡	散布地	弥生～古墳・中世	
		集落跡	古墳～古代	
49	慈Ｂ遺跡	散布地	古代	
50	慈Ｃ遺跡	散布地	古墳	方墳？
51	狩津Ａ遺跡	散布地	縄文	
52	狩津Ｂ遺跡	散布地	縄文	
53	狩津Ｃ遺跡	集落跡	古墳	
54	**矢崎宮の下遺跡**	**集落跡**	**縄文～中世**	
55	**薬師遺跡**	**集落跡**	**古墳～古代**	
56	串カンノヤマＡ遺跡	散布地	古代（奈良）	
57	串カンノヤマＢ遺跡	散布地	古墳	
58	串カンノヤマＣ遺跡	散布地	古墳	
59	今江両ノ山遺跡	散布地	弥生	
60	狐山遺跡	集落跡	古墳	
61	土百遺跡	散布地	縄文	
62	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
63	五郎座貝塚	貝塚	縄文	
64	矢崎Ｂ古墳	古墳	古墳	
65	狐山古墳	古墳	古墳	
66	土百古墳	古墳	古墳	
67	御幸塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小松市指定史跡
68	今江横穴群	横穴墓	不詳	横穴４
69	御幸塚城跡	城館跡	中世	土塁と曲輪の一部
70	串古窯跡	生産遺跡	中世末	製陶
71	日末瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	焼瓦窯
72	大領遺跡	散布地	古代	
73	浅井畑古戦場	その他の墓	中世末	県指定史跡
74	林超勝寺跡	社寺跡	不詳	
75	林遺跡（林タカヤマ古窯跡群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯３、南加賀古窯跡北群
75	林遺跡（林製鉄跡）	生産遺跡	古代	製鉄炉２、製炭窯４、鍛冶炉２、鋳型坑２
76	井口遺跡	散布地	不詳	
77	林八幡神社経塚	経塚	中世（鎌倉）	
78	津波倉ホットジ遺跡	横穴墓	中世（室町末）	地下式坑６、２基調査

No	名　　称	種　別	時　代	備　　考
79	大谷山貝塚	貝塚	縄文	
80	小山田コガダニ遺跡	散布地	不詳	瓦片散布地
81	小山田スギトギ製鉄跡	生産遺跡	不詳	
82	小山田オクサダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	
83	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	
84	本場古墳群	古墳	古墳	円墳 4
85	本場古墳	古墳	古墳	
86	池田城跡	城館跡	不詳	
87	本場温泉遺跡	散布地	縄文	
88	本場 A 遺跡（本場遺跡 H 地区）	生産遺跡	古代（奈良）	製鉄炉 1、製炭窯 2
89	本場 B 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
90	本場 C 遺跡	散布地	弥生	
91	本場遺跡 A 地区（1 号遺跡）	生産遺跡	古代（平安）	製炭窯 3、瓦片散布地
92	本場遺跡 B 地区（2 号遺跡）	生産遺跡	古代（平安）	製鉄炉 2、製炭窯 2
93	本場遺跡 C 地区（3 号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
94	本場遺跡 D 地区（4 号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1、製炭窯 1
95	本場遺跡 E 地区（5 号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
96	本場遺跡 F 地区（6 号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
97	本場遺跡 G 地区（7 号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄炉
98	本場遺跡 D 地区（8 号遺跡）	横穴墓	不詳	横穴 1
99	大曲遺跡	散布地	不詳	瓦片散布地
100	長谷醤油屋の山遺跡	散布地	不詳	瓦片散布地
101	三谷遺跡	散布地	縄文	
102	三谷 B 遺跡	散布地	弥生～古墳	
103	三谷トガ谷遺跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
104	三谷大谷遺跡	集落跡	古代～中世	
105	三谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1、瓦片散布地
106	蓮台寺城跡	城館跡	不詳	小規模な物跡か
107	蓮代寺ムコンヤマ製鉄跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	製鉄炉 1、製炭窯 1
108	蓮代寺ガッショウタン遺跡	生産遺跡	古墳	製炭窯 3、瓦片散布地
109	蓮代寺 A 遺跡	散布地	不詳	瓦片散布地
110	本江古窯跡	生産遺跡	近世	製陶
111	蓮代寺窯跡	生産遺跡	近世末	西隅九谷「蓮代寺窯」
112	蓮代寺瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	焼瓦窯
113	蓮台寺跡	社寺跡	中世	沼田氏菩提寺「蓮台寺」比定地
114	安宅関跡	その他	不詳	県指定史跡
115	安宅住吉神社遺跡	散布地	不詳	
116	安宅中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
117	安宅大塚古墳	不詳	不詳	磯石塚とも墳丘の昔石とも、現存せず
118	小松城跡	城館跡	近世	本丸・二ノ丸・三の丸の一部、本丸櫓台は小松市指定史跡
119	大川遺跡	集落跡	近世	近世小松城下町・泥町の町屋跡
120	幸町遺跡	生産遺跡	中世（室町）	鍛冶
121	多太神社境内遺跡	散布地	中世（室町）	埋納銭出土地
122	本折城跡	城館跡		本折氏居館跡伝承地の一
123	八日市地方遺跡	散布地	縄文・中世	
		集落跡	弥生	環壕集落
124	上小松遺跡	散布地	古代（平安）	
125	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
126	梯川鉄橋 B 遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
127	島田 A 遺跡	散布地	古墳～古代	
128	島田 B 遺跡	散布地	古墳	
129	御館遺跡	城館跡	中世（室町）	
130	銭塚遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世（室町）	一向一揆・梯川新七郎重親居館伝承地
131	松梨遺跡	散布地	縄文～弥生・中世	
		集落跡	古墳～古代	
132	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	

No	名　　称	種　別	時　代	備　　考
133	長田南遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
		集落跡	中世（室町）	
134	中ノ江遺跡	散布地	古墳～中世	
135	高堂遺跡	集落跡	弥生～中世	
136	高堂四方堂遺跡	散布地	弥生	
137	小長野遺跡	散布地	不詳	
138	小長野Ｂ遺跡	散布地	古墳	
139	小長野Ｃ遺跡	集落跡	古代	
140	大長野Ａ遺跡	集落跡	弥生～中世	
141	大長野Ｂ遺跡	散布地	不詳	
142	牛造宮の島遺跡	集落跡	古代（平安）	
143	千代デジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
144	牛造ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世	
145	平面梶川遺跡	集落跡	弥生	梶川に分断された左岸側急斜地
146	平面梶川Ｂ遺跡	散布地	弥生	梶川に分断された右岸側急斜地
147	白江梶川遺跡	集落跡	弥生・中世	
148	白江堀跡	城館跡	中世（室町）	白江新助景平・景盛屋敷伝承
149	**白江遺跡**	**散布地**	**古墳～中世**	**漆町遺跡の一部**
150	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	
151	一針遺跡	散布地	縄文	
152	一針Ｂ遺跡	集落跡	弥生～古墳	
153	一針Ｃ遺跡	集落跡	弥生～古墳	
154	定地坊跡	社寺跡	中世（室町）	
155	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
156	千代オオキダ遺跡	散布地	縄文～弥生	
		集落跡	弥生～中世	
		古墳	古墳	方墳６
157	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
158	千代城跡	城館跡	中世（室町）	
159	千代本村遺跡	散布地	古墳	
160	横地遺跡	散布地	縄文	
161	佐々木遺跡	集落跡	古代	財氏居宅跡（奈良）
162	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	
163	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
164	打越遺跡	散布地	古代	
165	若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉窯」、連房式登窯
166	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
167	吉竹Ｂ遺跡（吉竹遺跡 19 地区）	散布地	古墳	旧河道の堆跡
168	千木野遺跡	散布地	縄文	
	千木野（A）遺跡	古墳	古墳	方墳８
	千木野（B）遺跡	集落跡	古墳	
169	蟹生１号墳	古墳	古墳	所在不詳、現存するのは現代残土の山
170	釜谷古墳・釜谷２号墳	古墳	古墳	切石横横穴式石室
171	若杉オツボ山１号窯跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯
172	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
173	八幡遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～古墳・古代（奈良）・中世（鎌倉）	
		その他の墓	古代（平安）	土坑墓
	八幡古墳群	古墳	古墳	円墳８、木芯粘土室
	八幡若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「八幡若杉窯」、八幡６号墳を削平して築いた連房式登窯
174	花木田遺跡	集落跡	古墳～中世	
175	軽海西芳寺遺跡	集落跡	縄文～中世	
176	大谷口遺跡	散布地	弥生	
177	軽海遺跡	散布地	弥生～中世	
178	亀山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
179	軽海中世墓群	その他の墓	中世（室町）	集石墓９

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
180	軽海廃寺	社寺跡	古代（平安）	大興寺伝承地
181	西芳寺遺跡	社寺跡	古代（平安）	西芳寺伝承地
182	古府しのまち遺跡	集落跡	弥生～古代	
183	古府遺跡	集落跡	古代（平安）	
184	古府フドンド遺跡	散布地	古代（平安）	
185	十九塚山遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国分寺推定地
186	十九塚山中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
187	古府横穴	不詳	不詳	
188	古府シマ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
189	南野台遺跡	散布地	縄文	
190	小野遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一端
191	小野スギノキ遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一端
192	小野窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「小野窯」
193	前田利常公灰塚	その他の墓	近世	前田利常公が茶毘に付された地とされる
194	植田の虫塚	その他	近世末	害虫の供養供養と駆除方法を記した石柱、小松市指定史跡
195	植田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	
196	植田ミヤンタン遺跡	散布地	不詳	
197	植田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
198	植田フルカワ遺跡	散布地	古墳	
199	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世（室町）	
200	植田遺跡	散布地	古代	
201	植田塚	不詳	不詳	
202	植田後山古墳群	古墳	古墳	円墳 9、木棺直葬、木芯粘土室
203	植田山古墳群	古墳	古墳	円墳 12、方墳 4
204	御菩提所古墳	古墳	古墳	円墳
205	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落、河田山 10 ～ 12 号墳が重複
		その他の墓	古代（奈良）	火葬墓、河田山 1 号墳の西側に所在
206	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳 2、前方後方墳 2、円墳 22、方墳 34、不明 1、木棺直葬、木芯粘土室、切石積横穴式石室
	河田横穴	横穴墓	不詳	地下式坑、河田山 54 号墳の南に開口
207	河田山 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南都　八里・河田山支群、河田山 60 号墳の北西斜面に所在
	河田山古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南都　八里・河田山支群
208	河田 B 遺跡	散布地	縄文・古代（奈良）	
209	河田 C 遺跡	散布地	不詳	
210	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式坑 6、横穴 1、不明 1、3 地点で計 8 基
211	穴場横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2 基
212	上八里横穴群	横穴墓	中世（室町）	横穴 11 基
213	上八里中世墓跡	その他の墓	中世（室町）	
214	上八里 A 遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
215	上八里 B 遺跡	散布地	古代（奈良）	
216	上八里 C 遺跡	横穴墓	古墳	横穴 2 基
217	上八里 D 遺跡	散布地	古代（奈良）	
218	上八里 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南都　八里・河田山支群
219	上八里 2 号窯跡	生産遺跡	不詳	地下式窯窯、能美古窯跡南都　八里・河田山支群
220	谷内横穴	不詳	不詳	
221	河田館遺跡	散布地	縄文・中世	
222	下田地割遺跡	散布地	不詳	
223	佐野 A 遺跡	散布地	弥生	
224	佐野 B 遺跡	散布地	古墳	
225	佐野八之田遺跡	散布地	古代	
226	狭野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
227	河田向山ドド遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
228	河田向山古墳群	古墳	古墳	円墳 7
229	八里向山 A 遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
230	八里向山Ｂ遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代（奈良）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
231	八里向山Ｃ遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代（奈良）	
		集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳１、木棺直葬
232	八里向山Ｄ遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳２、木棺直葬
233	八里向山Ｅ遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		古墳	古墳	方墳１
		集落跡	古代	
234	八里向山Ｆ遺跡	散布地	縄文	
		古墳	古墳	円墳 10、木棺直葬
		その他の墓・横穴墓	中世（室町）	集石墓１、横穴３
235	八里向山Ｇ遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
236	八里向山Ｈ遺跡	その他の墓	中世（鎌倉）	集石墓群、96 基調査
237	八里向山Ｉ遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南部　八里・泉台支群
238	八里向山Ｊ遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能美古窯跡南部　八里・泉台支群
239	里川Ａ遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯２、製炭坑約 20
240	里川Ｂ遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
241	里川Ｃ遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
242	里川Ｄ遺跡	散布地	縄文	
243	里川Ｅ遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
244	里川Ｆ遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
245	里川Ｇ遺跡	散布地	不詳	
246	遍泉寺・クボタＡ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
247	遍泉寺・クボタＢ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	社寺（隆明寺）又は城館伝承地
247	立明寺古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯（瓦陶兼窯）
248	立明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
248	隆明寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院、複数ある伝承地の一
249	遍泉寺遺跡	散布地	縄文	
250	宮の奥墳墓群	その他の墓	（平安）	墳墓４、３基調査、２号墓は鎌倉時代に経塚に利用された？
251	通寺寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院、複数ある伝承地の一
252	常徳寺跡	社寺跡	中世（室町）	一向一揆・宇川常徳の居宅跡とも
253	鵜川堀跡	城館跡	不詳	一向一揆・宇川常徳の居城伝承地
254	鵜川横穴	不詳	不詳	地下式坑？
255	仏大寺仏泥寺跡	社寺跡	中世	
256	仏大寺とうの迫古墳	古墳	古墳	
257	仏生寺跡	社寺跡	中世	
258	仏生寺塚	経塚	中世	
259	ブッショウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳２、木芯粘土室
260	中海Ｂ遺跡	集落跡	古墳～中世	
	（伝）長寛寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院、地名伝承のみ
261	中海Ｃ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
262	中海遺跡・岩淵遺跡	散布地	縄文	
	岩淵上野遺跡	散布地	旧石器・中世	
263	長寛寺中世墓跡	その他の墓	中世	
264	赤穂谷口遺跡	散布地	縄文	
265	松の木谷横穴群	不詳	不詳	存在自体が不明、５基開口とされる
266	赤穂谷スギノキ谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴９、地下式坑４
267	善興寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院
268	岩淵城跡	城館跡	中世	
269	仏ヶ原城跡	城館跡	中世	
270	仏御前屋敷跡・仏御前墓	その他の墓	古代（平安）	小松市指定史跡
271	麦口遺跡	散布地	縄文	
272	麦口中世墓跡	その他の墓	中世	
273	千麦口横穴群	横穴墓	不詳	横穴３

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
274	岩倉城跡	城館跡	中世（室町）	
275	榧の木山遺跡	散布地	縄文	
276	浅隆寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
277	瀧岡寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院
278	松谷廃寺	社寺跡	奈良	8 世紀前半に遡る古代山林寺院
	松谷寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
279	平野塚跡	城館跡	中世（室町）	一向一揆・平野某詰城伝承地
280	江指城跡（山神山砦跡）	城館跡	中世（室町）	
281	蓮花寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
282	波佐谷遺跡	散布地	中世（室町）	
283	波佐谷城跡	城館跡	中世（室町）	一向一揆・宇津呂丹波守詰城伝承地
	（伝）波佐谷松岡寺跡	社寺跡	中世（室町）	
284	波佐谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴 13，地下式坑 5
285	六橋遺跡	集落跡	縄文	
286	麻畑尾谷遺跡	散布地	縄文	
287	松岡寺跡	社寺跡	中世（室町）	
288	火打山横穴群	横穴墓	不詳	横穴 3
289	こたい谷横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
290	穴山横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
291	池城経塚	経塚	中世（室町）	
292	狸山横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
293	能美古墳群　寺井山・三池山支群	古墳	古墳	円墳 1，方墳 1，不明 4，県指定史跡「寺井山遺跡」
294	能美古墳群　和田山支群	古墳	古墳	前方後円墳 1，円墳 13，方墳 2，不明 7，木棺直葬，国指定史跡「和田山・末寺山古墳群」
295	和田山下遺跡	散布地	縄文・古墳	
296	石子遺跡	散布地	中世	
297	湯谷遺跡	散布地	古墳	
298	秋雲遺跡	散布地	古代（平安）	
299	高座遺跡	集落跡	縄文・古墳・中世	
300	雄久・尾尻遺跡	集落跡	縄文～中世	東大寺領櫛生庄比定地
301	下開発遺跡	集落跡	古墳～古代（平安）	東大寺領櫛生庄比定地
302	下開発ケモンミヤ遺跡	集落跡	古代（平安）～中世	
303	下開発笠白山遺跡	集落跡	縄文・中世	
	下開発笠白山古墳群	古墳	古墳	円墳 28，木棺直葬，木芯粘土室
	笠白山製鉄跡群	生産遺跡	不詳	製鉄炉 8
304	荒屋古墳群	古墳	古墳	円墳 9，方墳 11
305	下徳山 A 遺跡	散布地	古代（奈良末～平安）	
306	下徳山 B 遺跡	散布地	古代（平安）	
307	下徳山 C 遺跡	散布地	不詳	
308	下徳山 D 遺跡	生産遺跡	古代（奈良末）	須恵器窯ほか、能美古窯跡南部　下徳山支群
309	下徳山御陵山古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯ほか、能美古窯跡南部　下徳山支群
310	下徳山杉谷古窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南部　下徳山支群
311	和気小しょうぶ谷 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良末）	須恵器窯、能美古窯跡南部　俵山谷支群
312	和気小しょうぶ谷 2 号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南部　俵山谷支群
313	和気狐谷遺跡	散布地	古代	
314	上徳山谷山西谷古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南部　俵山谷支群
315	和気俵山谷北遺跡	散布地	古代	
316	和気白石古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南部　俵山谷支群
317	和気俵山谷奥遺跡	生産遺跡	古代（平安）	土師器焼成坑、能美古窯跡南部　俵山谷支群
318	和気俵山谷 1 号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南部　俵山谷支群
319	和気俵山谷 2 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良末～平安）	須恵器窯、能美古窯跡南部　俵山谷支群
320	和気小しょうぶ谷遺跡	散布地	古代	
321	和気古窯跡群（和気 1 ～ 3 号窯跡）	生産遺跡	古代（奈良末～平安）	須恵器窯、能美古窯跡南部　和気峠山支群
322	下徳山金谷地古窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南部　和気峠山支群
323	下徳山トモサダ遺跡	散布地	不詳	
324	和気和田見遺跡	散布地	不詳	
325	和気和田見古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南部　俵山谷支群

No	名　　称	種　別	時　代	備　　考
326	和気下和気古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群
327	和気近世窯跡	生産遺跡	近世	
328	和気矢口Ａ遺跡	散布地	縄文	
329	和気公文屋遺跡	城館跡	不詳	
330	和気中和気古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群　俵山谷支群
331	虚空蔵城跡	城館跡	中世	
332	虚空蔵山横穴群	横穴墓	不詳	
333	寺畠古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群
334	寺畠墓跡坂古墳	古墳	古墳	
335	鍋谷社跡	社寺跡	不詳	
336	鍋谷中世墓群	その他の墓	中世	
337	鍋谷横穴	横穴墓	不詳	
338	鍋谷城跡	城館跡	不詳	
339	金剛寺跡	社寺跡	不詳	
340	金剛寺坂中世墓群	その他の墓	中世	墳墓
341	徳山寺跡	社寺跡	不詳	
342	土徳山Ａ遺跡	散布地	古代	
343	土徳山近世窯跡	生産遺跡	近世	製陶
344	湯屋チョウヅカ遺跡	その他の墓	中世	墳墓 11
345	辰口座寺	社寺跡	不詳	
346	辰口遺跡	散布地	縄文	
347	湯屋古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能美古窯跡北群
348	湯屋遺跡	散布地	古墳～古代（平安）	
349	旭台北砦跡	城館跡	中世	
350	旭台南砦跡	城館跡	中世	
351	旭台Ａ遺跡	散布地	縄文	
352	旭台Ｂ遺跡	散布地	古代（平安）	
353	来丸旭台遺跡	散布地	縄文	
354	火釜Ａ遺跡	散布地	縄文	
355	火釜Ｂ遺跡	散布地	古代（平安）	

参考文献

イ　石川県教育委員会 (1992) 石川県遺跡地図

石川県立埋蔵文化財センター (1986) 漆町遺跡Ⅰ

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 漆町遺跡Ⅱ

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 辰口西部遺跡群Ⅰ

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 白江梯川遺跡Ⅰ

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡Ⅲ

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡Ⅳ

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 白江梯川遺跡Ⅱ

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 蓮代寺地区遺跡Ⅰ

石川県立埋蔵文化財センター (1990) 小松市高堂遺跡

石川県立埋蔵文化財センター (1993) 能美丘陵東遺跡群Ⅰ

石川県立埋蔵文化財センター (1995) 石川県小松市荒木田遺跡

石川県立埋蔵文化財センター (1997) 能美丘陵東遺跡群Ⅱ

石川県立埋蔵文化財センター (1998) 能美丘陵東遺跡群Ⅲ

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅳ

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅴ

(財) 石川県埋蔵文化財センター (2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡

(財) 石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群

(社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
石川考古学研究会 (1988) 石川県城館跡分布調査報告
ウ　上野 與一 (1965) 考古篇 , 小松市史 4. 風土・民俗篇 , 小松市教育委員会 , 石川県
カ　軽海用水誌編纂委員会 (1996) 軽海用水誌 , 小松東部土地改良区 , p75-77. p201-221., 石川県
コ　小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (1999) 林タカヤマ窯跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2000) 矢田借屋古墳群 , 石川県
小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県
小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 千代オオキダ遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II. 矢田借屋古墳群 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VI. 隆明寺跡確認調査 松谷寺跡確認調査 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I, 石川県
小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦 , 小松市 , 石川県
小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園 , 小松市 , 石川県
タ　辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶臼山古墳群 , 石川県能美市
辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡 , 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III, 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶臼山古墳群 II, 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窯跡群 , 石川県能美市
テ　寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群 , 石川県能美市
ヘ　日置　謙 (1923) 石川県能美郡誌 , 能美郡役所 , p366-375. p642. p823. p1268-1269. , 石川県
日置　謙 (1925) 石川県江沼郡誌 , 江沼郡役所 , p679., 石川県
ホ　北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸 , 桂書房 , p193-208.

第Ⅱ章　白江遺跡発掘調査

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯

白江遺跡は、近年の埋蔵文化財試掘調査によって新たに確認された遺跡である。遺跡発見の契機は平成 15（2004）年、小松市白江町ロ 96 番１・３・４での宅地造成事業 1,432㎡に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての協議書が小松市教育委員会埋蔵文化財調査室に提出されたことに端を発する。当該事業区域は、周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれていなかったが、近隣に「漆町遺跡」が存在するため、地下の埋蔵文化財の有無及び状況を確認するため試掘調査が必要である旨を回答した。試掘調査の結果、遺構及び遺物・埋蔵文化財包含層が検出され、遺跡の存在が確認された。このことを受け、同年 10 月 15 日付け「埋蔵文化財包蔵地把握に関する報告書」を石川県教育委員会へ提出し、新規の遺跡「白江遺跡」の発見及び遺跡地図修正の旨を報告している。

その後、住宅建設の具体的な計画が決定した平成 19（2007）年４月 30 日、改めて埋蔵文化財の取り扱いについての協議書が提出されたが、その工事計画では、地盤改良工事として、工事面積 92㎡に対し、割合が 13.5％と高密度の柱状改良工事が実施されることが明らかとなり、この割合では遺跡の損壊と判断せざるを得ないため、工事実施前に発掘調査を実施することとなった。発掘調査に係る経費については、個人住宅建設事業に該当することから、国庫補助事業の対象と認め、平成 19 年度市内遺跡発掘調査事業において支出した。

平成 19 年５月 12 日付けの埋蔵文化財発掘調査の依頼を受け、５月 23 日に発掘調査実施の回答、５月 29 日に埋蔵文化財の取扱いに関する協定書の締結を行い、６月４日より現地調査に着手した。

第４図　白江遺跡　調査区位置図 (S=1/3,000)

2　調査の経過

（1）調査方法

発掘調査対象区域は、面積が92㎡と狭小で、区画に至っても定形ではなく、住宅建設計画に沿ったものであった。そのため、グリッド設定は任意ではなく、調査対象区域の近接地に、業者委託によって設置した基準点及び水準点に基づく国土座標に従い、発掘調査全般の作業を実施した。

また遺構図面については、現地において1/50平面図、1/20調査区壁面断面図等を作成している。

（2）発掘作業の経過

平成19（2007）年

6月4日（月）　晴　ユニットハウス建上、機材搬入

6月5日（火）　晴　表土除去作業

6月6日（水）　晴　本日より作業員を投入しての作業を開始する（調査区内保守準備、調査区壁面清掃、調査区遺構精査、調査区北側排水溝掘削）。

6月7日（木）　晴　包含層掘削、遺構精査（西側）

6月8日（金）　晴後曇　遺構精査

6月11日（月）　曇　水汲み、包含層掘削

6月12日（火）　晴　包含層掘削、遺構精査

6月13日（水）　晴　遺構精査、遺構検出状況写真撮影

6月14日（木）　曇後雨　包含層掘削、調査区南壁清掃、写真撮影

6月15日（金）　曇　調査区排水作業

6月18日（月）　晴　調査区南側壁面A－A'断面図作成、調査区西側壁面B－B'断面図作成、本日にて作業員の作業終了。

6月19日（火）　晴　遺構平面図作成

6月20日（水）　晴　調査区平面図作成、調査区北側壁面C－C'断面図作成、調査区エレベーション図作成

6月21日（木）　曇　現場後片付け作業

6月25日（月）　雨後曇　重機による埋戻作業、以上で現地発掘調査作業終了。

（3）整理等作業の経過

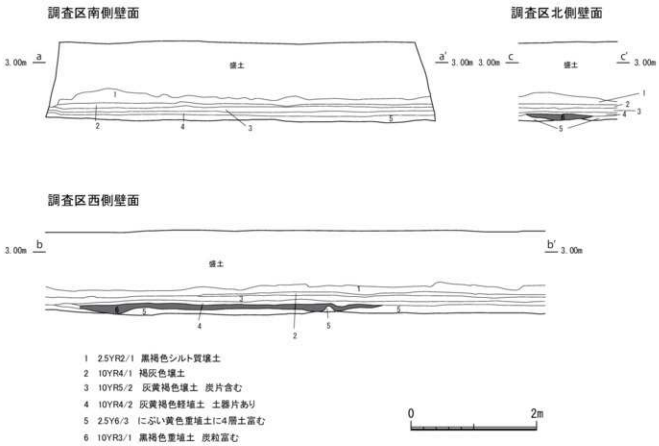
平成２２年度国庫補助事業として、出土遺物の注記・分類・接合・実測・トレース・図版作成・原稿執筆・報告書刊行の各作業を行った。

第２節　発見された遺構

1　基本層位について

当該調査区の現況は、すでに宅地造成されており、表土除去作業においては、現況面から約80㎝の厚さに盛られている客土の除去にかなりの時間を費やすこととなった。その客土の直下には旧耕作土と考えられる黒色シルト質～褐灰色壌土層が堆積しており、包含層はさらにその下層に位置している。包含層は約10～15㎝の厚さで堆積しており、炭化物片や土器片の混入が見られた。土質は灰黄褐色壌土～軽埴土を呈している。

現況面から総じて約120～130㎝で地山面に到達し、本調査区内の壁面土層の観察からは、大きな層位の乱れなどはなく、各層は均一な堆積状況であった。



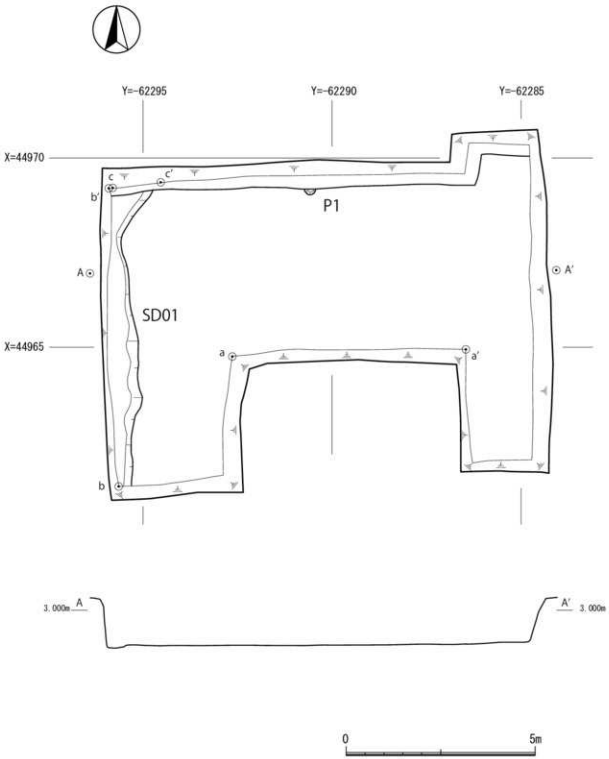
第５図　白江遺跡　調査区壁面断面図 (S=1/60)

２　遺構

発掘調査区域の中で検出された遺構は溝１条、柱穴１本のみであり、調査区全体の遺構密度は非常に薄い状況であった。

溝（SD01）については、調査区の西端側で検出されたもので、幅約 100cm以上、深さ約 15cm以上を測る。また溝の埋土は調査区北側及び西側壁面断面の観察によって、炭化物片が豊富に含まれる黒褐色重埴土の堆積が認められた。これらの検出状況により、南北方向に沿って流れていた溝の縁辺部と考えられる。但し、埋土の分布状況において、一部に斑状を呈し、明瞭な堆積を捉えることができなかった箇所の存在することや、出土遺物が少なくとも今回調査での SD01 検出範囲からは確認されなかったことから、浅い落ち込みの可能性もある。

柱穴（Ｐ１）は調査区中央部の北端側で検出されたもので、直径 25cm、深さ９cmを測る。黒褐色軽埴土の埋土を確認している。



第 6 図　白江遺跡　調査区平面図 (S=1/100)

第３節　出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、総点数にして 49 点で、全て遺物包含層からの出土である。出土遺物の内訳は、須恵器片 11 点・土師器片 37 点・砥石片１点で、そのいずれも小破片であった。本報告に当たっては、その内図化し得た５点を掲載している。１～３が須恵器、４が土師器、５が砥石である。

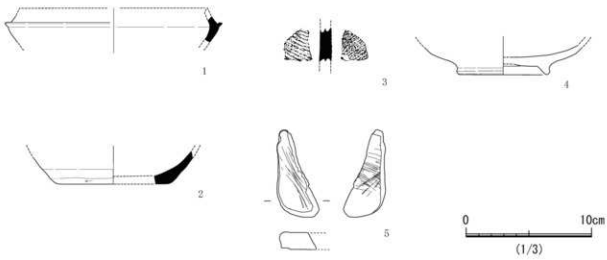
１は坏Ｈ身の口縁部破片で、口縁端部及び底部にかけては欠損している。口縁部は内傾気味で、受部は上方にのびる。器肉は薄めの作りである。胎土の特徴により南加賀窯産ではないことが観察されるが、何れの所産であるかは判然としない。時期は器形の特徴により、７世紀前半代に位置付けられるものと考えられる。

２は埦Ａの底部破片である。外面底部下端においてヘラ削り調整、底部に糸切りの痕跡が認められる。時期は古代Ⅵ２～Ⅵ３期に位置付けられるものと考えられる。

３は甕の胴部破片で、内外面にタタキ調整を施している。

４は埦の底部破片で、全体的に摩耗が著しいが、内面に黒色処理が施されているのを確認できる。時期は古代Ⅵ２～Ⅵ３期に位置付けられるものと考えられる。

５は砥石片で、石材の種類は流紋岩である。隅丸長方形を呈する中砥石と考えられるが、その大半は欠損している。砥面は２面をもち、それぞれの面には使用の痕跡を示す線刻跡が確認できる。



第７図　白江遺跡　出土遺物実測図 (S=1/3)

第４節　小結

調査に至る経緯の中でも触れているが、白江遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地「漆町遺跡」に近接している。漆町遺跡は、梯川左岸域約 200,000㎡に広がる弥生時代中期から中近世にかけての複合遺跡であるが、この漆町遺跡の側から見ると、白江遺跡は漆町遺跡西端の縁辺部に位置している。このような地理的環境及び、既往の試掘調査成果から、白江遺跡は漆町遺跡の一部としての性格を有すると考えられている。

今回の調査では、総じて遺構の検出・遺物の出土ともに少なく、概ね奈良～平安時代の散布地の様相を示すものであった。この調査成果を積極的に評価すれば、漆町遺跡の縁辺部に当たる遺跡としての再認識が可能である。集落遺跡としての漆町遺跡の時代は、大別すると古墳時代前期～中期と平安～鎌倉時代の２時期にかけて盛期があることが明らかとなっているが、本発掘調査で得られた出土遺物の様相により、白江遺跡は漆町遺跡の平安～鎌倉時代にかけての盛期に含まれるものであったことが示唆される。更なる白江遺跡の全容解明のためには、継続して漆町遺跡を含む梯川流域の遺跡の研究・検討が必要である。

参考文献

小松市教育委員会，2007：「第Ⅳ章　漆町遺跡発掘調査（白江・ツカマツ地区）」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

第２表　白江遺跡　出土遺物観察表

図版	番号	出土位置	分類１	分類２	名称	法量（cm）	焼成	色調	調整	残存率	備考
7	1	包含層	須恵器	食器	坏H身	残存高 2.0	堅	青灰		2/36	南加賀産ではない
7	2	包含層	須恵器	食器	埦A	底径 9.2 残存高 2.1	普	灰	外面ケズリ	2/36	底部糸切り
7	3	包含層	須恵器	貯蔵具	甕	胴部破片	普	灰	内面タタキ、外面タタキ		
7	4	包含層	土師器	食器	埦	高台径 7.4 高台高 0.6 残存高 2.3	生	浅黄橙	摩耗顕著	10/36	内面黒色処理
7	5	包含層			砥石	残存長 6.9 残存幅 2.9 残存厚 1.3					重量 31.25g 流紋岩

第Ⅲ章　矢崎宮の下遺跡発掘調査

第１節　調査の概要

１　調査の概要

平成 19（2007）年９月 27 日付けで、事業主である吉田勝人氏より小松市教育委員会埋蔵文化財調査室に対し、小松市矢崎町ネ 91・92 番地での店舗併用住宅建設に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議があった。当該事業区域が周知の埋蔵文化財包蔵地「矢崎宮の下遺跡」に含まれることから、地下の埋蔵文化財の有無及び状況を確認するため試掘調査が必要である旨を回答した。試掘調査の結果、事業区域の一部は過去の土採取によって削平されていたが、旧地形が残存する範囲において、遺構及び遺物・埋蔵文化財包含層が検出され、「矢崎宮の下遺跡」が存在することが確認された。

その後、埋蔵文化財の状況と工事計画との調整を行った結果、工事では埋蔵文化財が確認された区域全域を掘削する必要があることから、埋蔵文化財の現状保存は不可能と判断した。よって、埋蔵文化財が確認された区域 108㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。発掘調査に係る経費については、零細なために費用負担が困難と判断される事業者の開発事業に該当することから、国庫補助事業の対象と認め、平成 19 年度市内遺跡発掘調査事業において支出した。なお、重機による表土除去作業に係る経費については、事業主が負担した。

平成 19 年 11 月１日付けの埋蔵文化財発掘調査の依頼を受け、11 月５日に発掘調査実施の回答、11 月８日に埋蔵文化財の取扱いに関する協定書の締結を行い、11 月 15 日より現地調査に着手した。

第８図　矢崎宮の下遺跡　調査区位置図（S=/3,000）

2　既往の調査

矢崎宮の下遺跡は、平成９年（1997）に県営ほ場整備事業（木場潟西部地区矢崎工区）の施工に伴う、石川県教育委員会文化財課の分布調査によって、新発見の遺跡としてその存在が確認されたものである。また平成 10（1998）年には、埋蔵文化財発掘調査が（財）石川県埋蔵文化財センターにより実施されており、その成果が報告書として刊行されている（石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター，2002：『小松市矢崎宮の下遺跡』）。

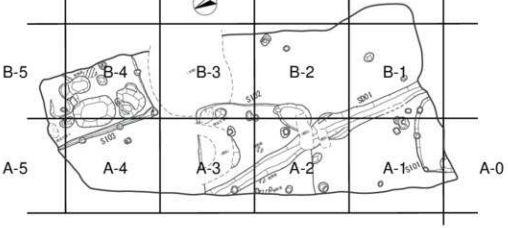
その成果によると、調査区は南北２つの調査区に分かれ、それぞれパイプライン・排水路埋設位置を中心に幅１m～３m、距離約 30 ～ 46 mという狭小な範囲の調査であったが、遺構として土坑・溝・穴等が、遺物として縄文土器・須恵器・須恵器・土師器・陶磁器・石器が検出されている。縄文時代から中世まで、時期幅の広い多様な遺物の出土が見られるけれども、時期を特定できた遺構は、13 世紀代の土師器皿が出土した土坑の他に無く、また建物跡の検出もされていない。よって、この調査成果のみをもって、当遺跡における人々の連綿とした営みの傍証として積極的に論ずるには、現段階では性急の感がある。

また今回の小松市教育委員会での調査は、台地側に残存していた遺跡範囲であって、（財）石川県埋蔵文化財センターの調査区は、ほ場整備事業区域での調査であることから、同じ矢崎宮の下遺跡内であっても、調査区の地理的環境が大きく異なることを付言しておきたい。

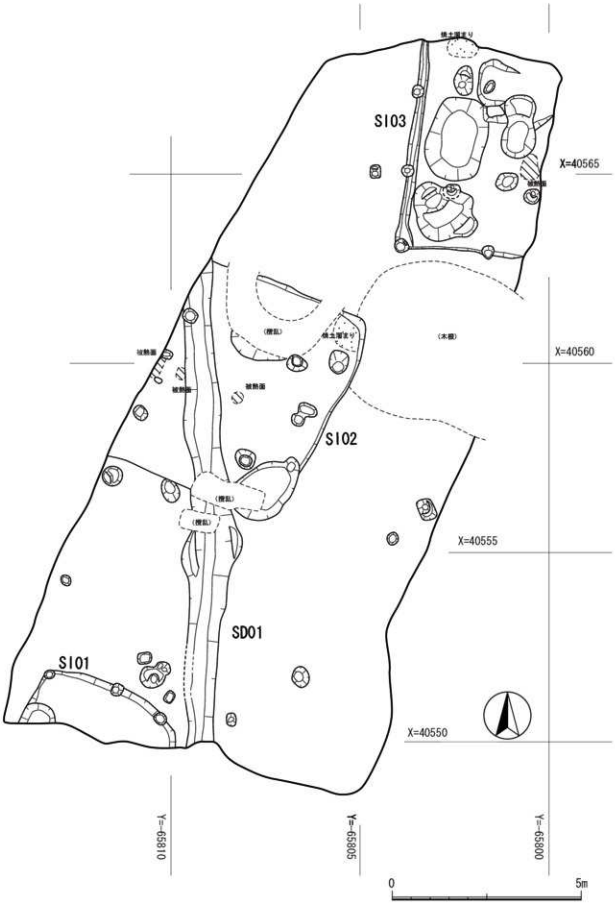
3　調査の方法

（１）調査方法

旧地形が残存する調査区の範囲は、北東～南西方向を長軸方向に持つもので、その面積は 108㎡と、比較的狭小な範囲であったこともあり、グリッドは国土座標には基づかず、調査区域に合わせ任意に設定した。グリッドは表土除去後、調査区の軸及び範囲に沿って５m×５mの間隔で設定し、南西端を始点として、南西方向を軸にアルファベット（A～C）、南北方向を軸にアラビア数字（０～５）を配し、調査区全域がグリッド内に収まるよう区割りを行った。



第９図　矢崎宮の下遺跡　調査区区割図（S=1/200）



第 10 図　矢崎宮の下遺跡　調査区平面図（S=1/100）

（2）発掘作業の経過

平成19（2007）年

11月15日（木） 曇時々雨　本日より矢崎宮の下遺跡発掘調査開始、重機による表土除去作業。

11月29日（木） 曇　A－1Gｒにて SI01 遺構プラン検出。

11月30日（金） 晴　本日より作業員を増員、SI02 遺構プラン検出。

12月1日（土） 曇後雨　SI03 遺構プラン検出。

12月2日（日） 曇後雨　SD01 遺構プラン検出、SI02 を切っている。

12月8日（土） 曇時々雨　遺構平面図作成、現場引渡期日が目前のため、調査室挙げての作業。

12月10日（月） 曇　プレハブ後片付け、補足調査、以上で矢崎宮の下遺跡調査終了。

（3）整理等作業の経過

平成20年度国庫補助事業として、出土遺物の洗浄、及び一部注記・分類・接合作業を実施。また平成22年度国庫補助事業として、出土遺物の注記・分類・接合・実測・トレース・図版作成・原稿執筆・報告書刊行の各作業を行った。

第2節　発見された遺構

1　竪穴建物

SI01

〈立地・規模・形態〉調査区の南端部、A－0～1及びB－1Gｒに位置している。削平の影響を受けなかった範囲が検出されたものである。建物規模は、東西軸方向に残存する一辺から、395cmを測る。この建物が正方形と仮定すると、面積は約15.6㎡で、小型の建物となる。但し長方形の可能性もあるため、この値自体はあくまでもこの面積以上の建物である、という参考値を超えるものではない。

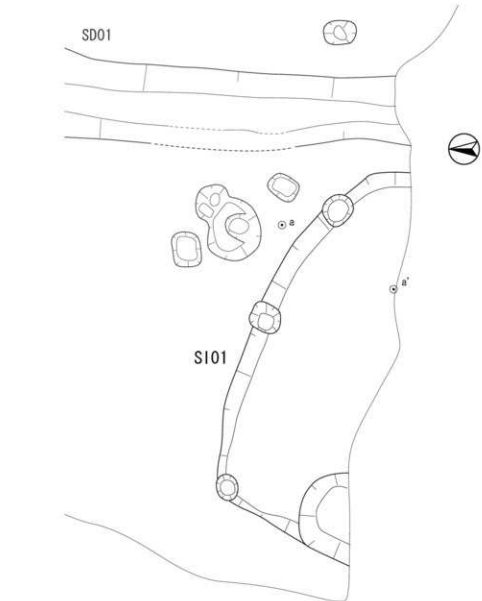
〈柱穴〉西側壁に沿って、3本の壁支柱と考えられる柱穴が検出されている。それぞれの柱間規模は東から140cm・180cmと、その値を異にしている。

〈埋土堆積と遺物出土〉周辺の木根等により、良好な埋土土層断面図を得ることができなかったが、黒褐色土をベースとしながら、その土質及び含有物の有無により上下2層の堆積を確認することができた。出土遺物として土師器・須恵器があるが、竪穴建物の一部の調査のためか、少量に留まる。

SI02

〈立地・規模・形態〉調査区の西部中央、A－2～3及びB－2～3Gｒに位置している。建物自体は、北西～南東方向に流れる SD01 によって切られている。また建物の西側端部の全面、ちょうどカマドの位置する箇所が削平により失われ、また北側は木根による自然の営力を、そして南側の一部は後世の撹乱孔の影響を受けるなど、遺存状態はあまり良好であるとは言えない。竪穴内には4本主柱を伴い、西側端部には、カマドの焚口を示す被熱面とともに、長楕円形を呈す凝灰岩のソデ石が検出され、僅かながらも、カマドの付設位置の痕跡を確認することができた。また被熱面は他にも、カマド焚口より東西方向を軸としながら、2箇所にその痕跡が認められた。建物規模は、南北軸方向で590cm、東西軸方向で残存495cmを測る。この東西軸方向は、西側が削平を受けているけれども、4本主柱のそれぞれ対向する壁との距離から推定して、615cm程と考えられる。この値を採用すれば、面積は約36.3㎡となり、比較的大型の規模を有する建物であったと思われる。

〈柱穴〉4本主柱の規模は径40～58cm、深さ26～46cmを測る。但し西側の主柱P3、P4については、上面が削平の影響を受けていることを確認しているので、計測値は残存値として理解すべきで



第 11 図　矢崎宮の下遺跡　SI01 実測図（S=1/40）

ある。逆に建物の廃絶時に近い状態で遺存していると考えられる主柱Ｐ１、Ｐ２では、建物床面から主柱底面への掘り込みに、一段のテラスを形成する。柱間規模は、Ｐ１・３間、Ｐ２・４間の長辺軸はいずれも 310㎝、短辺軸はＰ１・２間は 295㎝、Ｐ３・４間は 285㎝を測る。

〈埋土堆積と遺物出土〉埋土土層断面の観察によって、黒褐色土をベースとする３層の堆積を確認した。また遺物は土師器・須恵器が定量出土している他、大型の砥石や鍛冶炉壁等の鍛冶関連遺物も見られる点が特筆される。

〈掘方土坑・建物内土坑・焼土溜まり〉木根の影響により全体像は明らかでないが、建物の北側、主柱Ｐ１からＰ３を結ぶライン上に位置し、掘方土坑の一部と考えられる落ち込みを確認している。

また、建物南東隅において、残存値で長径 205㎝以上・深さ 50㎝以上を測る土坑状の遺構を検出したが、土層断面の観察では建物埋土を切るように掘り込まれており、この建物とは時期を異にするものである。建物北東隅には焼土溜まり（SJ01）が、長軸 105㎝・短軸 65㎝を測る円形状の範囲をもって見られ、鍛冶関連遺物との関連を窺わせる。

SI03

〈立地・規模・形態〉調査区の北側、Ａ－４～５及びＢ－４～５Ｇｒに位置している。建物の北側及び東側は削平の影響により消失している他は、遺存状態は良好である。建物西側において、壁周溝と支柱が確認されており、壁立式の建物であったと考えられる。さらに室内には３本の主柱（Ｐ１・２・３）が見られ、その配置から４本主柱を伴っていたと理解される。東側中央よりやや南において、広範囲に被熱面が検出されており、ここにカマドの付設位置を推定できる。建物規模は残存する主柱配置及び壁の状況から、南北軸方向で 600㎝、東西軸方向で 460㎝程の長方形を呈していたと考えられる。この値を採用すると、面積は 27.6㎡となり、中型の建物となる。

〈主柱穴・壁支柱・壁周溝〉主柱の規模は径 37 ～ 79㎝で、Ｐ３が突出して大きい。深さはＰ１が 60㎝、Ｐ２が 52㎝、Ｐ３が 66㎝で、Ｐ３が最も深いが、主柱全体で見れば径ほどの差異はない。柱間規模は、Ｐ２・３間の長辺軸は 290㎝、Ｐ１・２間の短辺軸は 215㎝を測る。壁周溝は建物西面において検出したもので、規模は概ね上端幅 17 ～ 29㎝を測り、南西隅で 49㎝とやや広がる。

〈埋土堆積と遺物出土〉埋土土層断面の観察によって、黒褐色土をベースとする３層の堆積を確認している。遺物は土師器・須恵器を中心として多量の出土が見られ、当調査で検出された遺構の中でもその量は顕著である。

〈掘方土坑・焼土溜まり〉掘方土坑として認識できたのは３基（SK01・02・03）である。SK03 の規模が最も大きく、土坑上端で長軸 195㎝、短軸 140㎝を測る。また建物北西部端において、焼土溜まり（SJ02）が検出されている。北面は削平により消失しているが、残存範囲で長軸 81㎝・短軸 50㎝を測る円形状の広がりが確認できた。

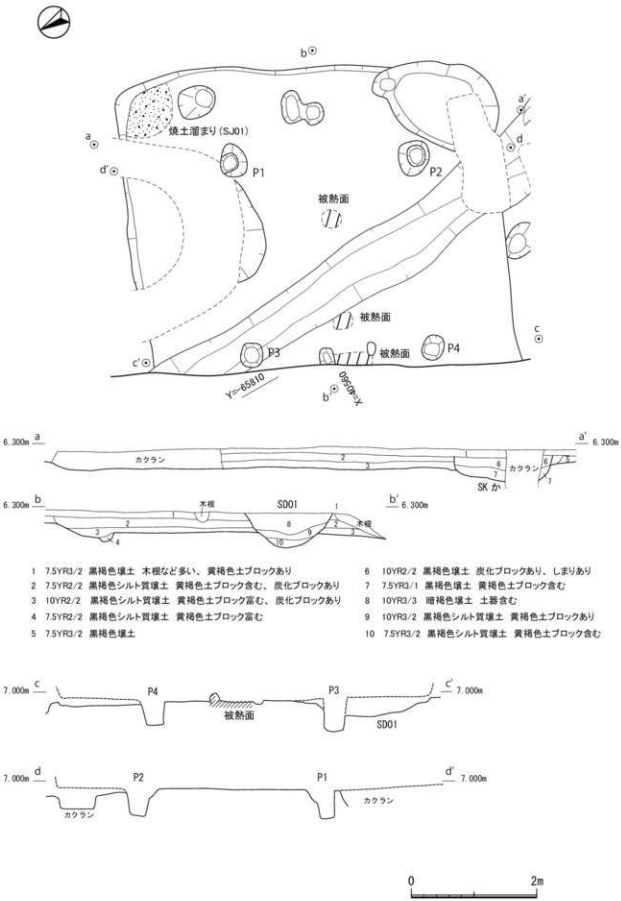
２　溝

SD01

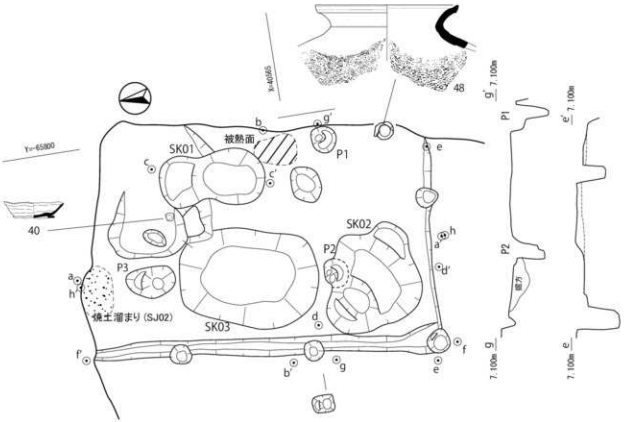
調査区のＡ－１～３及びＢ－１～３Ｇｒで検出された、幅約 65 ～ 150㎝・深さ約 55㎝を測る溝で、SI02 を切りながらほぼ南北方向に沿って延びている。溝の中央部付近は、上端が東西方向に広がり、両側にテラス状の段を形成している。

溝の埋土は土層断面の観察によって、上層の暗褐色壌土と、下層の黒褐色土をベースとする層に大別される。下層の黒褐色土は、含有物の有無等により、さらに二分される。出土遺物には土師器・須恵器があるが、重複して切り合う SI02 出土遺物の混在が避けられなかった点も否めない。

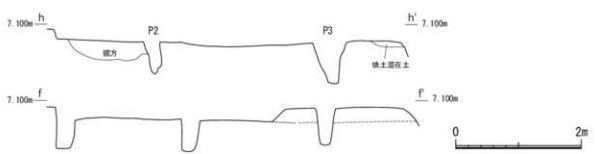
（文責　岩本 信一）



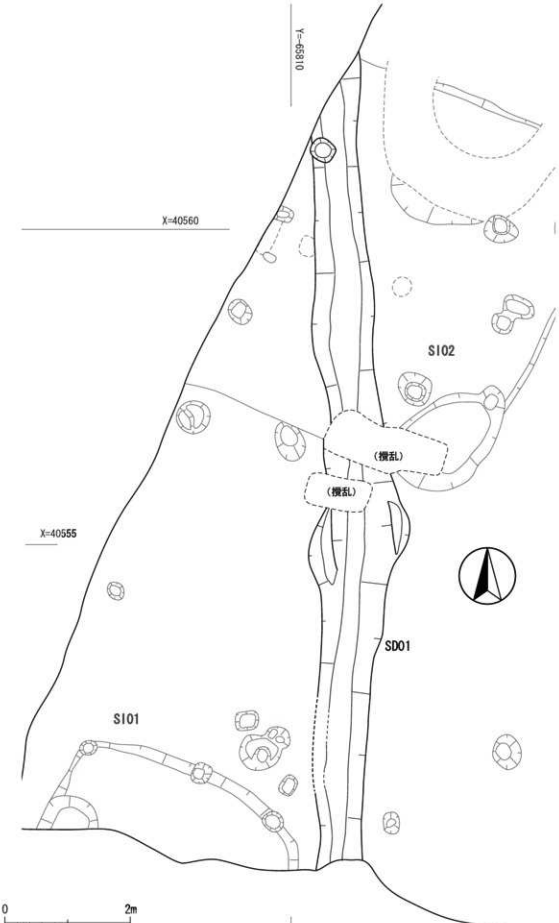
第 12 図　矢崎宮の下遺跡　SI02 実測図（S=1/60）



1 7.5YR2/2 黒褐色壌土 土器片含む、炭化ブロック含む
2 10YR2/3 黒褐色壌土 黄褐色土ブロック含む、土器片含む
3 10YR2/2 黒褐色シルト質壌土 黒褐色土ブロックあり
4 10YR5/6 黄褐色シルト質壌土に黒褐色土ブロック混入、炭化ブロックあり
5 10YR2/3 黒褐色壌土 黄褐色土ブロック含む
6 7.5YR3/2 黒褐色シルト質壌土 黄褐色土ブロック、炭化ブロック含む
7 7.5YR2/2 黒褐色シルト質壌土 黄褐色土ブロック含む、炭化ブロックあり
8 7.5YR4/3 褐色シルト質壌土 黄褐色土ブロック富む、炭化ブロック含む 焼土あり
9 10YR2/3 黒褐色シルト質壌土 黄褐色土ブロック含む
10 10YR3/1 黒褐色埴壌土 黄褐色土ブロック、炭化ブロックあり
11 10YR4/4 褐色壌土 炭化ブロック含む
12 7.5YR4/4 褐色壌土 炭化ブロック含む、黄褐色土ブロックあり
13 7.5YR2/2 黒褐色壌土 黄褐色土ブロック、炭化ブロックあり
14 5YR3/3 暗褐色壌土 黄褐色土ブロック、炭化ブロックあり、焼土ブロック富む
15 10YR2/3 黒褐色壌土
16 7.5YR2/2 黒褐色壌土 黄褐色土ブロックあり
17 10YR4/4 褐色壌土 黄褐色土ブロック含む、炭化ブロックあり



第 13 図　矢崎宮の下遺跡　SI03 実測図 (S=1/60)



第 14 図　矢崎宮の下遺跡　SD01 実測図 (S=1/60)

第３節　出土遺物

１　古墳時代以降の遺物

竪穴建物などを中心に、古墳時代以降の遺物が遺物収納箱（645 × 380 × 145㎜）で 13 箱ほど出土している。そのうちの 1/4 が古墳時代中～後期のもの。3/4 が飛鳥時代末期～奈良時代前葉のもので、いずれも検出された竪穴建物や溝の時期に該当する。これ以外の時期では、平安時代中期（10 世紀後半）に位置付けられる土師器埦Ｂと土師器釜が出土するが、僅少であり、近隣からの混在と思われる。

以下に、中心となる古墳時代中～後期の土器と飛鳥時代末期～奈良時代前葉の土器、そして両時期に伴うと思われる石製品や鉄製品等について述べることとする。

（１）古墳時代中～後期の土器（１～ 24）

当期の土器は、SI02 を中心として、包含層及び SI03 の埋土上層に混在する形で出土している。SI02 はこの時期に位置づけられる竪穴建物であるが、包含層出土や SI03 のものも含め、全て SI02 に伴う遺物として一括することには検討を要する。以下にその様相を報告する。

出土土器には、須恵器と土師器があり、須恵器と土師器の比率は、概ね１：９程度の割合。ただし、食膳具では須恵器片 41 点に対し、土師器 68 点といった割合で出土している。

須恵器は、図示した坏Ｈ蓋・身、有蓋高坏、直口壺、中甕が出土している。坏Ｈ 40 点、高坏１点、直口壺１点、中甕口縁片１点と胴片 26 点が出土する。ただ、中甕については、在地産の甕の中で当期に位置づけられる資料を抽出しかねており、実態はこの倍の破片数が出土していると理解される。

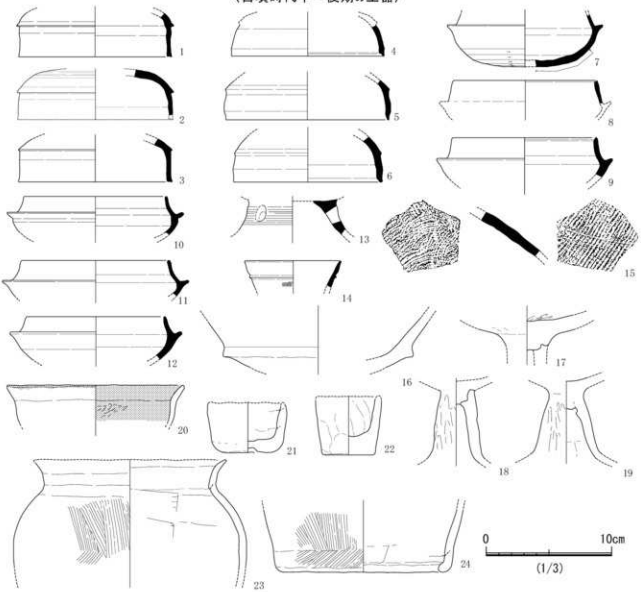
食膳具の大半を占める坏Ｈは、陶邑窯産と推定されるものが 11 点、南加賀窯産と判断されるものが 29 点出土している。陶邑窯産は１～３の蓋の稜形態のシャープさや口縁部端の面形成、２の天井ケズリのカキ目状呈す特徴等、作りが精緻で、７の身も同様に薄作りである。器形特徴も８の口縁部立ち上がり形態や蓋の稜の直下する形態は、陶邑窯の TK23 型式に対比できる特徴で、それは 14 に示した陶邑窯産の直口壺形態や波状文の秀麗さからも窺える。しかしながら、同じ陶邑窯産と思われる須恵器中甕の胴部内面には同心円文が残る。TK23 型式の中甕内面の当て具痕は、スリ消しか、内面木製無文当て具がほとんどで、その点からすると若干下り気味に考える必要性もある。

これに対し、南加賀窯産の坏Ｈは、４～６の蓋の稜形成が微弱でシャープさを欠いたものとなっており、口縁部端は内傾段か内傾面、厚手の印象を持つものが主である。これに伴う身は９が口縁部端に内傾段をもつ以外は、全て口縁部端の丸い形状で、薄く作られている。内傾段をもつタイプも端丸形態のタイプも、総体的に北陸古墳土器編年４様式Ⅱ１期（望月 2009）に位置づけられ、二ツ梨豆岡向山 11･12 号窯の資料に対比できよう。13 の高坏脚は、低脚高坏のタイプで、基部径の太さから、上記坏Ｈと同時期か、若干遡る４様式Ⅰ期新相に位置づけられるものと考える。

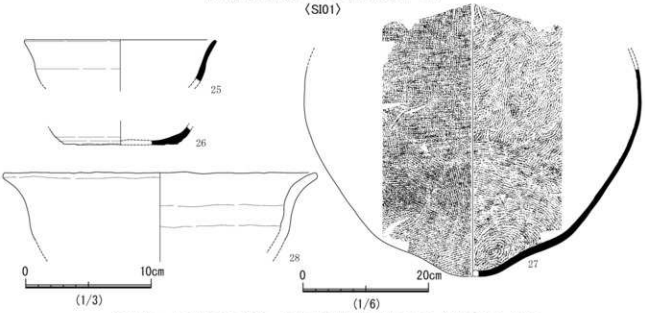
土師器は、高坏 62 点、埦Ｈ６点、手づくね土器７点、小型壺４点、そして短胴小釜や長胴釜が多数出土している。煮炊具は飛鳥時代以降のものとの識別が困難のため、どれだけの点数が帰属できるか不明だが、食膳具の数倍の出土量があると理解している。

食膳具は大半を高坏が占め、埦は少ない。図化していないが、口縁部内湾器形を呈す埦Ｈと口縁部外屈の埦Ｈとがあり、いずれも橙褐色の胎土を有す。高坏においても同様胎土が使われるが、砂粒を含む胎土もあり、16 のような坏部下端に稜をもつ大型坏のタイプは後者の胎土が多い。19 の脚も同様のタイプと思われる。出土する高坏の大半はこの大型タイプであり、坏部埦形器形を呈す通常タイプは少ない。18 のやや細いタイプの脚は通常タイプと予想され、外面に粗いミガキが入る。他に図

〈古墳時代中～後期の土器〉



〈飛鳥時代末期～奈良時代前葉の土器〉
〈SI01〉



第 15 図　矢崎宮の下遺跡　遺物実測図 1(27 は S=1/6, 他は全て S=1/3)

示した 20・21 の手づくね土器が出土している。20 のような底面の平滑なタイプが主体で、橙褐色に焼き上がる胎土を使用している。

食膳具以外では、小型壺と釜類、甑がある。小型壺は胴部のみの破片で、胎土は橙褐色に焼き上がる砂粒含まない粘土。釜類には砂粒を多く含む胎土が使用される。飛鳥時代以降に比べて、ハケ目調整の線が粗く、小釜に比べて長胴釜の比率が高い傾向を持つ。なお、24 は平底の底部を切り取り穿孔したような痕跡を持つもので、桟渡しタイプの甑底部と思われるものである。

以上の土師器の特徴を整理すると、小型丸底壺がほとんど確認されない点と高坏が大型高坏主体へと変わっている点から、古墳４様式Ⅰ期に併行する時期の特徴を有す。椀Ｈが僅少である点は、３様式に遡る可能性を秘めるが、SI01 で出土する内黒椀Ｈ 20 を当期に位置づけるとすれば、４様式Ⅰ期に下るだろう。椀は良質の胎土をもち、内面にはミガキ調整が入り、口縁部は外に開く器形を呈す。

（２）飛鳥時代末期～奈良時代前葉の土器（25 ～ 74）

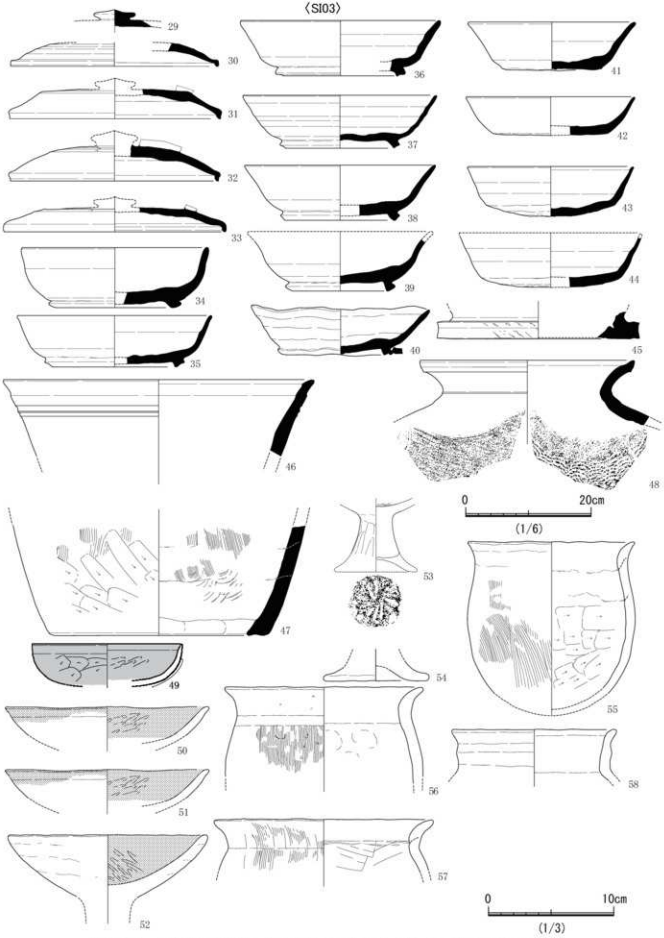
当期の土器は SI03 を中心に、SI01、SD01、包含層より出土している。食膳具は須恵器が主体で、土師器は両面赤彩品と内黒焼成品とがあり、貯蔵具は須恵器のみ。煮炊具は土師器主体だが、須恵器甑が少量ながら確認されることを特徴とする。以下に、遺構ごとの土器様相を述べる。

【SI01】 竪穴建物の一部の調査のため、出土土器は少なく、図示できたものは、25 の坏Ｂ身と 26 の坏Ａ、27 の中甕胴部、28 のハケ目調整鍋のみである。須恵器坏の器形より、三湖台古代土器編年の３Ｂ期～３Ｃ期に位置づけられる（望月 2007、以下で示す時期も同様）。なお、当期の須恵器については、ほとんどが南加賀窯産と思われるものだが、27 の中甕のみは能美窯産で、薄手の作りをする。

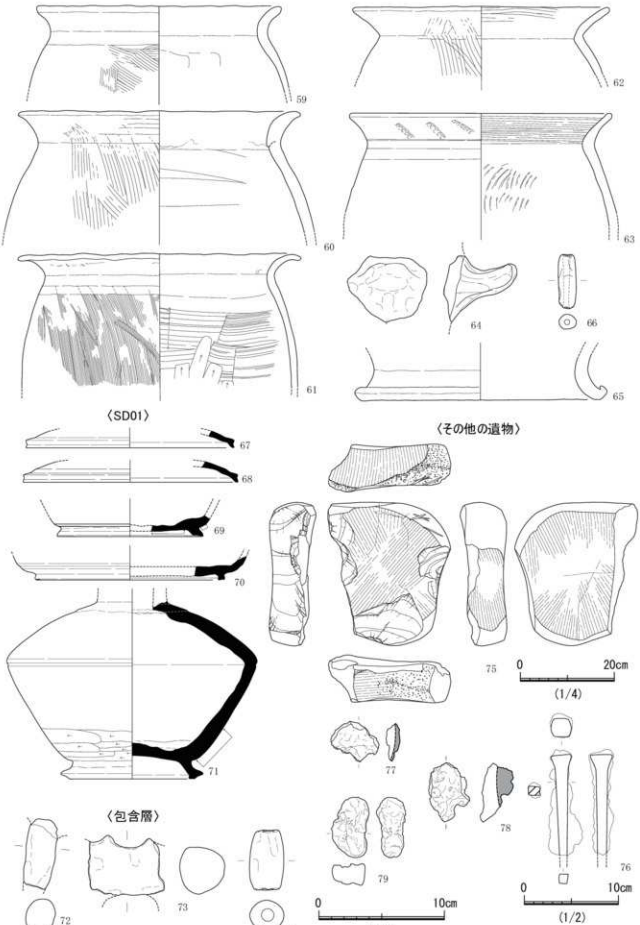
【SI03】 最も出土量の多い遺構であり、須恵器が３箱、土師器が５箱出土している。

須恵器は南加賀窯産に統一される。甕の出土量が多いが、図示できたのはほとんどが食膳具である。坏Ｂが主体で、法量は１法量にほぼまとまり、坏Ｂ蓋は扁平鈕の付く扁平器形を呈するものに統一される。口縁部は折り曲げ形態にほぼ統一されるが、図化していないが返り蓋が１点出土している。坏Ｂ身は高台が低く踏ん張る形態で、体部がやや外傾して立ち上がる、扁平器形を呈するものが主体である。ただ、39 のような高台がやや高く、体部が外反気味に開く、比較的深い器形を呈するものもあり、これらの中では古手の様相を示す須恵器である。このような古手の様相を持つ坏Ａは 41 である。小型の底部から体部外反して立ち上がるもので、その他の 42 ～ 44 の坏Ａは扁平器形を呈す坏Ｂに対応するだろう。他の器種では、甑の出土が目立つ。46・47 とも砂粒等混和材を含む胎土のもので、47 はハケ目調整を伴うなど土師器的である。以上、須恵器は概ね３Ｃ期、その中では古相呈す一群だろう。

土師器食膳具では両面赤彩品が少なく、内黒焼成品が主体的に存在する。両面赤彩は図示した椀Ｆ 49 の他に、坏Ｂや坏Ａが確認されるが、椀Ａの確認はなく、胎土は南加賀窯と思われる。内黒焼成品は高坏Ｈのみで、いずれも非ロクロ成形品。坏部が浅く、薄手で大型呈す 50・51 と厚手で深身呈す作りの稚拙な 52 とがある。脚は中実タイプで、低く脚端の広がらない器形を呈す。いずれも地元産胎土であり、窯場製品とはなっていない。土師器煮炊具も同様に地元産胎土でほぼ占められる。器種は短胴小釜と長胴釜、手付き深鍋、甑とがあり、短胴釜 55 ～ 57 は口縁部の短く外反する縦ハケ目調整を施す在来型技法のもの。長胴釜も同様の在来型技法で、古い器形特徴を残す 59・60 が主体だが、61 のような薄手で長胴器形が強いタイプも存在する。ただ、額見町遺跡資料に比較すると、須恵器から求めた３Ｃ期には 61 のような器形特徴が通常であり、当土師器群は在来型の傾向が強く出ていると言えよう。なお、図示した 63 の叩き成形施す長胴釜と、図化はしていないが、胴部カキ目調整を施す薄手の短胴釜が各１点出土している。いずれも南加賀窯産のもので、長胴釜は灰白色を



第 16 図　矢崎宮の下遺跡　遺物実測図 2(48 は S=1/6、その他は全て S=1/3)



第 17 図　矢崎宮の下遺跡　遺物実測図 3(76 は S=1/2,75 は S=1/4, 他は全て S=1/3)

呈し、内面胴部に当て具痕を残す。初期の北陸型煮炊具であり、３Ｂ期的様相でもある。

【SD01】 SI02 に重複しているため、遺物の混在が多いが、図示した４点の須恵器が当遺構の主体となる。67・68 は３Ｃ期に位置づけられる様相を持つが、69 の坏Ｂ身は底面のケズリ調整や高台の踏ん張る形態など、３Ｂ期に遡る可能性が高く、径の大きな 70 も当期に見られる大型坏Ｂの可能性がある。

【包含層】 包含層出土のもので、特徴的なもののみを抽出して図化した。71 は須恵器長頸瓶である。８世紀代の肩張り器形のもので、円盤閉塞痕跡を持ち、肩部には沈線が入る。土師器では 72・73 の土師質馬形と 74 の土師質管状錘を図示した。馬形は鞍部を表現した胴部破片と脚部破片で、いずれも南加賀窯で生産されたものと見られる。管状錘は、太いタイプのもので、南加賀窯産の胎土をもつ。

（３）その他の遺物（75 ～ 79）

石製品、鉄製品、鉄関連遺物ともに、鍛冶関連の遺物である。大型砥石（75）と鍛冶炉壁（77・78）が古墳時代の竪穴建物 SI02 より出土しており、当竪穴建物に伴う可能性を有している。包含層出土の 76 の鉄釘や 79 の椀形鍛冶滓も SI02 の上層に位置しているため、当竪穴建物に伴う可能性が高く、古墳時代中～後期に鍛冶を行っていた資料と判断される。当竪穴建物内において鍛冶炉の存在は確認できていないが、竪穴の北東隅に確認される焼土溜まり（SJ01）は、そのような遺構の廃棄焼土または鍛冶炉の下部被熱であった可能性もある。竪穴建物では、大型砥石も出土しており、主に鍛練鍛冶を行い、砥石は鉄製品の研磨に使用されていたのだろう。

なお、椀形鍛冶滓が、極小サイズの含鉄系のものである点からも、製品製作の鍛練鍛冶を行っていた可能性を示唆する。（文責　望月 精司）

第３表　矢崎宮の下遺跡　古墳時代以降の出土遺物観察表

1．古墳時代中～後期の土器

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色調	焼成	残存	調整等	備考
SI02 他	1	須恵・坏H蓋	SI02 A3C・C3C＋A2Gr	口12.0、稜 12.4	微粗混・良質	外黄灰色 断面セピア	堅緻	1/10	シャープな作り	
	2	須恵・坏H蓋	SI02 上面	稜 12.4	微粗混・良質	外黒灰色 断面セピア	良好	1/4	天ウキ目状ケズリ	陶邑窯産としては焼成不良
	3	須恵・坏H蓋	B 2Gr	口12.2、稜 12.2	微粗混	外黒灰色 断面セピア	良好	1/10	シャープな作り	天井降灰
	4	須恵・坏H蓋	SI02 C3C・A7C 上層	口12.0	微知混微	灰色	良好	1/10	色ウキや稜微	
	5	須恵・坏H蓋	SI03 A3C	口12.8、稜 13.0	微知混微	灰色	堅緻	1/10	薄く作りよい	
	6	須恵・坏H蓋	SI03 A3C	口11.8、稜 11.6	微知混微	明灰色	良好	1/6	厚手で作りやや粗雑	
	7	須恵・坏H身	B 2Gr	受 12.3	微粗混	青灰色	堅緻	1/5	薄く作りよい、底ケズリ	
	8	須恵・坏H身	SI02 上面	口 11.4	微粗混	青灰色	堅緻	1/1	上端面シャープ	打下暗い胎土
	9	須恵・坏H身	SI02 内SJ01	口 11.4、受 13.8、立高 1.8	微知混微	灰色	良好	1/15	薄く作りよい、口内端窪有り	
	10	須恵・坏H身	SI02 D3C	口 11.3、受 14.0、立高 1.4	微知混微	赤（白）色	良	1/15	薄く作りよい	
	11	須恵・坏H身	SI02 C3C・A7C	口 11.5、受 14.7、立高 1.7	微知混微	赤（白）色	良	1/18	薄く作りよい	
	12	須恵・坏H身	SI02 C3C・A7C 2 層	口 11.0、受 13.6、立高 1.8	微知混微	明灰色	堅緻	1/36		
	13	須恵・有蓋高坏	B 3Gr	脚基 7.0	微知混微	青灰（白）色	良	脚1/2	ちゃ目調整	P孔スカシ3方
	14	須恵・直口壺	SD01 b 層	口7.5	微粗混	外黄灰色 断面セピア	堅緻	1/1	作りシャープで精緻、波状文は粗雑	良品
	15	須恵・中甕	SI02 D3C	—	微粗混	外青灰色 断面セピア	堅緻	1/1	外：Ha叩き後沈線、内：Ba 当て高級	薄手の作り
	16	土師・高坏	SI03 上面	—	粗・砂多	赤明褐色	不良	1/5		大型高坏タイプ?
	17	土師・高坏	SI02 上面	脚基 3.2	粗・砂多	くすんだ明色	良	1/6	外面内ミガキ	
	18	土師・高坏	SI03 上面	脚基 2.7	粗・赤土	明褐色	良好	1/6	外細明ミガキ	
	19	土師・高坏	SI03 上面	脚基 2.8	粗・赤土	明褐色	良	1/5	外細明ミガキ	
	20	土師・椀H	SD01 フクチ土	口 14.0	粗・白色土ヲ	黒色	良好	1/8	内ミガキ	内黒焼成
	21	土師・手づくね	SI02 上面	稜 4.0	粗・砂多	明褐色	良	2/3	外指頭痕、内ナデ口縁	内底黒焼
	22	土師・手づくね	SI02 上面	底 4.0	粗・砂多	黒色	不良	1/5	外底円痕、内粘土痕跡	
	23	土師・短脚壺A	SI02 A3C＋SD01	脚 13.6、脚 18.5	粗・砂多	赤明褐色	良好	1/6	外縦ハケ目、内横ヘラナデ	
	24	土師・甑H	SI03 上面	底 12.2	粗・砂多	くすんだ明色	不良	底1/1	外縦ハケ目、内横ヘラナデ	底部に残渣しげくり

2．飛鳥時代末期～奈良時代前葉の土器

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色調	焼成	残存	調整等	備考
SI01	25	須恵・坏B	SI01 フクチ	口 15.1	微知混微	灰色	堅緻	1/1		
	26	須恵・坏A	SI01 フクチ	—	微知混微	灰白色	良	底1	底ヘラ切り痕	
	27	須恵・中甕	SI01 フクチ＋A1Gr	脚 53.7	雲英混	灰色	良好	1/5	外 Ha 叩き後カキ目、内 Ba 当て具	
	28	土師・鍋A	SI01 フクチ	口 24.6	粗・砂多	淡黒色	良	1/15		
SI03	29	須恵・坏B蓋	SI03 上面	脚 3.3、稜高 0.8	微知混微	灰色	良好	脚1	重焼上類	
	30	須恵・坏B蓋	SI03 A3C・B7C 3 層	口 16.4	微知混微	灰色	良好	1/15		重焼上類
	31	須恵・坏B蓋	SI03 上面	口 16.6	微知混微	灰色	堅緻	1/3	天井ケズリ	重焼上類
	32	須恵・坏B蓋	SI03 上面	口 16.4	微知混微	灰色	堅緻	1/3	天井ケズリ	重焼上類
	33	須恵・坏B蓋	SI03 上面	口 17.5	微知混微	灰色	堅緻	1/5	天井ケズリ	重焼上類

遺構	番号	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色調	焼成	残存	調整等	備考
S03	34	須恵・坏B身	S03 上面	口14.6, 高4.75, 台10.4, 台0.05	南加賀粘土	明灰色	良好	1/4	底ヘラ切り痕	
	35	須恵・坏B身	S03 上面	口15.3, 高4.1, 台11.0, 台0.04	南加賀粘土	黄灰色	良好	1/3	底ヘラ切り痕、スノコ状痕	
	36	須恵・坏B身	S03 上面	口15.6, 高4.4, 台10.5, 台0.04	南加賀粘土	灰色	堅緻	1/9	焼ア、中空型貼付痕	
	37	須恵・坏B身	S03 A区・A下1層・D区	口15.3, 高4.2, 台9.4, 台0.065	南加賀粘土	明灰色	良好	2/3	底ヘラ切り痕	
	38	須恵・坏B身	S03 A区・A下	口15.0, 高4.4, 台9.4, 台0.055	南加賀粘土	（灰）白色	不良	1/3	底ヘラ切り痕	外底ヘラ記号
	39	須恵・坏B身	S03 上面	台8.6, 台0.8	南加賀粘土	灰色	良好	1/4	底ヘラ起こし痕	古手のタイプ
	40	須恵・坏B身	S03 一括2	口14.0, 高3.9, 台9.0, 台0.05	南加賀粘土	明灰色	堅緻	7/8	底ヘラ切り痕	外底に坏B蓋口縁片溶着分体に大きく歪み 内底擦耗痕有り
	41	須恵・坏A	S03 B下1層	口13.1, 高3.8	南加賀粘土	灰色	良好	1/2	底ヘラ切り痕	
	42	須恵・坏A	S03 上面	口13.3, 高3.1	南加賀粘土	灰色	良好	1/9	底ヘラ切り痕	
	43	須恵・坏A	S03 上面	口13.0, 高3.9	南加賀粘土	灰色	良好	1/3	底ヘラ切り痕	
	44	須恵・坏A	S03 上面	—	南加賀粘土	灰色	良好	1/3	底ヘラ切り痕	内底擦耗痕有り
	45	須恵・壺底部	S03 上面	底16.0	南加賀粘土	（黄）灰色	堅緻	底片	外底縁取き痕	
	46	須恵・甕	S03 一括7	口24.5	南加賀粘土	灰色	良好	1片		鼓取付人物土
	47	須恵・甕	S03 上面・D区	底17.0	南加賀粘土	灰白色	不良	底片	外面ハケ目後ケズリ、内面 当て板ハケ目、下端ケズリ	鼓取付人物土
	48	須恵・中甕	S03 一括1＋S032 上面	口23.8, 頸18.8, 口高3.5	南加賀粘土	灰白色	不良	1片	外面 叩き痕力不目、内面 当て	
	49	土師・椀形	S03 上面	口11.9	南加賀粘土・豆土	淡黄色	良好	1/6	外下半ケズリ、内ミガキ	内外赤彩
	50	土師・高坏H	S03・S032	口18.0	地元産・豆土	橙褐色	良	坏部片	内ミガキ	内黒焼成
	51	土師・高坏H	S03 A区・上面	口16.2	地元産滑石	淡黄色	良	坏部片	内ミガキ	内黒焼成
	52	土師・高坏H	S03 A下2層	口15.8	地元産滑石	くすんだ黄色	良	坏部片	内ミガキ、外粘土接続痕有	内黒焼成
	53	土師・高坏H	S03 C区	底4.0	地元産・豆土	橙褐色	良好	脚部片	杯内ミガキ、脚外ケズリ、脚根部赤彩痕跡に成形後着時刻み	
	54	土師・高坏H	S03 A区・B区	脚8.3	地元産・豆土	橙褐色	良好	脚部片	脚部上の刻線痕あり	
	55	土師・短脚小皿A	S03 A区	口13.2, 頸12.0, 脚13.3	地元産	淡黄色	良	1/4	外縁ハケ目、内下半ケズリ	外底黒斑
	56	土師・短脚小皿A	S03 B区	口15.8, 頸13.8, 脚15.6	地元産	橙色	良好	1/10	外縁ハケ目、内縁ヘラナデ	
	57	土師・短脚小皿A	S03 A区	口17.4, 頸15.1	地元産	くすんだ黄色	良	1/10	外縁ハケ目、内面調整	重量1，使用痕無
	58	土師・短脚小皿A	S03 一括5	口12.8, 脚12.0	地元産・砂多	橙褐色	良	1脚片		脚部補強か？古墳期のもの？
	59	土師・長脚皿A	S03 A下1層	口19.4, 脚17.2	地元産	くすんだ黄色	良	1/10	外縁ハケ目、内縁ヘラナデ	内面コゲ
	60	土師・長脚皿A	S03 C区	口22.4, 脚19.2	地元産	淡黄色	良	1/15	外縁ハケ目、内縁ヘラナデ	
	61	土師・長脚皿A	S03 D区・A区	口22.5, 脚18.2, 脚21.8	地元産	くすんだ黄色	良	1/10	外縁ハケ目 内縁ヘラナデ端下半縦ケズリ	外天井付着
	62	土師・長脚皿B	S03 A下1層・C区	口20.4, 脚16.1	地元産・砂多	橙色・黄褐黒	不良	1脚片	外縁用ハケ目、内縁ハケ目	古墳期のもの？
	63	土師・長脚皿B	S03 D区	口20.4, 脚17.9	南加賀粘土	灰白色	良	1/15	外縁用ハケ目、内面 当て板	鼓取付痕有り脚土
	64	土師・甕A	S03 —		地元産	淡黄色	良	肩下片		
	65	土師・甕B	S03 上面	底18.6	地元産・砂多	くすんだ褐色	良	底片		外底圧跡
	66	土師・皆状鉢	S03 一括3	台4.3, 口1.4, 孔0.4	地元産・砂多	橙褐褐色	不良	脚完		重量7.5 g，古墳後期？
S001	67	須恵・坏B蓋	S001 フクキ	口16.5	南加賀粘土	灰色	良好	1/1		
	68	須恵・坏B蓋	S001 フクキ	口17.0	南加賀粘土	灰色	良好	1/1		
	69	須恵・坏B蓋	S001 フクキ	台11.6, 台0.55	南加賀粘土	灰色	良	台片	外底ケズリ	
	70	須恵・坏B蓋	S001 上面	台15.0, 台0.45	南加賀粘土	灰白色	良	台片		
包含層	71	須恵・長頸瓶A	B 1 Gr	頸5.6 胴19.8 台11.2 胴高12.5 台高1.4	南加賀粘土	灰色	堅緻	3/5	外胴下ケズリ、外底爪状痕	胴部弓胴的膨張
	72	土師・皆形	A 1 Gr		南加賀粘土	淡黄色	良好	胴部片	指ナデ痕	黒写各種部表現
	73	土師・皆形	表土	—	南加賀粘土	淡色	良	胴部片	指ナデ痕	
	74	土師・皆状鉢	B 3 Gr	台4.8, 孔2.7, 孔1.0	南加賀粘土	くすんだ褐色	良好	完形		重量28.6 g

3．その他の遺物

遺構	番号	材質・種	出土地点	法量	重量	材質	残存	特徴等	備考
S032 他	75	石製・硬石	S032 D区	台15.1, 幅12.7, 厚4.8	1,267.7 g	砂岩	略完	底石面5箇所	
	76	鉄製・釘	A 2 Gr	台5.3, 幅0.1, 厚1.1	9.3 g	鍛造品	2/3	断面方形の釘	
	77	銅出・ヤリ型	S032 B区	台3.1, 幅3.8, 厚1.1	8.9 g	—	破片	ヤリ型か？は結木粒状の湿元を	
	78	銅出・ヤリ型	S032 C区(89?)	台4.7, 幅3.2, 厚2.4	24.0 g	—	破片	ヤリ型か？は結木粒状の湿元を	印に近くでたの説解
	79	銅出・梅形銅出弁	B 2 Gr	台4.8, 幅2.8, 厚2.3	35.1 g	洗鉄	1/2	下部はやや梅形なし、形保付者	

《遺物観察表凡例》

1．器種名について

器種名は基本的に、筆者秋澤の「額見町遺跡Ⅱ」に準拠しているので、詳細は参照のこと。

2．法量について

観察表の法量に示す土器等容器類の口は口径、受は受け部径、鉢はつまみ径、底は底部径、台は台径、脚は脚径、基は脚基部径、脚は脚部最大径、頂は頂部径を示し、高は器高、鉢高はつまみ高、立高は口縁部立ち上がり高、胴高は胴部高、頂高は頂部高を示す。単位は全てcmとした。

3．焼成について

土器の焼成は焼締まりの強い順から、堅緻一良好一不良の4段階表示で示した。

4．調整等について

観察表に示す須恵器、土師器の調整等については主要な成形、調整痕跡のみを記載し、煤の明き具種別については内面信雄氏の分類案に基づき示した（内面信雄 1988「須恵器煤類に見られる明き目文について」「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題」）。H類は平行線文、D類を同心円文とし、H a類は平行線間り込みに表変して木目のあるもの、H b類は右上がり斜交の木目のあるもの、H c類は左上がり斜交木目のあるもの、H e類は木目の見えないもの、D a類は木目の見えないもの、D b類は同心円形り込みに沿って同心円木目の見える2通り使用のもの、D c類は板目状木目のもの、SD類は本製無文当て具の年輪痕跡のものとした。

5．備考について

土器に関する備考では、煮炊き使用痕跡や使用に伴う煤痕跡、彩色や焼成状態、特殊な施文や器形特徴、ヘラ記号、重ね焼きを記した。なお、食膳具類の重ね焼き類型では、Ⅰ類は最身を使用状態の正位で重ねる一段かこ段積みのものである。

引用・参考文献

望月精司　2007　「三湖台地集落遺跡群の古代前半期土器様相」『額見町遺跡Ⅱ』小松市教育委員会

望月精司　2007　「出土遺物の分類」『額見町遺跡Ⅱ』小松市教育委員会

望月精司　2009　「南加賀窯跡群における在地窯の出現と地方窯成立」『石川考古学研究会会誌』第52号　石川考古学研究会

2　その他の時代の遺物

（1）縄文土器

1は沈線文が施される深鉢である。文様の意匠は明らかでないが、粗い砂が疎らに混和される胎土の特徴から、中期後葉の所産と考えられる。

2は櫛目の文様が施される条線文土器であり、後期前葉の所産と考えられる。

3については、如何な土器か不明である。口縁部の成形は粗く、少なくともこれを口縁とする器種とは考えられない。可能性としては器台のようなものが考えられ、器肉の厚さや入念とはいえない器面調整等を勘案すれば、中期の所産と考えられる。

4は、口縁部が大きく肥厚する特徴的な土器である。後期中葉の加曽利B式後半の土器に類似すると思われる。

5は、外反する縁帯部の破片で、器種は浅鉢と思われる。後期中葉の所産であろう。

6～9は同一個体片か同種の土器片であり、浅鉢である。後期中葉の東北系とされる羽状縄文を特徴とする土器である。10も同種と思われる浅鉢だが、器面の損傷のためによくわからない。11は同種の深鉢であろう。

12は、斜縄文を施す深鉢である。内湾する口縁部は加曽利B式系と共通する特徴とみてよいだろう。なお、拓影で区切り文のように見える部分は、発掘時の損傷である。

13は、網代圧痕のある深鉢底部である。網代の編み方は1本すくい1本おさえ1本送りである。

14は、注口土器の肩部である。後期中葉の所産であろう。

（2）弥生土器

15は弥生土器の下半部の破片である。ハケメの特徴から中期の所産と考えられる。

（3）石　器

16は凹基無茎式の石鏃である。

17は磨製石斧である。表面の風化のため分かりにくいが、剥離痕や損傷部分の観察では蛇紋岩製の搬入品と思われる。

18は礫石錘である。打欠は3箇所あるが、如何な理由によるものかは思い当たらない。

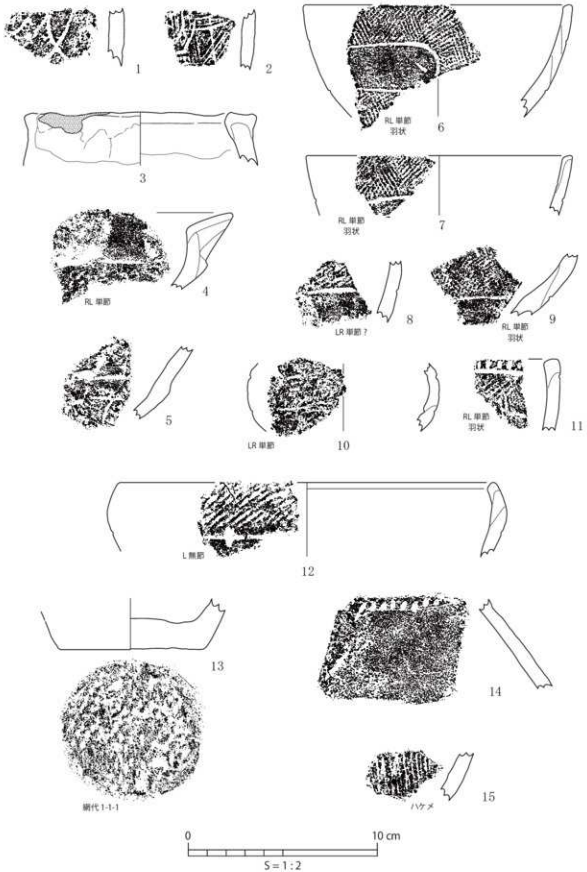
19は残核である。礫面剥片の腹面を作業面とする石核で、剥片の右側を折って打面として目的剥片の剥取を試みたようだ。

20は二次加工ある剥片であり、打面右側から右辺をへて左辺末端側に及ぶ。剥片の末端側を尖らせようとする加工であれば、石錐か石鏃の未成品の可能性がある。

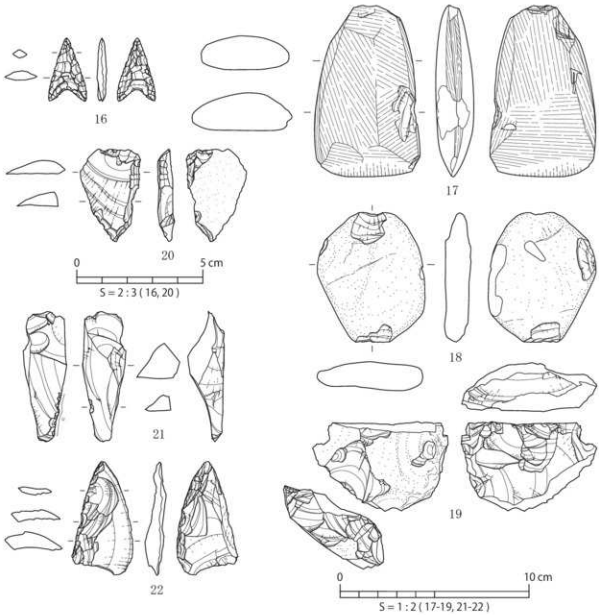
21は剥片としての属性を明確にできないが、1辺の細かな剥離は不揃いで、使用痕であろう。

22は二次加工ある剥片であり、打面側と末端側に施される。20と同様に石錐か石鏃の未成品か。

他に剥片が出土しているが、上述の石器との関係性は明らかでない。これらについては図化しておらず、属性表を参照されたい。（文責　宮田 明）



第 18 図　矢崎宮の下遺跡　遺物実測図 4(S=1/2)



第 19 図　矢崎宮の下遺跡　遺物実測図 5(16,20 は S=2/3, 他は全て S=1/2)

第４表　矢崎宮の下遺跡　その他の時代の出土遺物観察表

図	掲載	実測	出土位置	種別 / 器種	寸法 (cm) / 残率	表層色調	胎土色調	胎土混和物	備考
18	1	13	A-2 区	縄文土器 / 深鉢		7.5YR 7/3	7.5YR 8/2	粗 - 極粗砂含む	縄文中期後葉
	2	7	SI03 B-B' アゼ 3 層	縄文土器 / 深鉢		7.5YR 6/2	7.5YR 4/1	中 - 粗砂含む / 焼土粒あり	縄文後期前葉
	3	9	A-2 区	縄文土器	胴 :12/0.17	10YR 7/3	10YR 5/1	中 - 粗砂富む / 焼土粒極にあり	不詳（縄文中期？）
	4	8	SI03 C 区	縄文土器 / 深鉢		10YR 6/3	10YR 5/1	細 - 中砂極る富む	縄文後期中葉
	5	12	SI03 C 区	縄文土器 / 浅鉢		7.5YR 7/4	7.5YR 8/2	中 - 粗砂富む	縄文後期中葉
	6	1	SI03 C 区	縄文土器 / 浅鉢	口 :14/0.11	7.5YR 6/3	7.5YR 4/1	粗 - 極粗砂富む	縄文後期中葉
	7	3	SI03 D 区	縄文土器 / 浅鉢	口 :14/0.08	7.5YR 6/3	7.5YR 5/1	粗 - 極粗砂富む	縄文後期中葉
	8	6	SI01	縄文土器 / 浅鉢		7.5YR 8/4	7.5YR 4/1	中 - 粗砂富む	縄文後期中葉
	9	5	SI03 A-A' アゼ 3 層	縄文土器 / 浅鉢		7.5YR 7/3	7.5YR 4/1	粗 - 極粗砂富む	縄文後期中葉
	10	11	SI03 C 区	縄文土器 / 浅鉢	胴 :10/0.14	7.5YR 7/3	7.5YR 5/1	中 - 粗砂富む	縄文後期中葉
	11	4	SI03 C 区	縄文土器 / 深鉢		7.5YR 6/3	7.5YR 5/1	粗 - 極粗砂富む	縄文後期中葉
	12	10	SI03	縄文土器 / 深鉢	口 :20/0.06	7.5YR 6/2	7.5YR 5/1	粗 - 極粗砂富む	縄文後期中葉
	13	14	SI03 D 区	縄文土器 / 深鉢	底 :8/1.00	7.5YR 8/2	7.5YR 5/1	粗 - 極粗砂富む	縄文後期中葉
	14	2	B-2 区 撹乱	縄文土器 / 注口土器		10YR 7/3	10YR 5/1	中 - 粗砂富む	縄文後期中葉
	15	15	SI01 上面	弥生土器		2.5Y 7/1	2.5Y 6/1	細 - 中砂富む / 焼土粒極にあり	弥生中期

図	掲載	Serial	出土位置	種別	寸法 (cm)	重量 (g)	石材	備考
19	16	1	SI03 A-773	石鏃	長 : 2.5, 幅 : 1.5, 厚 : 0.4	0.85	鶏冠	
	17	2	B-1 区	磨製石斧	長 : 9.0, 幅 : 5.6, 厚 : 2.0	151.95	蛇紋岩	
	18	3	B-1 区	錘石錘	長 : 6.8, 幅 : 5.7, 厚 : 1.4	56.57	凝灰岩	
	19	4	SI01	残核	長 : 4.7, 幅 : 7.2, 厚 : 2.5	84.26	流紋岩Ⅰ	
	20	5	SI02 C 区 2 層	剥片石器	長 : 3.6, 幅 : 2.4, 厚 : 0.6	4.73	流紋岩Ⅰ	二次加工
	21	6	SI02 上面	剥片石器	長 : 6.9, 幅 : 2.3, 厚 : 1.9	20.15	流紋岩Ⅰ	使用痕
	22	7	SI01 中間	剥片石器	長 : 6.0, 幅 : 3.2, 厚 : 1.0	13.17	黒色安山岩	二次加工
		8	SI02 B 区	剥片	長 : 3.6, 幅 : 3.9, 厚 : 1.0	13.75	流紋岩Ⅰ	
		9	SI02 上面	剥片	長 : 3.1, 幅 : 2.8, 厚 : 1.4	10.04	流紋岩Ⅰ	
		10	A-2 区	剥片	長 : 2.4, 幅 : 3.9, 厚 : 1.3	10.43	流紋岩Ⅰ	
		11	SI02 上面	剥片	長 : 3.2, 幅 : 4.2, 厚 : 1.1	9.27	流紋岩Ⅰ	
		12	B-2 区	剥片	長 : 5.4, 幅 : 3.2, 厚 : 1.9	19.12	流紋岩Ⅱ	
		13	A-4 区	剥片	長 : 4.3, 幅 : 5.5, 厚 : 1.3	26.03	流紋岩Ⅱ	
		14	SI03 A 区	剥片	長 : 3.6, 幅 : 4.2, 厚 : 1.8	22.00	流紋岩Ⅱ	
		15	B-2 区	剥片	長 : 3.5, 幅 : 1.9, 厚 : 1.0	7.35	流紋岩Ⅱ	
		16	A-2 区	剥片	長 : 1.7, 幅 : 3.3, 厚 : 0.6	2.99	流紋岩Ⅱ	
		17	SD01 C 層	剥片	長 : 2.0, 幅 : 2.6, 厚 : 0.5	2.29	流紋岩Ⅱ	
		18	SI02 A 区 1 層	剥片	長 : 3.2, 幅 : 1.8, 厚 : 0.9	4.19	黒色安山岩	
		19	SI03 C 区	剥片	長 : 1.6, 幅 : 2.8, 厚 : 0.5	1.70	黒色安山岩	
		20	SI01	剥片	長 : 3.3, 幅 : 1.5, 厚 : 0.5	1.98	黒色安山岩	
		21	A-1 区	剥片	長 : 2.5, 幅 : 2.0, 厚 : 0.3	1.42	黒色安山岩	
		22	A-1 区	剥片	長 : 2.9, 幅 : 4.2, 厚 : 0.6	8.04	珪質岩	
		23	A-1 区	剥片	長 : 3.5, 幅 : 2.9, 厚 : 0.6	5.66	玉髄	
		24	SI03 C 区	剥片	長 : 1.7, 幅 : 2.9, 厚 : 1.2	3.51	砂岩	

《遺物観察表凡例》

1　胎土混入（混和）物としての「砂」はその主成分としての石英・長石類を指す。

2　胎土混入（混和）物としての「鉱物」は、肉眼でもある程度結晶が看取されるものを指す。

3　胎土混入（混和）物の含量は、土壌調査における斑紋の表記法を援用し、0%＜稀にあり＜2%＜あり＜5%＜含む＜15%＜富む＜40%＜極る富む、とした。

4　砂の粒径は Wentworth 法に準拠して分類し、1/16mm＜極細砂＜1/8mm＜細砂＜1/4mm＜中砂＜1/2mm＜粗砂＜1mm＜極粗砂＜2mm とし、実際の観察には、これに準拠して作成した手製の粒度標本を使用した。

5節　総括

1　古墳時代中～後期の出土土器と竪穴建物 SI02 について

【土器様相】 出土須恵器から時期判断すると、陶邑窯産は TK47 型式期（一部 TK23 型式期に遡る？）、南加賀窯産は４様式Ⅰ期新相からⅡ１期（MT15 ～ TK10 型式前半期）に比定できる。両須恵器群が併存する可能性を否定できないが、陶邑窯産主体となる前半期（TK47 型式）から、南加賀窯産主体となる後半期（MT15 型式）へと推移したと考えるのが妥当である。両須恵器群は SI02 埋土内で共伴の状況も見られるが、前半期は SI02 上面や包含層主体で、SI02 に伴うとは明言できず、SI02 は後半期の４様式Ⅰ期新相～Ⅱ１期に位置づけるのが穏当だろう。前半期は周辺からの混在と位置づけておきたい。

これら須恵器に伴う土師器食膳具は、大半を高坏が占め、椀Ｈの出土は極めて少ない。本来、南加賀地域の４様式Ⅰ期までは、土師器椀Ｈが主体を占めており、これに高坏が定量加わるといった様相をもつ。４様式Ⅰ期の加賀市潮津金場遺跡資料では、内黒土師器椀Ｈも確認でき、構成比では土師器高坏１に対し、須恵器坏Ｈ 3.5、土師器椀Ｈ 5.5 の割合で存在する。４様式Ⅱ１期の小松市高堂遺跡３号土坑では、土師器高坏１に対し、須恵器坏Ｈ４、土師器椀 1.5 という割合に変化しており、５世紀末から６世紀へと食膳具は土師器から須恵器へという置換が進行する。当資料において、土師器椀Ｈが極端に少ないのは、４様式Ⅰ期で既に、他地域産の須恵器食膳具が主体的に供給されたことに起因する可能性がある。土師器高坏の多くは４様式Ⅰ期に伴う可能性が高く、手づくね土器も４様式Ⅰ期に位置づけられるものが多かったと思われるが、坏部下端に稜を形成する大型高坏の小型化したものや SI03 出土の内黒土師器椀Ｈ、口縁部外屈器形の椀Ｈは４様式Ⅱ１期に伴うものだろう。

【竪穴建物の様相】 SI02 は、出土土器から４様式Ⅰ期新相～Ⅱ１期と判断したが、そうなれば、現在のところ、北陸西部地域（加賀地域以西）の中では、最古のカマド付設竪穴建物と位置づけられる。従前、当地域では、念仏林南遺跡の６世紀 4/4 期が最古と判断していたが、当資料はそれを半世紀以上遡ることとなる。しかも、当竪穴建物で検出されたカマドは、焚口のソデ石に凝灰岩を使用する構造のもので、先述した念仏林南遺跡では確認されない構造である。SI02 はカマドの奥半分が削平されているため、全容把握できていないが、カマドソデ石から求められる焚口の石造り構造とカマド幅の広さ、竪穴建物主柱穴の位置から求められる焚口から竪穴建物奥壁までの距離（160cm 程度）を総合させれば、額見町遺跡などで発見される「L」字形カマド、オンドル型カマドの可能性がある だろう。三湖台地古代集落遺跡群は、朝鮮半島からの移民を基盤に成立したと理解しており、上記の見解が妥当とすれば、朝鮮系移民集落群が６世紀前半代から存在していたことになろう。当竪穴建物では、椀形鍛冶滓も出土しており、集落内で鍛冶を行う集団がいた可能性も想定される。

2　飛鳥時代末期～奈良時代前葉の竪穴建物 SI03 と当期の土器様相

【土器様相】 SI03 の資料群の様相を整理することで、まとめとしたい。まず、須恵器食膳具からは、三湖台古代土器編年３Ｃ期にほぼおさまる様相と判断される。坏蓋口縁部に返りをもつものや高台の高く踏ん張る坏Ｂ身（39）、体部外反する坏Ａ（41）の存在は、３Ｂ期に遡る様相を呈すが、総体的には３Ｃ期の枠を超えないだろう。坏Ｂ主、坏Ａ従の構成である点や坏Ｂの一器種一法量である点など、当期の特徴であり、須恵器が南加賀窯産でほぼ占められる状況も当期様相に合致する。これに伴う土師器食膳具は、内黒高坏Ｈが定量を占め、赤彩椀類が少ない傾向がある。内黒高坏は地元産の非ロクロ、赤彩椀は南加賀窯産のロクロ成形となっており、地元での土師器生産が残存する傾向が強い。額見町遺跡では当期に、窯場産赤彩椀が主体を占める様相を呈しており、それは共伴する土師器煮炊

具の様相とも一致する。つまり、当資料に伴う土師器煮炊具は、ほとんどが地元産の在来型技法によるものであり、額見町遺跡のロクロ成形技法の煮炊具が大半を占める状況とは対照的である。ただ、額見町遺跡のロクロ成形技法の煮炊具も、地元産の朝鮮系土師器でほぼ占められる。三湖台地古代集落遺跡群内には、当期までは在来型煮炊具が主体的な様相の遺跡と朝鮮系土師器が主体を占める様相の遺跡とがあり、重層的な在り方であったのだろう。それが、３Ｄ期には土師器煮炊具生産が窯場へと集約されることにより、窯場産の北陸型煮炊具へと統一されていくのだろう。

【竪穴建物の様相】　当期の竪穴建物は SI03 が比較的良好な遺存状態であり、その構造について整理し、まとめとしたい。まず、当竪穴建物の特徴の一つとして、壁支柱竪穴建物の構造がある。北東側が削平されているため、全容は明らかではないが、遺存する壁支柱配置から、北面と南面に各３本の支柱、東面と西面に各４本の支柱を配する構造と理解する。西面には支柱を結ぶ形で壁溝があり、おそらくこれが建物壁を支える板材痕跡であったろう。竪穴規模は６ｍ強×５ｍ弱の長方形に復元でき、ほぼ均等配置で主柱穴４本が掘られている。主柱間が建物の居間空間で、その東面、やや南に寄る形で、床が広く被熱焼結しており、ここが造り付けカマドの焚口と判断する。このような長方形竪穴の壁支柱建物の形態は、額見町遺跡で確認されている。図示した SI98 は、ほぼ同時期の竪穴で、5.0 × 6.7 ｍの規模と類似する壁支柱の配置をもつ。カマドは小型の「L」字形カマドであり、カマド被熱の位置から見て（同類竪穴構造を有するものに通常煙道をもつカマドがあるが、このタイプのカマド焚口被熱面は竪穴隅に偏っており、被熱面の位置に違いがある）、当遺跡 SI03 も同様のオンドル型カマドをもつ構造であったと理解する。額見町遺跡と同様に朝鮮系移民の竪穴建物と位置づけできよう。

第 20 図　額見町遺跡　SI98 平面図 (S=1/100)

3　矢崎宮の下遺跡発掘調査の成果

今回の調査で得られた成果は大きく２点ある。

第１点は、三湖台地古代集落遺跡群の出現が、６世紀前半ないしは５世紀末に遡る可能性が高まったことである。しかも、当期の竪穴建物がオンドル型カマドであった可能性があり、集落内で鍛練鍛冶を行うなど、成立当初から手工業生産に従事する朝鮮系移民集落の様相を呈する可能性が高まった。これは、南加賀窯跡群の成立における朝鮮系移民の介入、そして三湖台古墳群における横穴式木室古墳の被葬者像理解にも大きな影響を与え、ひいては三湖台古墳群の造営主体と三湖台地古代集落遺跡群との関連性の評価においても、重要な視点を加えることとなった。同じ木場潟に面する薬師遺跡で平成 21 年に同様の時期の大型竪穴建物が発掘調査されており、今後の調査によっては、筆者が描いた三湖台地古代集落遺跡群成立背景にも、修正を加える必要性を感じている。

第２点は、額見町遺跡と極めて類似する構造の８世紀初頭段階のオンドル型カマド付設壁支柱竪穴建物が発見されたことである。当発見により、額見町遺跡と同様の移民集落が台地広く展開し、しかも飛鳥時代末までは同様の集落構造を呈していた可能性が出てきた。三湖台地古代集落遺跡群の経営形態を知る良好な資料であり、木場潟に面する古代集落群の評価に重要な視点を投げかけている。

（文責　望月 精司）

第Ⅳ章　薬師遺跡Ⅴ次発掘調査

第１節　調査に至る経緯

平成 19 年 2 月 28 日、小松市在住の松原聡氏より、小松市矢崎町ナ 231 番地の 223㎡新築住宅工事を実施するにあたり、遺跡の有無に関して問い合わせがあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である『薬師遺跡』に含まれていることと試掘の必要がある旨を答えた。これを受け、3 月 12 日松原氏より正式に「土木工事に係る埋蔵文化財取り扱いについて」の協議書と、「土木工事等に係る埋蔵文化財試掘調査の実施について」の依頼書が提出され、同月 13 日に標記の件に対して、埋蔵文化財試掘調査を実施する旨を記した回答書を松原氏に渡した。

試掘調査は、松原氏との協議により、同月 19 日に実施された。調査方法は、人力による試掘坑調査で、任意に 7 カ所試掘坑を設定した。この内、6 坑より遺構・遺物が確認され、当該地全域に周知の埋蔵文化財包蔵地である『薬師遺跡』が存在すると判断された。その後、個人事業であることから費用面で文化庁補助金の対象となること、当該地内にて保護層が確保できない宅地・カーポート・道路からの階段とスロープ部分・擁壁部分の 125㎡を対象に発掘調査を実施する協議を行い、松原氏より正式に 4 月 4 日「土木工事に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について」の依頼書が提出された。これを受け、4 月 5 日発掘調査を実施する旨を記した回答書が松原氏に渡され、発掘調査の実施が確定した。

発掘調査は、4 月 9 日から 5 月 9 日に実施した。

第 21 図　薬師遺跡Ⅴ次　調査区位置図 (S=1/5,000)

第２節　調査の概要と経過

１　現地調査の概要

調査対象が、狭小で面的に変則であったため、廃土置き場確保のためもあり、まず道路側に面する区域 (A ～ C 区) を着手し、この区域の掘削を有る程度終えてから、その後残りの区域 (D ～ H 区) の調査を行った。重機による表土除去の後、人力で掘削を行った。精査・遺構プラン検出作業を行い、調査地の土層確認は、調査区域際の土層面を用いて確認した。良好な状況で検出した竪穴建物 (SI11) は、遺構の土層断面を観察するため、アゼを設定して遺構掘削を行い、1/20 土層断面図を作成した。掘削完了後は 1/20 平面図を作成し、カマドの平面図や断面図は 1/10 で作成した。遺物については、遺構掘削の際、可能な限り層位一括で取り上げ、重要な遺物は 1/10 平面図を作成して遺物番号を付して取り上げた。この他に検出された遺構の平面図・エレベーション図は 1/20 で作成し、土層断面は、アゼ設定や調査区境の土層で観察して 1/20 土層断面図を作成した。写真撮影は、ネガ・ポジ・モノクロフイルムとデジタルを用い、土層断面や遺構完掘撮影を主に行い、この他必要と思われるものを適宜撮影した。なお、出土遺物については、遺構検出後は遺構ごとに取り上げ、必要に応じて遺物出土状況図を作成し、番号を付して取り上げた。また、包含層遺物については、調査区域を任意に A ～ H 区と区割りし、地区ごとに一括し取り上げた。なお、基準杭については、当該地の四隅に設けられた地割り杭を、そのまま基準杭として使用した。

２　調査の経過

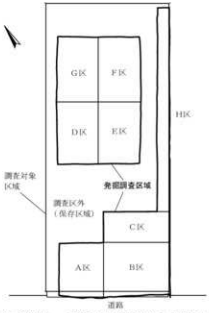
発掘調査は 4 月 9 日に着手、A ～ C 区の重機による表土除去を行い、午後に遺構プラン確認作業を開始した。この区域の包含層が薄かったため、早くにプラン確認を終え、同月 11 日より遺構掘削を行った。同月 16 日に残りの区域 D ～ H 区の表土除去を実施し、17 日より包含層掘削・精査・遺構プラン確認作業を実施した。同月 19 日には大型遺構を確認、竪穴建物プランと判断し掘削を開始した。すべての遺構を完掘したのは 4 月 30 日で、5 月 1 日には高所作業車を賃借し、高所からの写真撮影を行った。5 月 2 日～ 5 日まで全遺構の平面図を作成、7 日より SI11 のカマドを含めた床下の断ち割りを行い、同時に図面記録した。5 月 9 日、調査を完了した。

３　遺構番号について

薬師遺跡での調査は、今回で第Ⅴ次ということになる。よって、遺構番号は、これまで当遺跡内で検出されてきた遺構番号や、続き番号となるようにして付すこととした。よって、今回は、竪穴建物が以前確認されていた 5 号と 11 軒目から、掘立柱建物が 9 棟目、土坑は 11 基目からとなる。現地調査当初、任意番号を付したが、調査後の整理段階で、竪穴建物 SI01 → SI05、SI02 → SI11、SI03 → SI12、掘立柱建物 SB09、土坑 SK01 → SK11、SK02 → SK12 と変更している。

４　出土品整理

出土品は、平成 21 年度に注記・分類作業を実施した。平成 22 年度に接合・復元作業を実施、実測作業は調査員と整理作業員で、トレース作業はデジタルで調査員・臨時職員が行った。

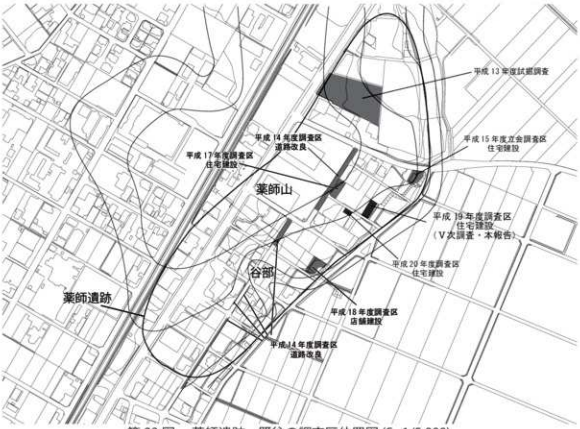


第 22 図　調査区区割図 (S=1/300)

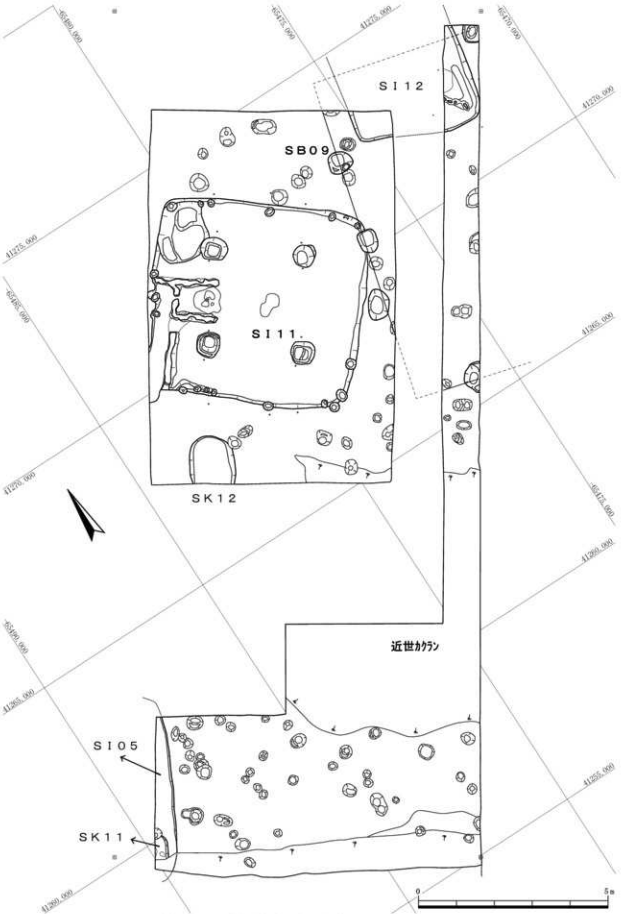
第３節　遺跡範囲・概要・既往の調査

当遺跡の所在する今江町と矢崎町に丘があり、矢崎町では通称「タカヤマ」、今江町ではその昔麓に薬師堂があったことから当遺跡名に由来する。この丘は、昭和 30 年代の国道 8 号線（現在、国道 305 号線）建設等により掘削されてしまい、昔時の面影はなくなったが、木場潟と白山を望む立地である。現在では、国道沿いに店舗が並び、矢崎町内市道の道路改良も行われ、風光明媚な土地感故か宅地化が進んだ。これらの工事に伴う発掘調査に対応すべく、体制整備を整え始めたのが平成 15 年度のことである。個人住宅建設に対し実態を把握するため、建築指導課での建築確認概要書を閲覧し、取り扱い協議に上がらない事例がかなり多いことが確認され、周知徹底への活動を繰り広げた。平成 16 年に協議に上がってこないものが確認され、これはやむを得ず応急的な調査を実施するに至ったが、掘立柱建物（SB05）1 棟と竪穴建物（SI06 ～ SI08）等が検出された。平成 17 年には、きちんとした手続きのもとに、個人住宅建設に伴う発掘調査が実施された。この調査では、竪穴建物（SI09）1 軒、掘立柱建物（SB04）、土坑（SK04）が発見された。特に、竪穴建物は、ほぼ一軒分がそのまま検出され、カマドは渡来系とされるオンドル状遺構と呼ばれるＬ字型カマドを伴ったものであった。Ｌ字型カマドは、月津台地上で西側にあたる額見町遺跡や額見町西遺跡、南側にあたる矢田野遺跡で検出されており、平成 17 年度の調査で、月津台地の北東区域にも広がることが判明した結果となったのである。

これらの経緯をふまえ、当調査地が平成 17 年度調査区と僅かしか離れていないこともあり、当調査でもＬ字型カマドを伴った建物が検出される可能性がもたれた。



第 23 図　薬師遺跡　既往の調査区位置図 (S=1/5,000)



第 24 図　薬師遺跡Ⅴ次　調査区平面図 (S=1/100)

第４節　発見された遺構

１　基本層序

現況面の標高は 7.500 ～ 7.300 mで、道路側に向かい現況高が低くなる。この現況面下で深さ 10 ～ 30㎝の耕作土層、耕作土直下で遺構確認可能面となるが、攪拌が伴った境界層を呈している。同時に、大規模な近代攪乱が認められていることからも、遺構確認面は削平されている可能性がある。遺構確認面以下の基本土層は、遺物を伴う黒褐色壌土や黒褐色埴壌土で、厚み 10 ～ 25㎝を測る。この直下は暗褐色埴壌土で、遺物は伴わない層である。いずれも、台地特有の層を呈しているといえる。

２　遺構

当調査区からは、竪穴建物３軒、掘立柱建物１棟、土坑２基が検出された。狭小地であるため、殆どの遺構が調査区外に延びる形となるが、竪穴建物（SI11）は、煙道のわずかな部分が調査区外であったものの、ほぼ完全な形で検出するに至った。

（１）竪穴建物

①ＳＩ１１

〈立地・規模・形態と状況〉　SI11 は宅地工事区域である Gr.D ～ E 区から検出された。煙道の極一部が調査区外となったが、ほぼ完全なプランである。建物プランは隅丸方形状で、４本主柱をもち、カマド煙道が屈折して屋外へ延びる形状の、L 字型カマドを伴うものである。規模は、580㎝× 540㎝を測り、推定面積 31.32㎡、主軸は N-50°-W である。

〈柱穴・覆土〉　４本主柱穴である。建物の中央にほぼ均等に配置されるものの、建物主軸に対してずれる形となっている。柱穴規模は、掘方径で 60 ～ 70㎝、深さ 80 ～ 84㎝、４本の内３本が深さ 80㎝を測る。下底で柱圧痕が確認されており、その径は 20 ～ 25㎝、しっかりと掘り込みをもち、柱間規模 240 ～ 260㎝を呈す。P4 の内面には下底に至り被熱面が検出されており、柱穴土層で、柱抜き取り痕跡が認められる。また、壁周に小ピットが検出されている。壁周ピットの規模は、径 15 ～ 34㎝、深さ 10 ～ 27㎝で主体は 20㎝程度、均等な配置とは言えないまでも、若干の規則性を持つようだ。但し東南壁では検出されていない。覆土は、床面から 30㎝の厚みが主体だが、耕作土攪拌の影響により薄い箇所ももつ。一部で確認できる７層のような地山壁崩壊土と考えられる土層や、４層のような部分的にブロック状のカマドソデ土が認められるものの、覆土土層は、カマドソデ土崩壊土が少量混在する単一層にまとまり、建物廃絶後に埋め戻された可能性をもつ。

〈床の状況・中央炉・掘方〉　床は、南東壁の両端で地山が確認できるが、これ以外は貼床されている。南東壁ほぼ中央から４本主柱に囲まれカマドに至るまでの区域で顕著な硬化が認められる。東南壁に床硬化が続くことから、ここが建物入口である可能性がある。主柱から壁に至るスペースでは軟質となっている。貼床土は、黄褐色粘土をベースとしたものと黒色土をベースにしたもので、硬化部分で黄褐色や褐色粘土土層の上面に黒色土が薄くのっているものもある。これは建物使用中に補填した可能性をもつだろう。要するに、黄褐色粘土が主体で、２割程の黒色土が混在する土が基本的な貼床土と考えられる。貼床の厚みは、4 ～ 10㎝を測る。また、床中央に炉が設けられている。掘方には、掘方土坑が９基確認できる。いずれも小規模なもので、掘方土坑９は他の土坑や床を切って作られた可能性があり、構築時のものでないと思われる。また、前述した炉の被熱は、この掘方土坑９の土層である g 層が焼けており、炉との関連が窺われる。

〈カマド〉　焚口から煙道へ向かい、煙道が左へ屈曲する L 字型カマドである。オンドル状遺構ともいうものである。規模は、焚口から奥壁までの長さ 185㎝、幅が外径で 115 ～ 120㎝、屈曲点から

煙道末端まで225㎝、ソデの厚みは25～30㎝が主体となっている。焚口の内法幅は45㎝である。焚口から奥へ110㎝地点で、両ソデから内部突出する障壁が設けられ、この厚みは17～20㎝を測る。カマド床面の傾斜だが、障壁まで5°の傾斜角を有し、焚口から奥へ62㎝地点で平坦となり、煙道内も平坦を呈す。焚口での床被熱は非常に顕著で、赤褐色を呈して被熱焼結し硬い。被熱部分の中央には、支脚抜き取り痕が検出されており、この部分は被熱していない。ただし、支脚周囲の床被熱は、特に顕著で黄褐色を呈して硬化するため、非常に高温になったことを示している。また、ソデにおいても焚口の床被熱に近い部分と、障壁部分に被熱が認められる。なお、障壁手前にピットが検出されているが、建物との関連はなく、後に掘り込まれたものと考えられるものである。

〈建物内土坑〉 建物内に、P5とP6の土坑が検出されている。P5はカマド右側で検出されており、底部にテラスや段を有するもので、最下底は平坦である。当建物に伴って掘り込まれ使用されていたと考えられる。一方P6は、上面に貼床を伴わない土層であったため、土坑と考えていたのだが、調査途中で掘方土坑の可能性も考えたものである。しかし、現地調査後に、埋土出土遺物の多くの時期が全く異なるものであったことから、建物廃絶後に掘削された可能性が考えられる。但し、この土坑で坏H（掲載図№4）が検出されており、これが建物に伴うと判断もできる。

〈遺物〉 出土遺物は、床に張り付くものは非常に少なく、最も多く出土するのはカマド内外においてである。特に、須恵器の量は少なく、床面から出土しているものはない。覆土からの出土も定量認められるものの、当建物に伴う信憑性の高いものは、カマド内外と掘方遺物となり、これらの時期にばらつきは見られるが、総じて田嶋編年Ⅰ２期になるものと思われる。

②Ｓ１０５

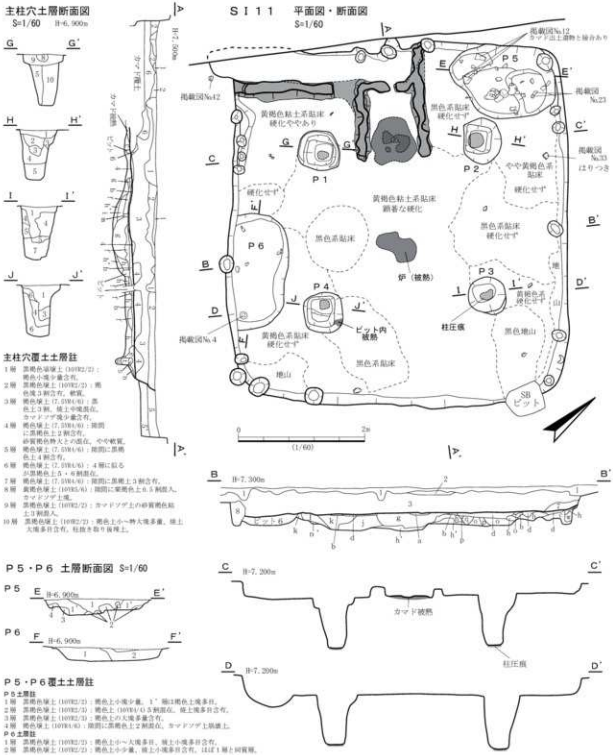
〈検出状況〉 道路側の区域であるGr.A・B・C区域にて、1辺の壁がかかる状態で検出されたものである。この辺の残存長は350㎝、検出された建物幅は最大60㎝であった。主軸はN-28°-E若しくはN-151°-W。南端で被熱層が検出されたため、コーナーカマドの可能性も示唆したが、落ち込みを確認したことと、カマド被熱にしては位置的におかしいため、これは土坑(SK11)と判断した。

〈床と掘方、覆土、出土遺物〉 建物壁際を検出したためか、明確に床を捉えることは困難であった。地山床の可能性が考えられる平坦面の検出と、覆土層とは様相が異なる層で、貼床に特有の褐色粘土や黄褐色粘土を主体とするa層を検出したことにより、床レベルは標高6.860m～6.900mになるものと考えている。ただし、床レベルと覆土との境界が曖昧な箇所が多いことを記しておく。掘方土と考えられる層は、主体を黒褐色土にもち、部分的に深さを伴うものは掘方土坑となるのだろう。また、掘方土は覆土と考えている層よりも粘性をもつことが特徴といえようか。出土遺物は極めて少ない。掘方内から出土する土師器煮炊具の口縁端部に面を伴うものや、北陸型煮炊具の調整が認められるものが出土しており、田嶋編年Ⅱ２期に位置づけられるものと考えられる。

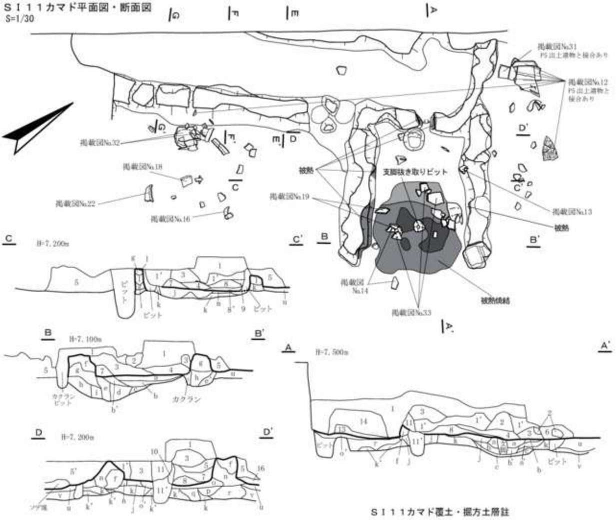
③Ｓ１１２

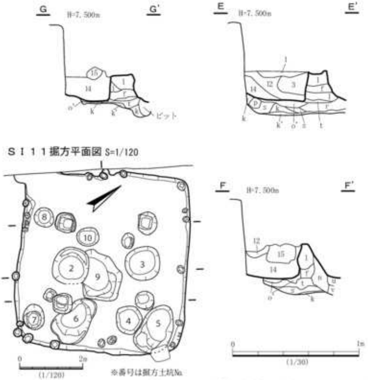
〈立地・規模・形態〉 Gr.F区北東端と、Gr.H区北端にまたがって検出された建物である。建物のコーナーで、対角線上に焚口をもつタイプのカマドが付設されるものである。主柱穴が検出されていないことから、無柱穴タイプの竪穴建物となるのであろう。規模は、残存250㎝×340㎝、隅丸の長方形プランと予測する。主軸はN-168°-W。

〈覆土、床、カマド、出土遺物〉 床は掘方がなく、地山をそのまま床としているが、顕著な硬化は認められない。覆土は30㎝を測り、上下２層で構成されるが、カマド周辺にはカマド崩壊土が多量に検出されている。カマドは、逆Ｖ字状のソデ形状となるタイプで、高さ10㎝程の右ソデが残存しており、この手前で被熱焼結面を検出している。規模は、推定幅100㎝、推定奥行き120㎝、カマド



第25図　薬師遺跡Ⅴ次　Ｓ Ⅰ 1 1 実測図





ＳＩ１１カマド覆土・掘方土層註

覆土土層註

1層　黒褐色壌土（7.5YR3/2）：ソデ粘土小～大塊多目、焼土中塊多目含有。ソデ崩壊土。
1'層　1層と同層だがソデ土粘土塊目立つ。
2層　明褐色砂壌土（7.5YR5/6）：隙間に黒褐色土2割混入。カマドソデ土崩壊土。
3層　黒褐色壌土（10YR2/2）：明褐色土（7.5YR5/6）特大塊多量、焼土小～大塊多量含有。カマドソデ土崩壊土。
4層　黒褐色壌土（10YR2/2）：暗褐色土（10YR3/3）混在。焼土粒・小塊多量含有。
5層　黒褐色壌土（10YR2/2）：明褐色土（7.5YR5/6）塊5割混在。カマドソデ崩壊混在土。
5'層　基本は5層と同層だが、明褐色土塊が特大。
6層　黒褐色壌土（10YR2/2）：焼土大塊多量含有。
7層　黒褐色壌土（10YR2/2）：焼土特大塊が極多量、ソデ粘土大塊が多量含有。
8層　黒褐色壌土（10YR2/2）：ソデ砂質粘土塊多量含有。
8'層　8層と似るが、白色粘土塊が入る。
9層　黒褐色壌土（10YR2/2）：ソデ砂質粘土塊少量含有。
10層　にぶい赤褐色砂壌土（5YR4/4）：隙間に黒褐色土1割混入。
11層　黒褐色壌土（10YR2/2）：明褐色土小塊が少量、焼土塊少量含有。ピット土層？
11'層　基本は11層と同層だが、焼土を含まない層。
12層　黒褐色壌土（10YR2/2）：明褐色土の中・大多量、焼土中塊多量含有。
13層　黒褐色壌土（10YR2/2）：明褐色土の小・中多目。にぶい赤褐色焼土多量含有。
14層　黒褐色壌土（10YR2/2）：褐色ソデ土の粒～大塊少量含有。
15層　黄褐色砂壌土（10YR5/6）：カマドソデ土塊。砂質粘土が熱を受け堅くなっている。
16層　黒褐色壌土（10YR3/2）：褐色土との混在土。炭化物含有。

掘方土層註

a層　赤褐色砂壌土（5YR4/6）：黄褐色粘土の被熱層。上面で所々明褐色（10YR5/6）。
b層　赤褐色壌土（5YR4/6）：被熱層。
b'層　褐色壌土（7.5YR4/6）：隙間に黒褐色土（7.5YR2/2）混入。被熱層。
c層　褐色壌土（7.5YR4/4）：地山との漸移層。
d層　褐色壌土（7.5YR4/4）：このブロックの隙間に黒褐色土（10YR2/2）が4割混入。
e層　黒褐色砂壌土（10YR2/2）：褐色大塊、焼土大塊が多量含有。
e'層　黒褐色壌土（10YR2/2）：褐色土粒多量含有。
f層　褐色砂壌土（7.5YR4/6）塊：隙間に黒褐色土（10YR3/2）1割混入。内部に被熱あり。
g層　黒褐色壌土（10YR2/2）：焼土大塊多量含有。e層とよく似るが、こちら硬い。
h層　褐色壌土（10YR4/6）：黒褐色土塊（3割）・褐色土塊・焼土が撹拌し斑に混在。d層に似る。
i層　褐色壌土（7.5YR4/4）：ダビ状に黒褐色土（10YR2/2）混入。
j層　黒褐色壌土（10YR2/2）：焼土特大塊随所。褐色土中・大塊多量含有。
k層　明褐色砂壌土（7.5YR5/6）：黒褐色土3割混入。いずれもブロック状もあり。
k'層　k層と同層だが、黒褐色土が1～2割程度。
l層　褐色砂壌土（7.5YR4/4）：隙間に黒褐色土（10YR2/2）若干混入。ソデ土で粘土塊。
m層　明褐色砂壌土（7.5YR5/6）：黒褐色土（7.5YR3/2）5割。焼土小塊多目含有。カマド貼床。
n層　黒褐色砂壌土（10YR2/3）：明褐色土小～大塊を極多量。焼土塊混在。
o層　黒褐色壌土（10YR2/2）：焼土多量。明褐色小塊多量含有。床の一部。
o'層　基本がo層と同層だが、焼土が極多量含有。
p層　黒色壌土（10YR2/1）：明褐色小～大塊多目含有。
p'層　p層と同質層だが、塊入らず。
q層　黒褐色壌土（10YR3/2）：焼土中塊多目、褐色土大塊多目含有。
r層　明褐色砂壌土（7.5YR5/6）大塊：これをベースに、黒褐色土や黒色土塊少量混在。
s層　にぶい褐色砂壌土（7.5YR4/4）：黒褐色土1～2割混入。
t層　黒色壌土（10YR2/1）：褐色土の中塊少量含有。よく締まる。
u層　明褐色（7.5YR5/6）粘土塊：隙間に（10YR2/1）褐色土混入。植物撹乱土。
v層　黒色壌土（7.5YR2/2）：褐色土中塊多目。やや軟質。植物撹乱土。

第26図　薬師遺跡Ｖ次　ＳＩ１１カマド、掘方実測図

床は建物掘方と同時に構築されている。カマド床傾斜は０～－１°、焚口から80㎝地点で転換し傾斜角65°、ここから奥ではまた平坦となるものの、焚口より10㎝高くなっている。転換点に至るまでの区域で、床を切ってピットが検出され、中からカマドソデ石が出土している。また、支脚（掲載図№51）が出土している。出土遺物はカマド周辺が多く、ロクロ成形でハケ調整の釜や、須恵器高坏脚部から田嶋編年Ⅱ２～Ⅱ３期に位置づけられるものと考えられる。

（２）掘立柱建物　ＳＢ０９

しっかりとした掘り込みをもつピットが５本検出され、いずれも同規模であることから、大型の側柱建物と判断したものである。建物規模は、推定４間×３間、桁行推定8.8 m、梁行推定4.5 m、面積は最低でも39.6㎡になるものと考えられる。柱穴規模は残存桁行で160～260㎝、梁行は推定4.5 m、建物主軸はN-14°-E。柱穴プランは円形・方形を呈し、断面形状は断掘りのものもあり、底面は平坦である。柱穴の径は50～80㎝、深さは40㎝前後といずれも一定の深さをもつ。P2とP4から柱圧痕が検出され、径12～26㎝で部分的に残存したものもあろう。P2のみ“柱のあたり”が土層断面から確認でき、この径は20㎝であった。埋土は黒褐色埴壌土が基本で、褐色土小塊や粒が少量含有するものである。なお、P2のみ掘方裏込め土が残り、基本土層に褐色埴壌土塊が５割混在、版築状を呈していた。柱筋の通りは、P3がずれるものの、これ以外は規則的に配置されている。ただい、掘方の並びに縄張り痕跡は認められない。また、埋土や掘方形状から、柱掘立または抜き取り時にも、法則性は認められない。なお、当建物はSI11を切って構築されている。出土遺物は細片で少なく、実測できるものがなかったが、ハケ調整をもつ釜破片が量的に目立つ。極細片で、口縁端部外面が降灰する食膳具破片１点が出土する信憑性に欠けるため、当建物の時期はⅡ期の可能性がある。

（３）土坑　ＳＫ１１・ＳＫ１２

SK11は、SI05内で土坑の一部のみ検出されたもので、長径残存120㎝、短径残存40㎝を測る。底面にオーバーハングする深めの掘り込みをもち、深さ50㎝を測る。層中間にあたる標高6.800 mレベルで被熱面が２カ所認められ、この下位層は突き固められており、炎を使用するため形成された可能性がある。埋土は、焼土小塊や炭化塊が多量に含まれるものとなっている。SK12は、SI11に隣接して掘り込まれた土坑である。一部が調査区外にのびているが、楕円形プランと判断可能で、底面は平坦である。残存長120㎝、幅120㎝、深さは27㎝、埋土は自然堆積層を呈す。

第５節　出土遺物

１　古墳時代以降の遺物

遺物は、須恵器、土師器、砥石などの石製品、鉄関連遺物、そして縄文時代、弥生時代の遺物が出土している。須恵器・土師器は古代が主体で、須恵器出土率が低く圧倒的に土師器煮炊具が多い。

出土遺物は、砕片が多く、実測可能であった遺物を次に掲載する。

竪穴建物出土遺物

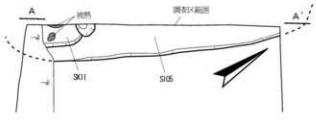
（１）ＳＩ０５出土遺物

出土点数が少なく、実測可能なものは３点のみであった。３点ともロクロ成形である。１は口縁端部に面をもつ小釜で、２はロクロ成形の長胴釜、３はロクロ形成の釜胴部で、内面にタタキ調整のち短いハケ調整を施し、外面にはカキメ調整のちケズリ調整が認められる。

（２）ＳＩ１１出土遺物

建物に伴う、床面・床下・カマド周辺から出土するものと、建物廃絶後二次的に廃棄されたものが認められる。建物に伴うものは、須恵器では南加賀産のものと、柔らかな白色砂・くず小石が混在す

平面図・断面図 S=1/60



SI05・SK11覆土層註

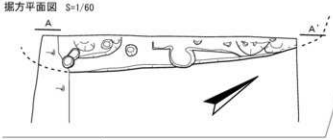
1層 耕作土
2層 黒褐色凝灰土（10BR2/1～2/3）；後土塊多量。褐色土大塊含有。
2'層 黒褐色凝灰土（10BR2/2～2/3）；褐色土塊含有。
3層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；後土中塊多目。褐色土大塊多目含有。
4層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；暗褐色土（10BR3/4）を混在。褐色地山塊多量。
後土・炭化塊多量含有。
4'層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；後雑物入る。
5層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；褐色砂質土の大塊（7.5YR4/4）4割含有。
6層 にぶい赤褐色凝灰土（5YR4/4）；地山混入。
6'層 暗褐黒色凝灰土（7.5YR2/3）；後土塊多量含有。被熱層。
7層 暗褐黒色凝灰土（7.5YR2/3）；後土塊少々の含有。
8層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；褐色土大塊混在し、これを囲めている様子。

SI05掘方層註

a層 褐色凝灰土塊（7.5YR4/4）；微固に黒褐色土（7.5YR3/2）2割混入。
b層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；褐色・暗褐色土の大塊。後土大塊が多目混入。
b'層 b層と似るが、後雑物の割合少ない。
c層 にぶい褐色粘凝灰土（7.5YR5/4）塊；微固に黒褐色土（10BR2/3）3割混入。
d層 2'層と同質層だが、後土粒大塊が多く混入。
e層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；褐色・暗褐色塊。後土中塊を少量含有。b層と似る。
f層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；後土小塊を微量含有。
g層 赤褐色凝灰土（5YR4/4）；被熱粘土塊。広面被熱でなく、焼山積けていない。
h層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；暗褐色土塊（7.5YR3/6）多量で、3割程含有。
i層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；後土塊・炭化塊多目含有。
j層 黒褐色凝灰土（10BR2/3）；褐色土（7.5YR4/6）塊との混在土。

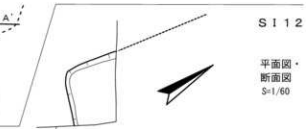
0 2m
(1/60)

掘方平面図 S=1/60



SI12

平面図・断面図
S=1/60



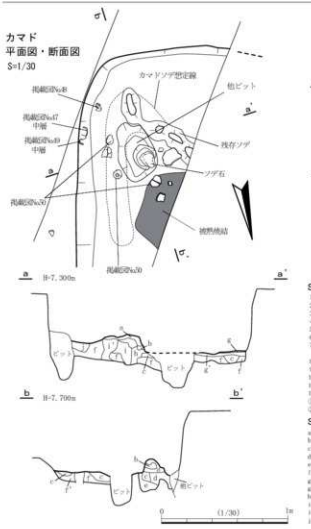
0 2m
(1/60)

SI12覆土層註

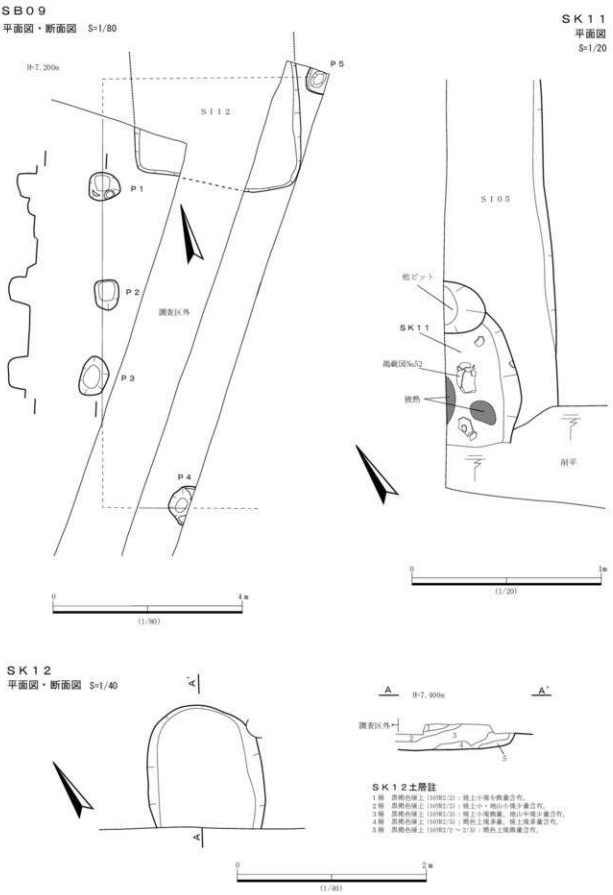
1層 黒褐色凝土（10BR2/3）；褐色土小塊。後土小塊少量含有。
2層 黒褐色凝土（10BR2/3）；褐色土小～中塊多目。後土小～中塊多目含有。
3層 黒褐色凝土（10BR2/3）；後土塊小～大多量。褐色土塊小～大多量含有。カマド崩壊土。
4層 にぶい赤褐色土（5YR4/4）；微固に黒褐色土と1割混在。ツボの一種。
5層 褐色凝土（7.5YR4/4）；後土塊極多量と混在。これらの微固に黒褐色土2割混入。
6層 にぶい赤褐色凝土（5YR4/4）；褐色土塊が被熱すると暗。
7層 にぶい赤褐色凝土（5YR4/4）塊；微固に黒褐色土3割混入。5層に似るが、後土多い。
褐色土小塊多目、炭化物少量含有。
8層 黒褐色凝土（10BR2/3～2/3）；後土塊多目含有。
9層 暗褐色凝土（7.5YR3/4）；褐色土塊多目、後土少量含有。カマドツボ崩壊土。
10層 黒褐色凝土（10BR2/3）；後土大塊が極多量含有。カマドツボ崩壊土。
11層 黒褐色凝土（10BR2/3）；後土粒多量含有。ピット土層。
12層 黒褐色凝土（10BR2/3）；後土大塊多目含有。ピット土層。
13層 黒褐色凝土（10BR2/3）；褐色土小～大塊多量。後土多目含有。白含土層。
22層 黒褐色凝土（10BR2/3）；褐色土粒多量。後土少量含有。白含土層。

SI12カマド掘方土層註

a層 暗褐色凝土（10BR3/3）；赤褐色土（5YR4/6）中塊を微固在。後土塊を混入したツボ構築土。
b層 黒褐色凝土（10BR2/3）；後土塊多量含有。後土塊混入のツボ構築土。
c層 暗褐色凝土（10BR3/3）；褐色土（10YR4/6）塊3割。後土小塊・炭化小塊少量含有。
d層 暗褐色凝土（10BR3/3）；褐色土3割混在。ツボ基底土。
e層 褐色凝土（10BR4/6）；暗褐色土（10BR2/3）3割含有。ツボ基底土。
f層 褐色凝土（7.5YR4/6）；暗褐色土1～2割含有。
g層 赤褐色土（5YR4/8）；被熱粘結。
g'層 にぶい赤褐色凝土（5YR4/4）；被熱層。
h層 黒褐色凝土（10BR2/3）；褐色土小塊・後土小塊が極多量に混在し要興土状。
i層 黒褐色凝土（7.5YR2/3）；褐色土小塊・後土小塊を多目に含有。
i'層 黒褐色凝土（7.5YR2/3）；褐色土小塊・後土小塊を少量含有。
j層 黒褐色凝土（10BR2/3）；褐色土（7.5YR4/6）塊2～3割含有。



第27図 薬師遺跡V次 SI05・SI12実測図



第28図　薬師遺跡Ⅴ次　SB09・SK11・SK12実測図

る胎土をもつ能美産が出土する。土師器では地元在地系調整のものが目立つ。

二次的に廃棄されたものには、古墳後期からＩ１期相当と時期幅をもつ古い様相を示す群と、田島編年Ⅳ～Ⅵ期を示す群に分けられる。古い様相を示す群は、埋土から出土し、小破片でもあり、混入品である可能性がもたれる。

4は能美産の坏Ｈで、受部立ち上がりが短く内傾し退化した形状で、坏Ｈ出現の最終段階に位置づけられるものである。5～8は小破片の古い様相を示す坏Ｈの蓋・身で、受部立ち上がり高が高い坏身の5、口縁端部に面や窪みをもつ6、7・8はやや時期を新しくする。9は口縁端部に折り返しをもつ坏Ｂ蓋で、二次的廃棄物である。さらに新しい段階のものは、グリッド一括取り上げと同質であり、ここでは報告を割愛する。10は壺で、生焼けの状態で内外黒色の瓦質系を呈するものである。11の刀子は、片刃の身部破片である。12は、須恵器中甕の底部では、下底部に白い生焼けが認められ、胎土に白色砂や小石が多く、能美産と考えられる。

土師器食膳具は、在来手法である非ロクロ成形の埦と高坏が出土している。高坏は、内黒(18)を含む4点（18～21）で、いずれも非ロクロ成形、外面ケズリが残り、埦は内面にミガキが認められる。

土師器煮炊具は、小釜、長胴釜または短胴釜の口縁部や底部、甑、浅鍋があり、主にカマド周辺や掘方から出土する。22～25は小釜で、いずれも使用痕跡が著しく、内面の頸部を中心に口縁端部まで、焦げ付きが認められる。22は口縁端部から1.3㎝範囲と、粘土紐痕跡を中心にした1.4㎝の範囲に、23は頸部から胴部側へ1.5㎝、頸部から口縁端部まで前面に、24は頸部から口縁端部の範囲に、25は口縁端部から頸部へ向かい1.1㎝の範囲に、各々認められた。また、これらの小釜は全て在地系特有の調整である、非ロクロ成形の内外ハケ調整をもつものである。27～29は長胴釜もしくは短胴釜となるだろうが、いずれも在来系の調整をもつものである。30・31の釜底部も在来系の調整だが、31は平底で使用痕跡の薄いものである。この他の、甑や浅鍋（35・36）も非ロクロ成形品で、35は頸部から口縁端部にかけ焦げ付きをもつ。34は甑底部の桟で珍しい出土例になろう。

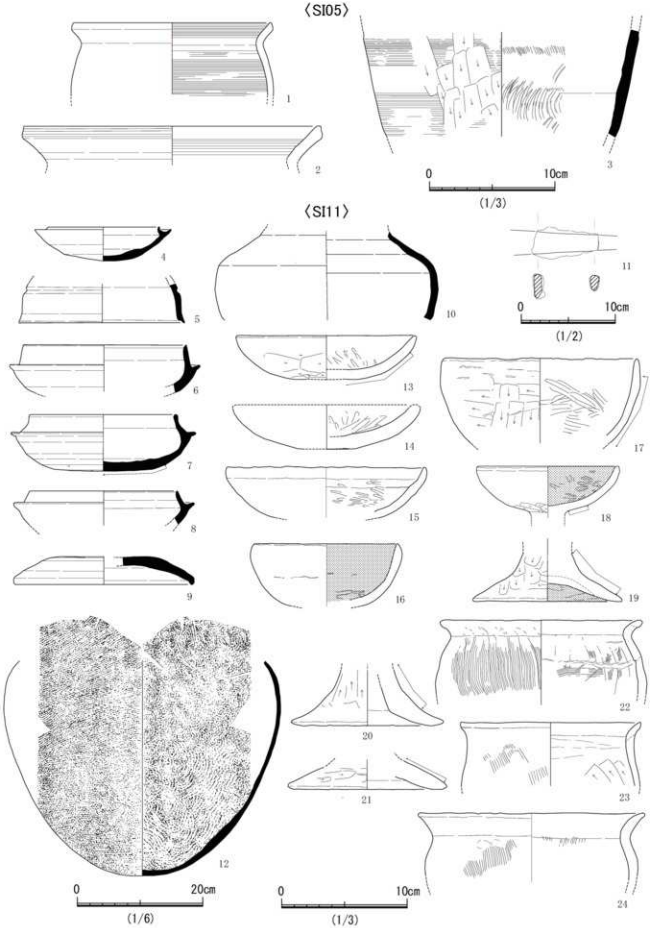
カマド形土製品（38～40）はハケ調整が顕著、砥石は面形成部に刷り痕跡が顕著に認められる。

（3）ＳＩ１２出土遺物

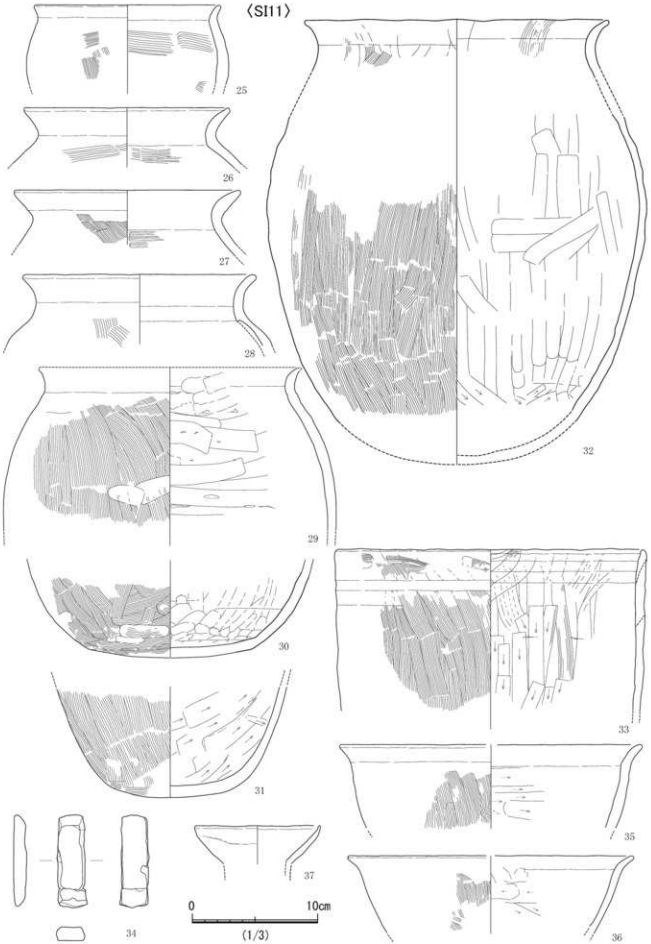
当建物に伴う信憑性の高い遺物は、やはりカマド周辺から出土するもので、47～51が該当する。これら土師器煮炊具は、全てロクロ成形だが、外来技術である叩き出しの後、在来技法であるハケ・ケズリ調整を行う融合タイプに限られている。また、51の支脚は、カマドソデ基底部にて検出されたもので、上端が三叉状、中心に穿孔がみられるが、上から下へ向かって孔を空けたものと思われる。

（4）その他の遺構とグリッド出土遺物

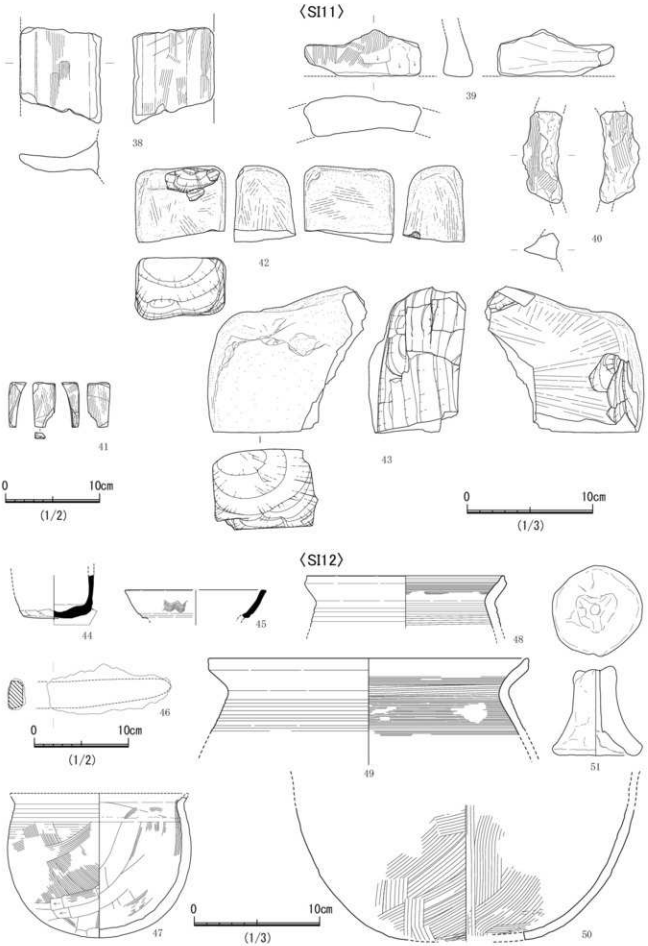
その他の遺物として、実測可能だったのはSK11の長胴釜のみで、須恵器・土師器では、グリッドから、古墳後期にあたる古い段階のもの、竪穴建物と同時期のもの、Ⅳ～Ⅵ期のもの、この3段階の遺物が認められる。ただし、竪穴建物と同時期のものについては割愛させていただき、建物出土遺物を参照にされたい。特筆すべきは、鉄滓である。総計146点、3217.55ｇが出土しており、第6表を参考にされたい。実測したものは、羽口・埦形鍛冶滓・炉壁である。67は、大型の鉄塊形で鉄分が多く亀裂を生じている。74は鉄分の多い精錬の鍛冶滓、76は小型だが中サビしており思いため、純度の高い、最終段階ものである。77も76と同様のものである。78は炉壁で、粘土が変化しているため軽くて黒く、ガラス質を呈す。79は二つの埦形滓が接着している。この他、実測していないが鉄板状のもの、加工途中のもの、鉄塊も検出している。（文責　大橋 由美子）



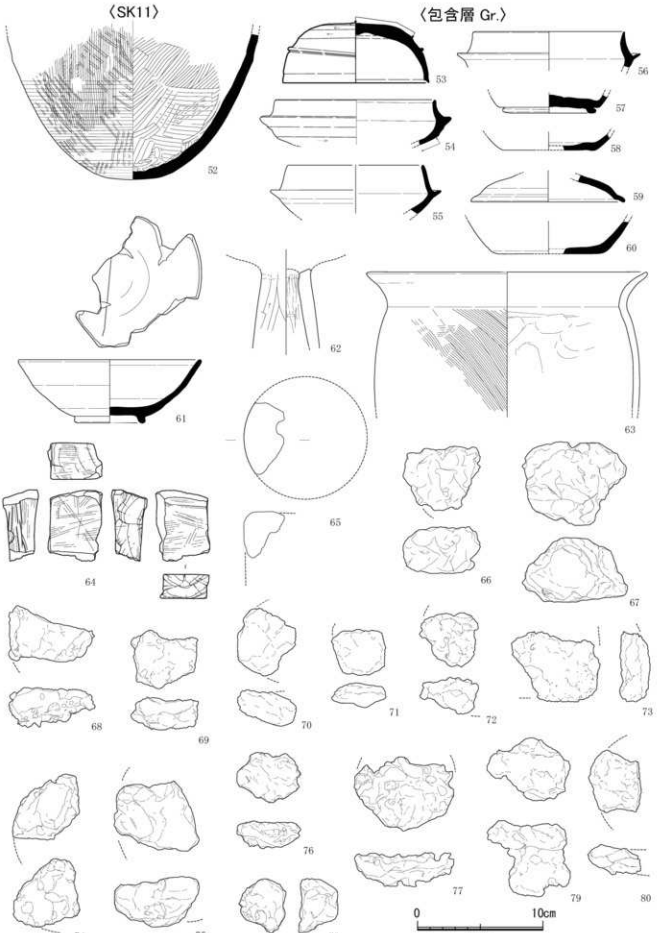
第 29 図　薬師遺跡Ⅴ次　出土遺物実測図 1（11 は S=1/2 ,12 は S=1/6, 他は全て S=1/3）



第 30 図　薬師遺跡Ⅴ次　出土遺物実測図 2（S=1/3）



第 31 図　薬師遺跡Ⅴ次　出土遺物実測図 3（41，46 は S=1/2, その他は全て S=1/3）



第 32 図　薬師遺跡Ⅴ次　出土遺物実測図 4（S=1/3）

第５表　薬師遺跡Ⅴ次　古墳時代以降出土遺物観察表

掲載No.	実測No.	識別	器種名	出土地点	法量	焼成	胎土	色調	残存	時期	調整等	備考
1	33	土師器	小釜	SI05-側方	口15.6、頸14.4、残高5.8、胴16.0	良	白砂粒多量、暗褐色粒少量	内：2.5YR8/3、外：7.5YR7/4	口2/36	Ⅰ、Ⅱ		ロクロ成形
2	31	土師器	長胴釜	SI05-側方	口23.6、残高2.8	良	白砂粒多	5YR6/6	口3/36	Ⅰ、Ⅱ		ロクロ成形
3	32	土師器	長胴釜	SI05	残高8.4	良好	白砂多量、暗褐色粒少量	5YR6/6～5/6	胴4/36	Ⅱ2		ロクロ成形
4	6	須恵器	坏H・身	SI11-P6-1	口8.8、高2.7、受10.8、立高0.4	半生	微美産、白色石、長質	5Y7/1～7/2	完形	Ⅰ2		天井に工具痕
5	1	須恵器	坏H・蓋	SI11-A区下層	口12.8、残高3.0	良好	南加賀産	7.5Y5/1～4/1	口2/36	MT15～TK10		重焼正位
6	18	須恵器	坏H・身	SI11-D区下層・G区E区	口12.9、残高3.7、受15.1、立高3.7	不良	南加賀産	10YR8/4、7.5YR7/1	口10/36	MT15		重焼正位
7	14	須恵器	坏H・身	SI11-D区中層・B区	口11.4、高4.5受14.4、立高4.5	良	南加賀産	10YR6/1～5/1	口14/36	TK43 後～TK209		重焼正位
8	12	須恵器	坏H・身	SI11-D区上層	口11.6、残高2.7、受14.2、立高1.1	良	南加賀産・砂多	5YR6/1～7/1	口4/36	TK43 後～TK209		焼歪み、重焼正位
9	13	須恵器	坏B・蓋	SI11-D区上層＋G区E区	口14.0、残高2.2	良	南加賀産・砂多	10Y5/1～4/1	口15/36	Ⅱ2～Ⅱ3		重焼Ⅰ類
10	5	須恵器	甕	SI11-B区下層・カマド35・36・37・38	頸10.4、残高7.1、胴17.7	不良	長質、雲母材少ない	長質：N4/～3/、断：5Y8/4	胴7/36			瓦質系で内外黒色
11	17	鉄製品	刀子	SI11-C区上層	残長35、幅0.8～1.2、厚0.4							重量6.92 g
12	13	須恵器	甕	SI11-カマド33・39・40・41・42・43・52・83＋P5-1・2・19	胴44.0、残高34.0	堅緻	白砂・小石多、微美産	10Y6/1	胴8/36	8C中	外面タタキ→カキメ調整	正位焼、タタキHC類、当て具DC類
13	19	土師器	埦H	SI11-カマドZ0	口14.3、残高3.2	良好	白砂・小石	7.5YR8/4	口7/36	～Ⅰ2	外面ケズリ、内面ミガキ	非ロクロ成形
14	21	土師器	埦H	SI11-カマドZ3・カマドB0（同一：側方土坑3）	口14.9、残高33	良好	白砂粒	5YR7/6、7.5YR7/6、2.5YR8/3、断：7.5YR7/4～7/6	口10/36	～Ⅰ2	外面剥離、内面ミガキ	非ロクロ成形
15	29	土師器	埦H	SI11-側方土坑3-A区	口15.6、残高4.0	良	白砂粒	2.5YR6/6、7.5YR7/3～6/4	口8/36	～Ⅰ2	外面剥離、内面ミガキ	非ロクロ成形
16	11	土師器	内黒埦H	SI11-カマド55・A区側方・A区集り付き	口11.4、残高4.9	良	白砂粒少量、長質	外：2.5YR5/1～4/1、内：10YR5/1～5/2	口10/36	～Ⅰ2	内外ナデ、内面底ミガキ	非ロクロ成形
17	14	土師器	埦H	SI11-側方土坑3・A区（同一：側方土坑3A区・6B区	口15.3、残高6.7	良好	白砂大小粒	2.5YR6/6～6/8	口6/36	～Ⅰ2	外面ケズリ、内面ミガキ	非ロクロ成形、粗雑
18	20	土師器	内黒高坏H・坏部	SI11-カマド58・C区下層	口14.4、残高4.9、脚部4.0	良好	白砂、暗褐色粒	10YR8/4～7/4、N3/～4/	坏9/36	～Ⅱ3	外面底部ケズリ、内面ミガキ	非ロクロ成形
19	26	土師器	高坏H・脚部	SI11-カマドA・カマド6	残高3.8、底11.8	良好	白砂粒・暗赤褐色粒多量	5YR7/4～7.5YR8/4	底15/36	～Ⅱ3	外面ケズリ・工具痕	底内面黒色N3/
20	6	土師器	高坏H・脚部	SI11-B区上層	残高4.4、底12.1	良好	赤褐色粒、砂	表：5YR6/3、断：5YR6/6	底8/36	～Ⅱ3	外面ケズリ	
21	13	土師器	高坏H・脚部	SI11-側方土坑5-B区・側方土坑5-A区	残高2.3、底12.6	良	白砂粒多め、赤褐色小粒多め	2.5YR7/3、7.5TR7/4	底28/36	～Ⅱ3	外面ケズリ	
22	24	土師器	小釜	SI11-カマドG0	口16.0、頸14.3、胴16.7、残高6.6	良	白砂粒	2.5YR7/3、火色：5YR7/3	口11/36	Ⅰ2～Ⅱ1	内外ハケ	非ロクロ成形、内面口縁焦げ跡
23	27	土師器	小釜	SI11-P5・P16	口14.2、頸13.4、残高5.1	良	白砂粒、暗褐色粒	外：5YR6/6、内：10YR5/3	口9/36	Ⅰ・Ⅱ	外面ハケ、内面ナデ・ケズリ	非ロクロ成形、内面口縁焦げ跡、外面端部指ナデ調著
24	1	土師器	小釜	SI11-側方土坑2-A区・A区下層（同一：カマドZ57・P5A区）	口18.0、頸15.7、残高5.5	良好	砂多量	2.5YR6/6	口11/36	Ⅱ	ハケ調整	非ロクロ成形、内面口縁焦げ跡著
25	3	土師器	小釜	SI11-B区上層・B区中層	口14.8、頸14.2、残高6.0、胴16.0	良	白砂粒	外：5YR7/6、内：10YR8/4～7/4	口6/36	Ⅰ・Ⅱ	内外ハケ調整	非ロクロ成形、内面口縁焦げ
26	2	土師器	釜	SI11-B区中層	口16.8、頸14.1、残高4.3	良好	白砂粒多量、粗色土小粒	7.5YR7/4～7/6	口5/36	Ⅰ2～Ⅱ1	内外ハケ	非ロクロ成形
27	4	土師器	釜	SI11-C区側方	口17.8、頸15.0、残高4.3	良	砂多量、暗色土粒	10YR8/3～8/4	口4/36	Ⅰ2～Ⅱ1	内外ハケ	非ロクロ成形、表面剥離顕著
28	18	土師器	釜	SI11-側方土坑5-B区（同一：SI11-P5-13）	口18.6、頸16.7、残高5.5	良	白砂	7.5YR8/4～8/6	4/36	Ⅰ2～Ⅱ1	外面ハケ	非ロクロ成形
29	12①	土師器	釜	SI11-側方土坑3-B区	頸20.1、残高12.5、胴26.5	良好	暗褐色焼土粒・白砂少量	10YR8/3	胴1/2	Ⅰ・Ⅱ	外面ハケ、内面ナデ	非ロクロ、口縁短部欠損
30	12②	土師器	釜・底部	SI11-側方土坑3-A区	残高6.3	良	白砂多め、暗褐色焼土粒微量		底1/4	Ⅰ・Ⅱ	外面ハケ、内面ナデ	非ロクロ成形
31	16	土師器	釜・底部	SI11-側方土坑6-A区・側方土坑6-B区・カマドK44・P5-20＋側方土坑3-A区	残高8.8、底10.4	良好	白色粒多量	7.5YR8/4・7/3～7/4	底22/36	Ⅰ2～Ⅱ1	外面ハケ、内面ケズリ	非ロクロ成形、平底、使用痕跡著薄
32	15	土師器	長胴釜	SI11-カマドT5・77・61・75・側方土坑8・A区K6・タ・A区側方	口24.8、頸21.9、胴30.0、残高32.0	良	白色砂・暗赤褐色粒多量	7.5TR7/4～7/6	胴1/3	Ⅰ2	外面ハケ、内面ケズリ後ナデ	非ロクロ成形、胴部下底剥げ
33	25	土師器	甑	SI11-カマドZ・15（同一：J＋カマドI17・21・40・48・B区側方・側方土坑2A区）	口24.2、残高12.7	良好	白砂粒多量、褐色粒	7.5YR6/4	口6/36	Ⅱ	外面ハケ、内面ハケ後ケズリ	非ロクロ成形
34	9	土師器	甑・底部桟	SI11-B区中層	長7.4、幅2.3、厚1.1	良好	白砂粒	5YR7/4～7/6		Ⅰ2～		

掲載No.	実測No.	識別	器種名	出土地点	法量	焼成	胎土	色調	残存	時期	調整等	備考
35	26	土師器	浅鍋	SI11-カマドG区（同一？掘方土坑3A区B区、P5・14、P5A区、SI11下層）	口23.8？、残高6.6	良	白砂粒多量	10YR6/3・5/3	口1/36	Ⅰ、Ⅱ	外面ハケ、内面ケズリ	非ロクロ成形
36	15	土師器	浅鍋	SI11-掘方土坑2A区下層（同一？掘方土坑5B区）	口32.0？、残高8.6	良	白砂粒	7.5YR6/4	口1/36	Ⅰ、Ⅱ	外面ハケ、内面下半ケズリ後横ケズリ	非ロクロ成形
37	5	土師器	製塩土器	SI11-A区掘方	口9.9、残高3.1	良	赤褐色粒極多量、白砂粒	10YR7/3 ～ 7/4、火色：5YR6/6	口6/36			非ロクロ成形
38	7	土製品	カマド形・底部	SI11-B区土層	残幅5.3、厚1.0	良	長質、白砂粒、焼土粒少量	上：面：10YR6/3、下：面：10YR5/1 ～ 4/1		Ⅱ	上面下面にハケ・ナデ調整、接合面に縦ハケ	
39	8	土製品	カマド形・底部	SI11-A区土層	底40？、残高3.4	不良	白砂粒多め	外：N4/ ～ 3/、内・底：10YR8/4		Ⅱ	外面ケズリ後ハケ、内面ナデ	
40	10	土師器	カマド形	SI11-A区	残長7.5、幅2.8	良	焼土粒多量、白砂粒多量	10YR7/3・7/2、2.5YR4/1		Ⅱ	上面下面にハケ調整	下面被熱
41	③	石製品	紡石	SI11-掘方土坑2B区	残長4.8、巾2.4、厚1.9							重量19.06 g、流紋岩
42	⑦	石製品	紡石	SI11-9	残長6.0、巾7.1、厚4.9							重量38.27 g、安山岩、レキ利用
43	②	石製品	紡石	SI11-掘方土坑2-A区	残長12.6、残巾11.5、厚7.2							重量1,361.8 g、安山岩、レキ利用
44	39	須恵器	コップ形	SI12（Gr.F区）	残高3.4、底4.8	甲類	白色小石	7.5YR6/1	底36/36		底部ケズリ	歪み、正位焼、内面降灰
45	40	須恵器	鍋	SI12（Gr.H区）	残高2.3	良好	面加賀・砂多・小石	断：5Y5/1、表：7.5Y3/1	底4/36	Ⅰ	波状紋	内外降灰
46	16	鉄製品	鞍金たは鞘	SI12（Gr.H区）	残長8.5、巾1.4、厚0.7							重量30.18 g
47	34	土師器	小釜	SI12-カマド・カマドF6	胴13.4、残高11.2	良	白砂粒多量	内：5YR6/6 ～ 5/6、外：7.5YR4/2・6/6、断：10YR7/4	全2/3、口6/36	Ⅱ2	外面カキメ→ハケ→ケズリ→ハケ、内面ハケ→ナデ、ケズリ	ロクロ成形、口縁加部欠損
48	36	土師器	釜	SI12-カマドA	口15.6、胴14.2、残高4.0	良好	白砂粒多量	7.5YR6/6	4/36	Ⅱ2	カキメ	ロクロ成形
49	35 ①	土師器	釜	SI12-カマドF	口25.2、胴22.2、残高5.7	良	白砂粒・小石	7.5YR7/6	口4/36	Ⅱ2	カキメ	ロクロ成形
50	35 ②	土師器	釜	SI12-カマドB3・11	残高10.3	良	砂少量	7.5Y7/4 ～ 7/6	底5/36	Ⅱ2 ～ Ⅱ3	外面タタキ後ハケ、内面ケズリ、僅かな当て具痕	ロクロ成形
51	37	土師器	支脚	SI12-カマドI	高7.1、上端3.3、底7.1、孔0.8 ～ 1.4	良	白砂少量	10YR8/4、5YR7/6、火色2.5YR7/4	完形		外面指押さえ	底面被熱、上端二次、穿孔上→下
52	41	土師器	長胴釜	SK11-4	残高11.4	良好	白砂多め、稀赤褐色粒少量	5YR6/6	底1/4	Ⅱ2 ～ Ⅱ3	タタキ後ハケ	ロクロ成形
53	11	須恵器	坏H蓋	Gr.B区	口11.6、残高4.7	良好	面加賀・砂多	2.5YR5/1	略完	TK43	天井ケズリ	正位
54	20	須恵器	坏H身	Gr.G区	口12.6、残高3.5、受15.1、立高1.3	甲類	面加賀・砂少	2.5YR5/1	口15/36	TK43 ～ TK209		重焼正位
55	9	須恵器	坏H身	Gr.A区	口10.6？、残高3.9、受受13.5、立高2.3	良好	面加賀	2.5Y5/1	口1/36	TK10		歪み
56	16	須恵器	坏H身	Gr.F区	口12.2、残高2.8、受14.1、立高2.2	甲類	面加賀・砂多	2.5Y5/1	口5/36	TK10 ～ MT15		歪み
57	17	須恵器	坏B身	Gr.F区	残高1.4、台3.7、台高0.5	良好	面加賀・通常	2.5Y7/2 ～ 6/2	底19/36	IV	ヘラ切り	
58	19	須恵器	坏A	Gr.H区	残高1.2、底7.4	良	面加賀・砂多	2.5Y6/1、酸10YR5/2	底11/36	VI		やや酸化
59	10	須恵器	坏A	Gr.B区	口12.2、残高2.1	良好	面加賀	5Y5/1	口4/36	V2		重焼温甑、口縁端部の内外降灰
60	15	須恵器	坏A	Gr.E区	残高2.5、底4.3	不良	面加賀・砂少	2.5YR7/2	口6/36	V1	底部外面に工具痕	ヘラ切り
61	8	須恵器	埦B	Gr.A区	口13.9、高4.8、台5.4、台高0.5	良	面加賀	10YR6/3・6/2	口4/36	VI2 ～ VI3		ヘラ記号「一」、やや酸化、重焼器類
62	28	土師器	高坏・脚	Gr.B区	基3.9、残高6.1	良	白砂粒、褐色粒	2.5YR4/1.10YR7/3	脚10/36	古墳中期	内面絞り痕跡	
63	30	土師器	長側壺	Gr.F区	口22.2、胴19.1、脚21.0、残高10.6	良	白砂粒	断：10YR8/3、表：5YR6/6	口2/36	Ⅱ	外面ハケ、内面ナデ	ロクロ成形
64		石製品	紡石	SI11-B区	残長5.6、残巾4.1、厚2.8							重量81.52 g、流紋岩
65	23	鉄製品	羽口	P3	推径6.2		砂極多量	外：10YR5/2、内10YR8/1				外面吹鞴

掲載No.	実測No.	識別	器種名	出土地点	法量	焼成	胎土	色調	残存	備考
66	1	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.E区	残長5.1、残巾6.1、厚3.7					底面粘土付着、重量130.46 g
67	2	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.E区	長6.6、巾8.2、厚5.0					鉄塊滓、内部、炮裂あり、重量304.0 g
68	3	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.G区	残長4.4、残巾6.8、厚3.2					底面粘土少量付着、重量9028 g
69	4	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.G区	残長5.3、残巾4.6、厚2.6					重量67.23 g
70	5	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.G区	残長5.4、残巾4.7、厚2.9					底面部大粘付着、重量7734 g
71	6	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.H区	残長3.6、残巾4.3、厚2.0					重量46.49 g
72	7	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.A区	残長4.3、残巾4.7、厚2.9					重量58.30 g
73	8	鉄関連	炉壁	Gr.A区	残長5.6、残巾7.1、厚2.5					外全面粘土付着、重量7325 g
74	9	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.B区	残長5.2、残巾5.3、厚5.4					底面粘土付着、穴跡、重量177.39 g
75	10	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.G区	残長3.7、残巾4.4、厚2.7					底面粘土付着、重量47.07 g
76	11	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.G区	長4.0、巾5.0、厚2.2					小規模滓、高純度、中踏あり、最終段階、重44.97 g
77	12	鉄関連	柳形鍛冶滓	表土除去	長5.9、巾7.9、厚2.5					最終段階、重量89.36 g
78	13	鉄関連	炉壁	表土除去	長4.3、巾3.7、厚3.1					ガラス質、重量36.06 g
79	14	鉄関連	柳形鍛冶滓	Gr.C区	残長5.0、残巾6.6、厚6.1					2回鍛滓、重量191.59 g
80	15	鉄関連	柳形鍛冶滓	SI12（Gr.H区）	残長5.0、残巾4.2、厚2.3					重量55.14 g

2　その他の時代の遺物

（1）縄文土器

1は「の」字形の貼付文が脱落したものと思われる。図の表示に関わらず、天地は不明である。2は半隆起線文部分の破片であり、これも天地は不明である。いずれも中期中葉後半の古府期の土器と思われる。

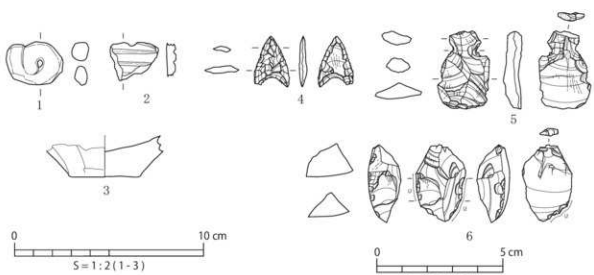
（2）弥生土器

3は弥生土器と思われる。底径約3cmと小さく、削り上げるように整形している事から、後期頃の土器と思われ、壺形土器の底部片であろう。

（3）石　器

4～6は、いずれも黒曜岩製の石器である。4は凹基無茎式の石鏃である。5は石匙と思われる。ツマミ部は素材剥片の打面側にとり、左右からノッチによって作出されている。ただし刃部の加工は認められず、未成品のようだ。6はスクレーパーの類と思われる。素材剥片はスポール状を呈し、末端は蝶番状である。左右辺の細かな剥離は不揃いで一定せず、押圧剥離のような加工痕とは考えにくいため、使用痕である可能性が高い。

ツールとして抽出される石器は以上の3点であり、黒曜岩もこれら3点に限られる。他に剥片等が出土しているが、これらの石材を素材とするツールは今調査では出土していない。（文責　宮田 明）



第 33 図　薬師遺跡Ⅴ次　出土遺物実測図 5（1~3 は S=1/2、4~6 は S=2/3）

第 6 表　薬師遺跡Ⅴ次　その他の時代の出土遺物観察表

図	掲載	実測	出土位置	種別 / 器種	寸法 (cm) / 残率	表層色調	胎土色調	胎土混和物	備考
33	1	1	SI11 C区 上層	縄文土器		10YR 7/3	10YR 5/1	細・中砂含む	縄文中期中葉
	2	2	P8	縄文土器		10YR 8/3	10YR 6/1	細砂含む / 焼土粒あり	縄文中期中葉
	3	3	SI11 C区 下層	弥生土器 / 壺	底 :4/0.44	7.5YR 7/4	7.5YR 5/1	中・粗砂含む / 鉄芒土器物あり	弥生後期か

図	掲載	Serial	出土位置	種別	寸法 (cm)	重量 (g)	石材	備考
33	4	1	表採	石鏃	長 : 2.0, 幅 : 1.4, 厚 : 0.3	0.49	黒曜岩	
	5	2	縄壁区 表土除去	石匙	長 : 3.1, 幅 : 2.1, 厚 : 0.6	3.57	黒曜岩	刃部未加工
	6	3	B区	剥片石器	長 : 3.1, 幅 : 2.0, 厚 : 1.3	6.14	黒曜岩	スクレイパー
		4	SI11 A区 下層	折片	長 : 1.4, 幅 : 3.0, 厚 : 2.6	10.75	黒色安山岩	
		5	SB09 P5	剥片	長 : 2.5, 幅 : 2.5, 厚 : 1.0	5.51	黒色安山岩	
		6	表採	礫片	長 : 3.3, 幅 : 2.4, 厚 : 0.9	9.57	黒色安山岩	
		7	G区	礫片	長 : 2.0, 幅 : 2.0, 厚 : 0.6	2.29	黒色安山岩	
		8	B区 表土	礫片	長 : 2.3, 幅 : 2.2, 厚 : 0.9	3.93	黒色安山岩	
		9	B区	剥片	長 : 2.4, 幅 : 2.4, 厚 : 0.5	4.02	流紋岩	
		10	SI11 掘方土坑 2A区	剥片	長 : 2.9, 幅 : 2.8, 厚 : 0.9	5.83	流紋岩	
		11	SI11 D区 o 層	礫片	長 : 2.5, 幅 : 1.5, 厚 : 0.8	1.94	流紋岩	被熱・破砕あり
		12	B区	剥片	長 : 2.5, 幅 : 2.7, 厚 : 1.9	12.07	瑪瑙	

第6節　まとめ

三湖台地で発見されたＬ字型カマドの竪穴建物は、額見町遺跡をはじめとする台地西南部とその周囲で30軒が検出されている。出現は7世紀初頭で、同時期に、月津台地から木場潟を挟む対岸で、製鉄の開始や須恵器生産での新技術導入があり、これらに携わる技術者として移民してきたと考えられている。そして、当初額見町遺跡だけであったものが、次第に台地全体に広がりを見せている。技術者の導入は、渡来系移民のみならず、各地からの人の導入かあったことが、出土土器の様相から明らかとなっている（望月2007）。

同じく平成17年度に調査された矢田野遺跡でも、移民や技術の導入と考えられる調査成果を得ている。ここでは、多くの建物が検出されたが、建物が増える時期があると同時に土師器を焼成したと考えられる土坑が検出され、焼け弾き品も多量に出土した。時期的には7世紀中頃となるが、土師器を焼くための技術者を導入した可能性がある。これは、在来型技法から、新しく伝わった技術であるロクロ成形を基本とする、移民型技法や渡来型技法へと移行する段階で（望月2007）、急激に移行するのではなく、両者技術の融合が見られる段階でもある。

今回の調査において、検出されたＬ字型カマド付設建物は渡来系・移民系の建物である。平成17年度調査で検出されたＬ字型カマド付設の竪穴建物と同主軸をもち、カマド煙道の向きは違うもののカマドも同位置となっている。建て方に規制があったものか、今後の調査に託したいが、渡来・移民住居が展開していることが明らかとなったのである。そして、三湖台地集落群は移民系集落であるという性格を一層裏付けた結果となった。（文責　大橋 由美子）

引用参考文献

望月精司 2007『総括～三湖台地集落群の古代前半期土器様相～』『額見町遺跡Ⅱ』

第師遺跡Ⅴ・Ⅵ　凡例

遺構図について

・遺構名称は、竪穴建物跡をSI、掘立柱建物をSB、土坑（焼土坑も含め）をSK、ピットをＰとした。

遺物図に関して

・本書で示した土器編年並びに暦年代観については、1988年北陵古代土器研究会シンポジウムの際の田嶋明人氏の古代土器編年編を基本として、1997年北陵古代土器研究会10･11世紀シンポジウムの際の田嶋明人氏の南加賀編年修正を加えたもの（＝田嶋編年）に準じた。

・出土遺物図版中で示す右側断面に書き込んである「　」は、ヘラケズリの範囲を、左表面並びに展開図中の「→」はケズリの方向を示す。

・出土遺物図版中の右断面の中の破線は、粘土紐接着面を示す。

・土師器で、濃い網点は黒色を示す。

遺物観察表に関して

・焼成、焼き色（色調）で示す用語は、須恵器での「堅緻」が良好以上の強い堅緻な焼きのもの、「良好」が堅緻よりも焼き締まりの強いもの、「良」が焼き締まりの強いもの、「不良」は白い還元状態のもの や焼成不良で軟質のものをそれぞれ示す。焼き色は、陰尖部分や軸付着部分を除いた大まかな色調である。２種類の用語を提示している場合は、その遺物が釉宇断ずつの焼き色もっていることを示す。

・法量で示した、口＝口径、底＝底径、台＝台径、台高＝高台高、つまみ径＝蓋つまみ径、つまみ高＝蓋つまみ高さ、基＝基部径、坏高＝高坏坏部高、高＝器高、残高＝残存器高、頸＝頸部径、頸高＝口頸部高、胴＝胴部最大径、底＝最大径、厚＝平均厚、最厚＝最大厚、孔＝孔径を示し、「残」は残存部分での法量を示す。単位はcmである。

・完存は、無記であれば全体での完存割合、口、胴、底、坏、脚の表示があれば、その部位の分完存割合を示す。

・胎土で示す用語は、須恵器の南加賀窯産は、ﾊﾟﾗﾎﾞｷｲｼﾀﾞニ地区で通常見られる素地が粘土質で適度に砂粒が混在する土で、「砂多」が、通常の胎土よりも砂の混入が多いもの、「砂少」が砂粒の混入が少ない良質の土を示す。

・籠考中の遺構痕の分類は、北野博司氏の分類（「重焼の窯型」『辰口西部遺跡群Ⅰ』（財）石川県埋蔵文化財センター1988年）に基づき、1類は、蓋身正位に合わせたものを1単位として2段程度に重ねたもの。Ⅱａ類は、蓋を逆位にして身を重ねたもの を1単位として相状に重ねたもの、Ⅱｂ類は、蓋を逆位にして身に重ねたものを1単位として交互に蓋に同土が合わさるように相状に重ねたものを示す。

・貯蔵具の側部成形・調整で示すタタキ及び当て具の分類については、花塚信雄氏の分類（「須恵器撫類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市教育委員会 1984年）に基づいており、「Ⅰ類」が木目直行の平行線文、「Ⅱb類」が木目左上がりの平行線文、「Ⅲc類」が木目右上がりの平行線文、「Ⅳb類」は木目の見えない平行線文、「Da類」が木目の見えない同心円文、「Db類」は木目が年輪状に入る同心円文、「Dc類」は相目状木目が入る同心円文、「SD類」は年輪木目のみが見える細かな同心円文（木製無文）で示してある。

・土師器の色調について、「表」は内外面の表面色調、内外面の表面色調が異なる場合に「内」は内面色調、「外」は外面色調を示す。また、表面に櫛化痕跡が認められるものについては、「櫛」は表面で櫛化した部分の色調、「否櫛」は櫛化しない表面色調を示し、そして「断」は断面色調、内外断面とも同一色である場合は土色記号のみで記した。色調で示した記号は「新版標準土色帖」に基づく。

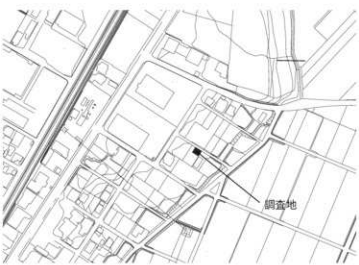
第７表　薬師遺跡Ⅴ次 出土鉄滓観察表

出土地点	点数	重量（g）
SI11	6	24.9
SI12	4	119.18
SK12	2	6.16
P35	1	6.74
P32	1	4.03
P7	1	2.79
P1	1	4.46
Gr.A区	16	291.5
Gr.B区	24	513
Gr.C区	4	228.08
Gr.D区	4	102.29
Gr.E区	23	810.16
Gr.F区	9	71.28
Gr.G区	17	565.77
Gr.H区	33	467.21
計	146	3217.55

第Ⅴ章　薬師遺跡Ⅵ次発掘調査

第1節　調査に至る経緯

平成19年11月26日、小松市四丁町在住の板倉直毅氏の代理人より、小松市矢崎町ナ222番地223㎡にて住宅新築工事に係る埋蔵文化財の有無に関する問い合わせがあった。これに対し、当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である『薬師遺跡』に含まれていることと、隣接する北東位置の土地でⅤ次調査が行われていること、試掘の必要がある旨を伝えた。翌年1月9日、板倉氏より正式に、土木工事に係る埋蔵文化財取り扱いについての協議書と、埋蔵文化財試掘調査の実施について依頼書が提出された。試掘調査は、任意に試掘抗5カ所を設定し人力掘削したところ、全ての試掘坑から遺構・遺物が検出され、遺跡の存在が明らかとなった。この結果を受け協議と行ったところ、当該工事のうち住宅建設工事については保護層が確保されることから、現状保存が可能と判断され、駐車場工事部分65㎡について、保護層確保は困難であり発掘調査を実施することとなった。また、発掘調査区外となる調査区脇の水道引き込み工事においては、工事立会にて対応することとなった。その後、4月24日付けで板倉氏より発掘調査の依頼書が提出され、発掘調査は5月19日から6月4日にかけて実施された。



第34図　薬師遺跡Ⅵ次　調査区位置図（S=1/5,000）

第2節　調査の概要と経過

1　発掘調査の概要

重機による表土除去後、精査し、遺構プラン検出作業を実施した。調査区内の土層確認は、調査地境の土層断面を観察して行った。掘立柱建物のエレベーション図や土抗の土層断面図を1/20で作成し、掘削完了後に1/20平面図をトータルステーションで作成し、出土遺物については、遺構以外のものを包含層遺物として一括して取り上げ、写真撮影は、ネガ・ポジ・モノクロフイルムを用いて、土層断面図や遺構完掘撮影を行った。調査地が狭小であったため、グリッドは設けず、任意の基準杭を設定した。

2　発掘作業の経過

平成20年5月19日表土除去を行い、21日より発掘調査を開始した。精査・遺構プラン検出作業を行い、同月28日より遺構掘削を始めた。30日には遺構が完掘し、検出した掘立柱建物(SB10)のエレベーション図や土坑断面図を作成し、6月2日に調査区全体の遺構平面図を作成した。6月4日には、重機による埋め戻し作業を行い、現地調査を完了した。

3　出土品整理

出土品は、平成21年度に遺物洗浄作業・注記・分類・接合・復元作業を行った。平成22年度には調査員が改めて分類・復元作業を行い、実測作業は調査員と整理作業員で行った。トレースはデジタルで調査員と臨時職員が行った。

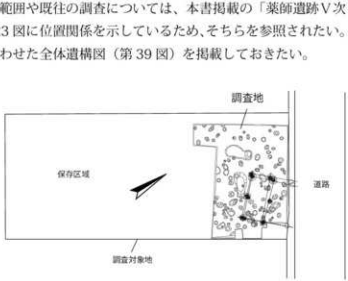
3　遺跡範囲・概要・既往の調査

本調査は当遺跡のⅥ次調査となり、Ⅴ次調査の次年度に実施されたものである。遺構番号は、前回調査からの続き番号で付している。遺跡の範囲や既往の調査については、本書掲載の「薬師遺跡Ⅴ次発掘調査」において概要を述べており、第 23 図に位置関係を示しているため、そちらを参照されたい。なお、本章末に、Ⅴ次調査とⅥ次調査を合わせた全体遺構図（第 39 図）を掲載しておきたい。

第４節　発見された遺構

1　基本層序

表土である耕作土 10 ～ 20㎝下、標高 6.900 m で遺構確認面が認められ、これとともに遺物包含層を確認した。遺構確認面は一定ではなく、耕作土との撹拌層も所々検出され、遺構確認面以下、地山までの厚さは 10 ～ 25㎝となる。Ⅴ次調査と同様の基本層を呈しているが、Ⅴ次調査での遺構確認面・地山面レベルよりも当該地は低くなり、これら一連の調査により、地山が南へむかい傾斜しているものと判断できる。



第 35 図　薬師遺跡Ⅵ次　対象調査区位置図（S=1/300）

2　検出遺構

当調査区からは、立て替えが行われている総柱建物が 2 棟と小規模土坑 1 基が検出されている。総柱建物は部分的な検出で、全体の 1/3 が調査区外の道路内にあたる。立て替え前の建物を SB10a、立て替え後の建物を SB10b とする。

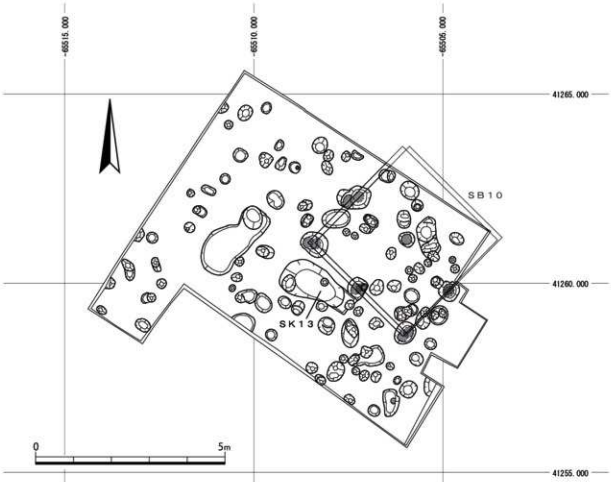
（1）総柱建物

①ＳＢ１０ａ

6 本の柱穴が検出されたものだが、復元が十分可能な建物である。建物規模が桁行 3.6 m、梁行推定 3.5 m、推定面積 12.7㎡を測る、2 間× 2 間の小型総柱建物で、建物主軸は N-43° -E をとる。柱間寸法は、桁間寸法は桁間 152 ～ 200㎝、梁間 180㎝を測る。柱穴掘方は円形プランで、断面では断掘りを確認できるが一定方向ではない。立て替え後の掘方が重複するものの、1 本分の径は 50㎝主体となり、中柱は径 42㎝を呈する。深さは 20 ～ 35㎝で四隅が深めとなっている。立て替え前である当段階での柱抜き取り痕跡は確認できず、伴う土層は 5 層が該当するものと考えられ、この単一層に締まりが伴っていることから、掘方土である可能性が高い。柱圧痕が検出されており、この径は 12 ～ 25㎝であった。側柱の柱筋の通りは良好だが、中柱は通らないものとなっている。

①ＳＢ１０ｂ

建て替え後の総柱建物である。10a と同様に 2 間× 2 間で、建物規模は桁行 3.4 m、梁行推定 3.28 m、建物面積 11.15㎡を測る。建て替え前の建物に対し規模を縮小している。柱間寸法は、桁間 160 ～ 172㎝、梁間 168㎝、主軸は 10a と同じだが、位置を真北方向へずらして建て替えを行っている。柱穴の掘方プランは、やや方形で、断面形状はスロープを呈する。径は 60㎝を主体にもつものと考えられ、深さは 20 ～ 35㎝を測るものの、中柱は径 12㎝と小規模である。柱抜き取り痕が認められるが、抜き取り方向はランダムである。柱圧痕が検出されており、ほぼ 20㎝におさまるが、1 本のみ 28㎝を測る。“ 柱のあたり ” が認められ、この径が 18 ～ 20㎝程であり、柱圧痕と併せて考えれば、



第 36 図　薬師遺跡Ⅵ次　調査区平面図（S=1/100）

柱径は 20㎝程であったと思われる。柱の地固め土の様相となる３層が認められるものの、これより下位である底面で柱圧痕が検出されているため、埋土の一部になろう。また、埋土には、掘方裏込め土層が認められる。柱筋の通りは、概ね良好である。また、掘方配置に縄張りはなく、抜き取り方向からみても監督者等の存在は薄いものとみているが、柱間寸法に厳密とまではいかないまでも規格性を伴う。

〈時期〉

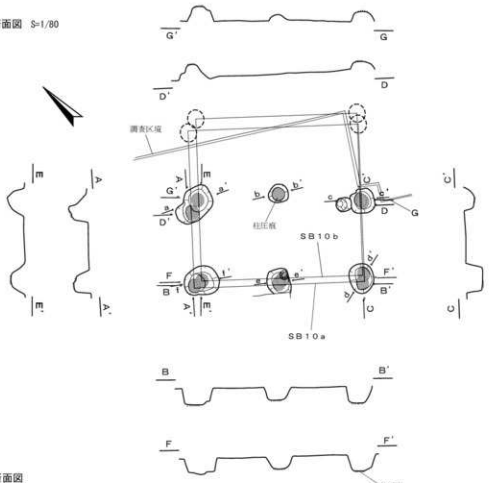
当建物からの出土遺物は少ないが、両面ハケ調整もしくはハケ調整に内面ケズリ調整を施している釜破片が主体的に出土している。この釜の調整法は田嶋編年Ⅱ２期ないしⅡ３期まで確実に続く在来系手法とされる。また、田嶋編年Ⅰ１期にあたる坏Ｈ破片が１点出土する。出土遺物で時期を確実に判断することはできないが、建物形式ではⅡ３～Ⅲ期にあたるものと考えられ、この判断は、筆者が額見町遺跡発掘調査報告で行った掘立柱建物の時期別傾向に基づくものである。当期における総柱建物が 15㎡以下であることと、規格性が守られるのがⅢ期までにあたることから、位置付けを試みたものである。

（２）土坑　ＳＫ１３

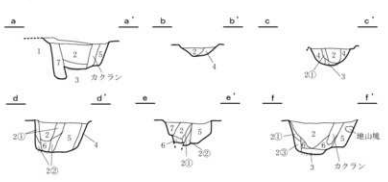
SB10ab の南側に位置する土抗で、規模は長径 220㎝、短径 132㎝、深さ最大 15㎝を測る小規模土抗である。底面は平坦となっておらず、埋土は自然堆積層を示しており、出土遺物は２点のみの破片である。１点については、口縁端部破片だが、内外降灰が認められる重焼Ⅲ類と判断できるものである。

ＳＢ１０
平面図・断面図　S=1/80

H-7.000m



柱穴土層断面図
S=1/80　H-7.000m

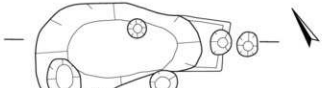


0　4m
(1/80)

ＳＢ１０柱穴覆土土層註

1層　黒褐色粘質土（10YR3/2）：硬く締まりあり。包含層。
2層　黒褐色粘質土（10YR3/2）：地山中塊含有。
2①層　黒褐色粘質土（10YR3/2）：2層に比べ地山塊多い。
2②層　黒褐色粘質土（10YR3/2）：2①層に比べ地山塊少量、軟質。
2③層　黒褐色粘質土（10YR3/2）：2①層に比べ地山塊ラ斑状混合有。
2④層　黒褐色粘質土（10YR2/1～2/2）：黒味強く、地山塊少ない。
3層　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）：地山塊をメインとし、黒褐色粘質土含有。やや硬化。
4層　黒褐色粘質土（10YR3/2）：地山塊ラ斑状、現在状に含有。脆弱埋土。
5層　黒褐色粘質土（10YR2/1）：地山塊少ない。脆弱埋土。
6層　黒褐色粘質土（10YR2/1）：2層に比べ、やや地山塊入り。軟質。2②～4層と対偶層。
7層　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）：黄褐色地山塊をラ斑状含有。

ＳＫ１３
平面図・断面図　S=1/50



H-7.000m

ＳＫ１３覆土土層註

1層　カクラン層。結構強く軟質。
2層　黒褐色粘性土（10YR2/2）：地山塊散量含有。軟質。
3層　黒褐色粘性土（10YR2/2）：同出大塊含有。遺物含有。
4層　黒褐色粘性土（10YR3/2）：3層に比べ、やや明るく、黄褐色地山塊少量含有。
5層　黒褐色粘性土（10YR3/2）：4層に比べ、締まりよく、地山塊少量含有。
6層　暗黒褐色粘性土（10YR2/3）：黄褐色地山塊をラ斑状混合有。
7層　にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）：黄褐色地山塊をラ斑状含有。

0　2m
(1/50)

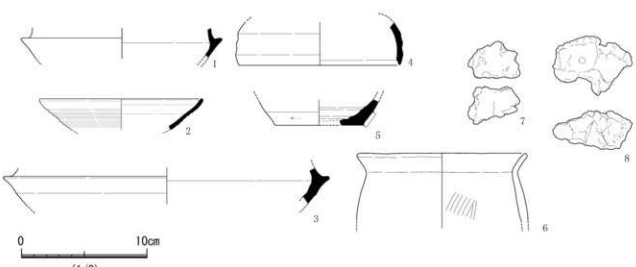
第 37 図　薬師遺跡Ⅵ次　SB10・SK13 実測図

第５節　出土遺物

当遺跡からの出土遺物はパンケース１箱に満たないものであり、内容は、須恵器・土師器破片が中心で、時期幅をもつがほぼ古代のものである。須恵器では、古墳時代後期となる口縁短部に明確な溝状の凹みをもつ坏Ｈ破片（掲載図№４）が出土している。特筆すべきは掲載№３である。これは坏Ｈ形状である受部をもって立ち上がり、器肉が厚く、口縁が極めて広いもので、坏Ｈと名称づけておいたものの、用途不明品である。他の須恵器では、時期としてⅥ期に相当する埦（掲載№２・５）が出土している。土師器は破片ばかりであり、実測に至らないものが多い中、非ロクロ成形、ハケ調整の小釜（掲載図№６）を検出している。ただし、剥離が著しいものである。この他、２点のみだが、鉄滓が出土している。

第６節　まとめ

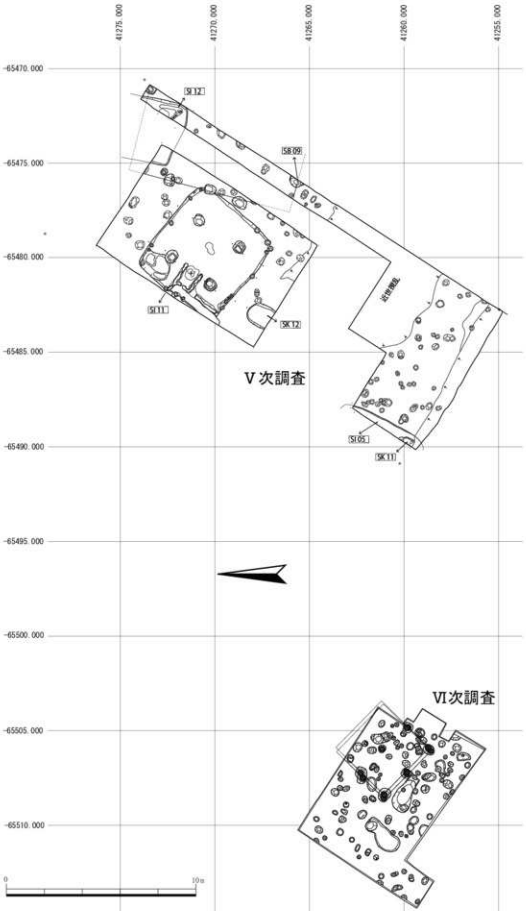
当該地の調査では、Ⅴ次調査包含層と同様に出土遺物の時期に幅をもち、遺構に伴う遺物が殆どないため、遺構時期を決定することは難しいが、遺構形式から７世紀末から８世紀にかけての遺構であろうと考えられる。当遺跡内に、住居ではない倉庫機能をもった建物が存在したことが、今回明らかとなった。当遺跡が集落であることは間違いないが、倉庫の存在は、末端官衙の性格となりうる要素をもっているため、重要視している。当遺跡全体の中で、倉庫がどういった位置となるのか、群をなすものなのか、今後の課題となろう。



第 38 図　薬師遺跡Ⅵ次　遺物実測図（S=1/3）

第８表　薬師遺跡Ⅵ次　出土遺物観察表

掲載№	実測№	器別	器種名	出土地点	法量	焼成	胎土	色調	残存	時期	調整等	備考
4	4	須恵器	坏Ｈ蓋	P43	口12.8、残高3.4	不良	良・砂少	10YR8/3 ～ 8/4	口1/36	ＴＫ４３ ～ TK209		
1	1	須恵器	坏Ｈ身	包	受15.8、残高2.2	堅緻	微加賀	2.5Y5/1	体3/36	ＴＫ４３ ～ TK209		正位
3	3	須恵器	特殊坏Ｈ	P16	受25.8、残高2.8	堅緻	微加賀	2.5Y6/1 ～ 6/2	体3/36	ＴＫ４３ ～ TK209		
2	2	須恵器	埦	P5	口12.9、残高2.5	良	微加賀	5Y7/1	口5/36	Ⅵ3		
5	5	須恵器	埦	P37	残高1.8、底7.1	不良	微加賀	7.5YR7/4	底12/36	Ⅵ２～Ⅵ３		糸切り
6	6	土師器	小釜	P19	口13.2、頸1.2.0、残高5.3	不良	砂少	10YR7/4	口4/36	Ⅰ・Ⅱ	内面ハケ	外面顕著な剥離
7	7	鉄関連	鉄滓	P38	長2.9、巾4.1、厚3.0							重量35.83ｇ
8	8	鉄関連	鉄滓	P39	長4.7、巾6.3、厚3.0							重量67.34ｇ



第 39 図　薬師遺跡Ⅴ・Ⅵ次　全体平面図（S=1/200）

第Ⅵ章　矢田新遺跡発掘調査

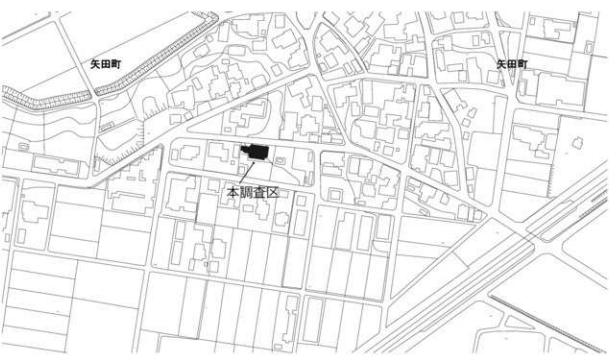
第１節　調査の概要

１　調査に到る経緯

（１）国庫補助事業による調査

平成 19（2007）年２月８日付けで、事業主である達　友洋氏より小松市教育委員会埋蔵文化財調査室に対し、小松市矢田町タ 16 番地１・17 番地での住宅建設に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議があった。当該事業区域が周知の埋蔵文化財包蔵地である「矢田新遺跡」に含まれることから、地下の埋蔵文化財の有無及び状況を確認するため試掘調査が必要である旨を回答した。試掘調査の結果、遺構及び遺物・埋蔵文化財包含層が検出され、遺跡の存在が確認された。

その後、埋蔵文化財の状況と工事計画との調整を行った結果、建物周辺部分については、現況面上への盛り土もしくは土間打ちであることから、埋蔵文化財への影響はないと判断された。しかし建物建築部分については建物基礎が掘削を伴う工事のため、地下の埋蔵文化財の損壊は免れず、その現状保存は不可能と判断され、工事区域面積 200㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。発掘調査に係る経費については、個人住宅建設事業に該当することから、国庫補助事業の対象と認め、平成 19 年度市内遺跡発掘調査事業において支出した。平成 19 年４月 10 日付けの埋蔵文化財発掘調査の依頼を受け、５月 17 日に発掘調査実施の回答及び埋蔵文化財の取扱いに関する協定書の締結を行い、５月 21 日より現地調査に着手した。



第 40 図　矢田新遺跡　調査区位置図（S=1/3000）

（2）事業者直営による調査

国庫補助事業による調査終了後、事業主より住宅建設の工事計画変更の申出とともに、平成19年9月19日付けで、再度矢田町同地内での住宅建設に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議があった。事業主及び石川県教育委員会文化財課との調整を行った結果、新たに埋蔵文化財の現状保存が不可能と判断された区域22.96㎡について、調査事業に係る経費の支払いを事業者が直接執行する「事業者直営」で発掘調査を行うこととし、調査費の全額を事業者が負担するということで、達氏と合意を見た。平成19年9月19日付けの埋蔵文化財発掘調査の依頼を受け、10月25日に発掘調査実施の回答及び「住宅建設に伴う矢田新遺跡発掘調査の実施に関する覚書」を交換し、10月29日より現地調査に着手した。

2　既往の調査

矢田新遺跡の調査として、昭和45（1970）年に小松市立博物館が主体となって実施された事例がある（小松市立博物館1971、以下括弧内引用箇所）。当時「小松市における遺跡破壊の実例は増加する一方」で、この矢田新遺跡調査の契機も、土砂採集によって破壊寸前のところを、「遺跡パトロール班が遺跡巡見中に発見した」ものであった。2度にわたる遺跡巡見によって「ピット状遺構を含め、溝状遺構4及び住居址様掘り込み20」を発見している。また昭和45年7月から8月にかけて矢田丘陵のほぼ中心部で実施された発掘調査によって4基の土坑及び溝状遺構が確認され、遺物として「須恵器・土師器・塗彩土器及び若干数の陶質土器」「若干の鉄製品・石製品」が出土している。

遺物・遺構の考察においては、土器は「実年代700年終焉期」に位置付けされ、遺構は主に土坑状遺構について、土坑内の火痕跡などから土坑墓としての性格を提示している。

参考文献

小松市教育委員会，1971：「加賀矢田新遺跡の第1次調査」『小松市立博物館研究紀要　第6集』

3　調査の経過

（1）調査方法

重機による表土除去作業を行い、調査区全体を対象として国土座標に基づき、5ｍスパンのグリッドを設定した。各々のグリッド名は北西端から順に、5ｍ毎に南北方向（Ｘ軸）をＸ02～Ｘ04、東西方向（Ｙ軸）をＹ02～Ｙ06とし、「Ｘ02－Ｙ02」のように呼称している。その後、人力により包含層掘削・遺構精査・遺構掘削を行った。また遺構掘削は必要に応じて土層観察用のアゼを設定し、土層断面図・平面図を作成した。また各過程において写真撮影を行った。

（2）発掘作業の経過

平成19（2007）年

（国庫補助事業による発掘調査：対象区域200㎡）

5月21日（月）　晴　本日より現地発掘調査開始、重機による表土除去作業（翌22日まで）。

5月23日（水）　晴　包含層掘削開始（Ｘ02，03－Ｙ02，03）

5月30日（水）　曇　遺構掘り下げ開始（Ｘ02－Ｙ02，03）

6月11日（月）　曇　被熱面検出（Ｘ02，03－Ｙ04）

6月28日（木）　曇　検出遺構完掘

6月30日（土）　曇　遺構平面図作成

7月12日（木）　曇　重機による埋め戻し、以上で現地発掘調査作業終了。

（事業者直営による発掘調査：対象区域 22.96㎡）

10月29日（月）　晴後曇　本日より現地発掘調査開始、重機による表土除去作業。

10月30日（火）　曇　包含層掘削（X 03 －Y 04，05）、遺構掘り下げ開始

11月1日（木）　雨　検出遺構完掘

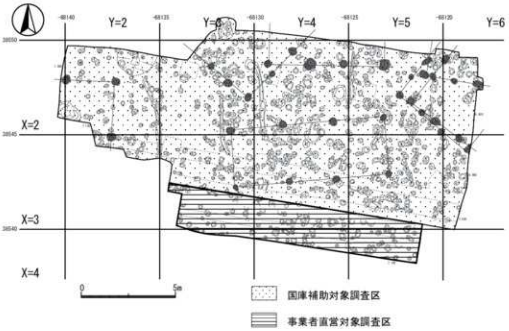
11月2日（金）　晴　調査区全景写真撮影

11月3日（土）　晴　遺構平面図作成

11月5日（月）　晴　重機による埋め戻し、以上で現地発掘調査作業終了。

（3）整理等作業の経過

平成22年度国庫補助事業として、出土遺物の注記・分類・接合・実測・トレース・図版作成・原稿執筆・報告書刊行の各作業を行った。

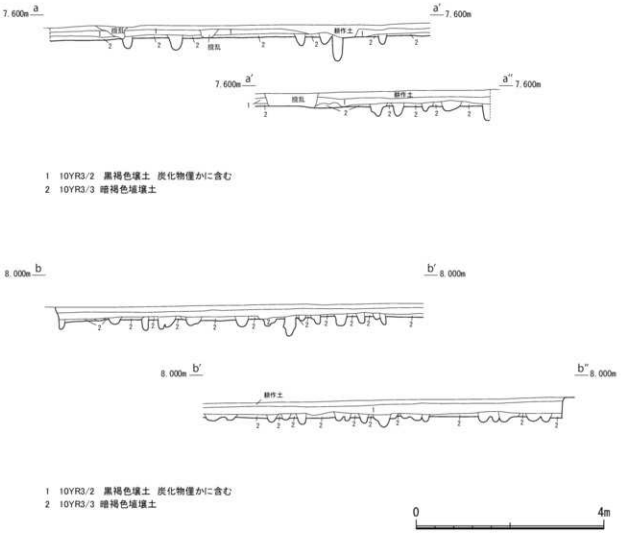


第41図　矢田新遺跡　調査区区割図（S=1/200）

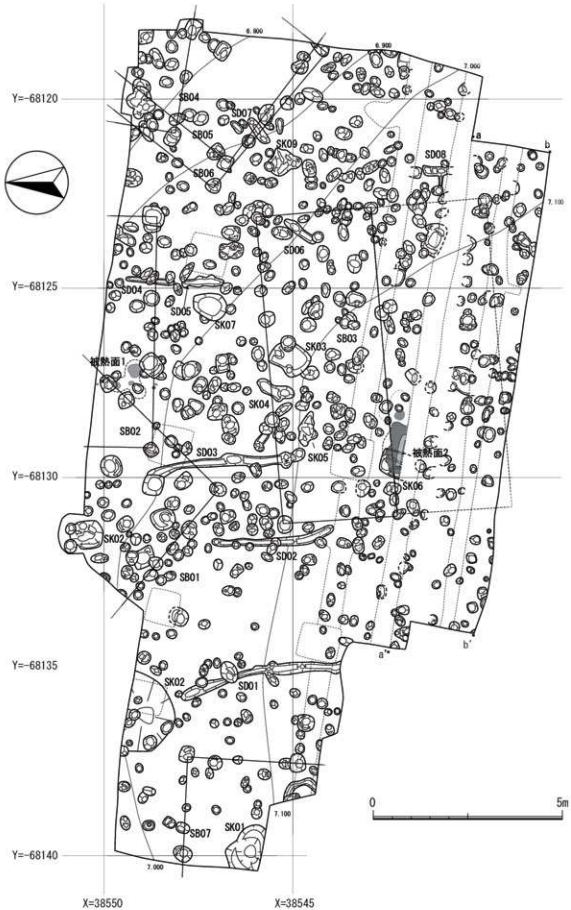
第２節　調査の成果

１　基本層位について

調査区は既に宅地として整地されており、土層断面の観察では、現況面より厚さ 10 ～ 12㎝の耕作土が広がり、その直下に遺物包含層が約 15 ～ 25㎝の厚さで存在している。但し、耕作土中にも注視すると遺物の混入が確認されるため、包含層の厚さは本来、この値以上であったと推察される。よって、検出した包含層は自然堆積の結果ではなく、土地の耕作等によって撹乱された後に残存したものと理解すべきであろう。この包含層は黒褐色～暗褐色土をベースとして、土質や含有物の有無等により２層に分かれる。また今回の発掘調査によって柱穴が多数検出されたが、土層断面においてもそれを反映するように、多くの柱穴跡が確認できる。



第 42 図　矢田新遺跡　調査区断面図（S=1/80）



第 43 図　矢田新遺跡　調査区平面図（S=1/100）

第３節　発見された遺構

１　掘立柱建物

SB01

調査区の北端、Ｘ 02 －Ｙ 03，04 Ｇｒに位置する。桁行２間、梁行２間の柱列を確認したが、残りは調査区外となる。全体の形は不明であるが、側柱建物と考えられる。

規模は、確認できる部分で 3.4 m以上× 2.6 m以上。柱間寸法は桁間 160 ～ 180㎝、梁間 120 ～ 140㎝を測る。

柱穴プランは円形・方形で、径 29 ～ 42㎝、深さ 48 ～ 53㎝を測る。主軸は N-45°－ E。

SB02

調査区の北、Ｘ 02 －Ｙ 04，05 Ｇｒに位置する。桁行３間の柱列を確認した。残りは調査区外となり、全体の形は不明だが、対応する柱穴が見当たらないため、側柱建物と考えられる。

規模は、確認できる部分で 6.1 m。柱間寸法は 170 ～ 230㎝。

柱穴プランは方形・円形で、径 35 ～ 65㎝、深さ 34 ～ 42㎝を測る。主軸は N-1°-E。

SB03

調査区の中央南寄り、Ｘ 02，03，04 －Ｙ 03，04，05 Ｇｒに位置する。当初の国庫補助事業による調査において、桁行３間、梁行１間の側柱建物として認識していたが、事業者直営による調査区南側の拡張によって新たに対応する柱穴を確認し、総柱建物として報告するものである。

規模は、8.2 m× 6.0 m以上。柱間寸法は桁間 300㎝、梁間 280 ～ 286㎝を測る。

柱穴プランは円形で、径 38 ～ 44㎝、深さは確認できた部分で 28 ～ 58㎝を測る。主軸は N-85°-E。

SB04

調査区の北東端、Ｘ 02，03 －Ｙ 05，06 Ｇｒに位置する。桁行３間、梁行２間の柱列を確認したが、残りは調査区外となる。全体の形は不明であるが、側柱建物と考えられる。

規模は、確認できる部分で 4.6 m× 2.2 m以上。柱間寸法は桁間 220㎝、梁間 140 ～ 160㎝を測る。

柱穴プランは楕円形・円形で、径 28 ～ 60㎝を測る。主軸は N － 38°-E。

SB05

調査区の北東端、Ｘ 02，03 －Ｙ 05，06 Ｇｒに位置する。桁行２間、梁行２間の柱列を確認したが、残りは調査区外となる。全体の形は不明であるが、側柱建物と考えられる。

規模は、確認できる部分で 3.2 m以上× 3.0 m以上。柱間寸法は桁間 160㎝、梁間 120 ～ 180㎝を測る。

柱穴プランは円形・方形で、径 30 ～ 47㎝、深さ 40 ～ 55㎝を測る。主軸は N-39°-E

SB06

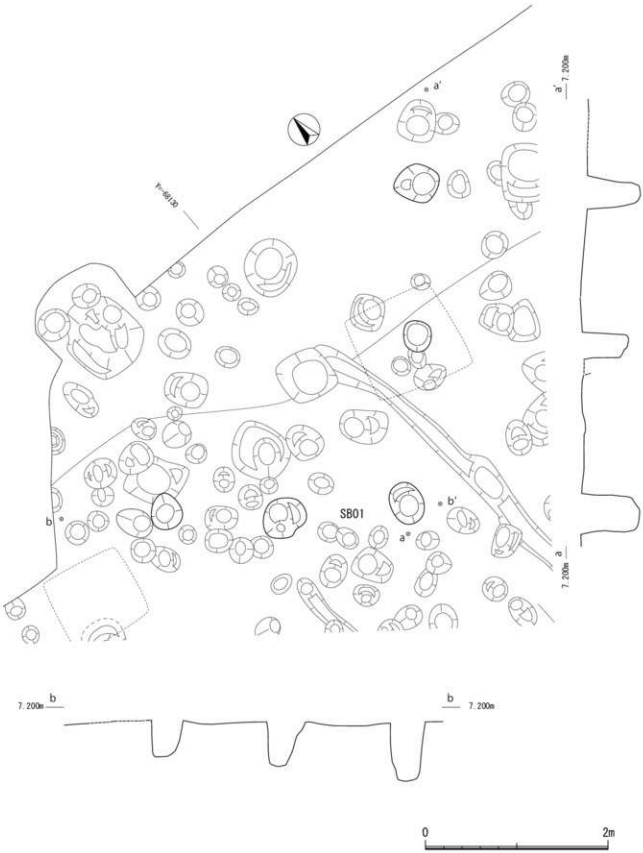
調査区の北東端、Ｘ 02 －Ｙ 05，06 Ｇｒに位置する。桁梁どちらかは判別し難いが、２間の柱列を確認した。残りは調査区外となり、全体の形は不明だが、対応する柱穴が見当たらないため、側柱建物と考えられる。

規模は、確認できる部分で 2.8 m。柱間寸法は 120 ～ 150㎝を測る。

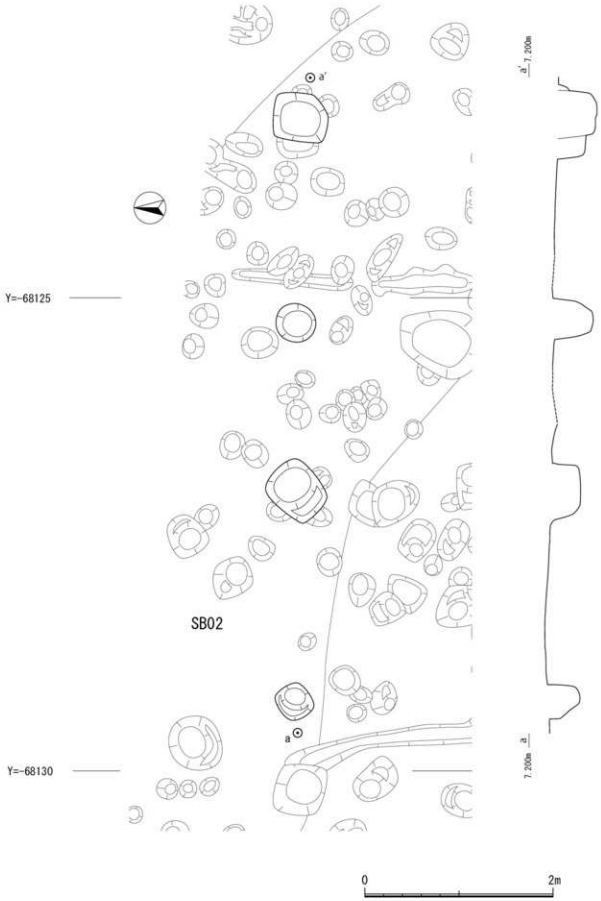
柱穴プランは方形・円形で、径 35 ～ 50㎝を測る。

SB07

調査区の西、Ｘ 02，03 －Ｙ 02 Ｇｒに位置する。桁行１間、梁行１間の柱列を確認したが、残りは調査区外となる。全体の形は不明であるが、側柱建物と考えられる。

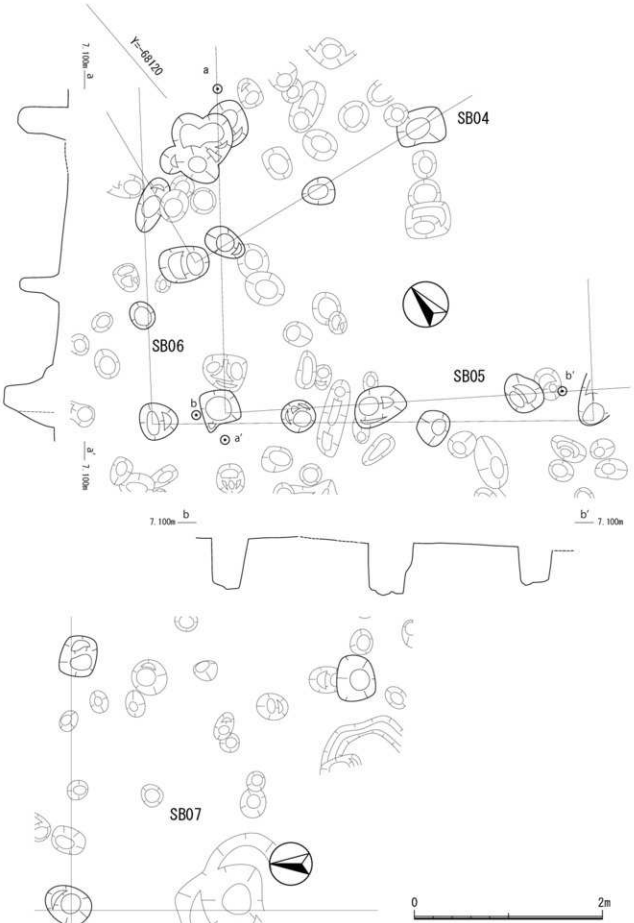


第 44 図　矢田新遺跡　SB01 実測図（S=1/40）



第 45 図　矢田新遺跡　SB02 実測図（S=1/40）

第 46 図　矢田新遺跡　SB03 実測図（S=1/60）



第 47 図　矢田新遺跡　SB04,05,06,07 実測図（S=1/40）

規模は、確認できる部分で 3.0 m以上× 2.6 m以上。柱間寸法は桁間 300㎝、梁間 260㎝を測る。柱穴プランは方形・楕円形で、径 38 ～ 50㎝を測る。主軸は N-3°-E。

2　土坑

SK01

調査区の西端、X 02 －Y 02 G r に位置する。検出できた規模は長径 114㎝以上・深さ 34㎝以上を測り、東西方向に長辺をもつ。土層の観察では黒褐色土をベースとしながら、２層にわたる埋積状況を確認している。

SK02

調査区の北西、X 02 －Y 02 G r に位置する。検出できた規模は長径 220㎝以上・深さ 92㎝以上を測り、東西方向に長辺をもつ。今回の調査において最も規模の大きい土坑である。土層の観察では均一な層位を保っておらず、やや乱れた様相を呈している。覆土としては、明褐色シルト質壌土の上層、暗褐色壌土の下層という埋積状況が主体であったと考えられる。

SK03

調査区の中央、X 02，03 －Y 04 G r に位置する。規模は長径 100㎝・深さ 21㎝を測り、北東～南西方向に長辺をもつ長方形を呈する。また土坑底面の中央部には、柱穴状に掘り込みが見られた。土層の観察では、上層に黒褐色壌土、下層に黒色壌土という埋積状況を確認している。

SK04

調査区の中央、X 02 －Y 04 G r に位置する。規模は長径 102㎝・深さ７㎝を測り、南北方向に長辺をもつ長楕円形を呈する。土層の観察では、炭化物を僅かに含む黒褐色壌土の単一層という埋積状況を確認している。

SK05

調査区の中央、X 02 －Y 04 G r に位置する。規模は長径 95㎝・深さ 16㎝を測り、東西方向に長辺をもつ不整方形を呈する。土坑内の掘り込みには、浅いテラス状の段が見られる。土層の観察では、上層に黒褐色壌土、下層に暗褐色壌土という埋積状況を確認している。

SK06

調査区の中央南西寄り、X 03 －Y 04 G r に位置する。検出できた規模は長径 66㎝以上を測り、東西方向に長辺をもつ。南側は撹乱により消失しており、全体の形状は判然としないが、方形を呈していたと考えられる。土層断面図は記録が不明であったため、本報告には未掲載である。

SK07

調査区の中央北東寄り、X 02 －Y 04 G r に位置する。規模は長径 92㎝・深さ 13㎝を測り、南北方向に長辺をもつ長楕円形を呈する。土層の観察では、上層に黒褐色壌土と地山土との混層、下層に炭化物を僅かに含む黒褐色壌土という埋積状況を確認している。

SK08

（欠番）

SK09

調査区の東、X 02，03 －Y 05 G r に位置する。規模は長径 70㎝・深さ 26㎝を測り、南北方向に長辺をもつ不整方形を呈する。土坑底面も検出プランを反映するように、起伏に富む。土層の観察では、上層に黒褐色壌土、中層に暗褐色壌土、下層に黒色壌土と３期に渡っての埋積状況を確認している。

3　溝

SD01

調査区の東、X 02, 03 － Y 02, 03 G r に位置する。検出できた規模は長さ 430㎝・幅 15 ～ 30㎝・深さ５㎝を測り、南北方向に沿って延びているもので、溝の南端は調査区外に続く。土層の観察では、僅かに炭化物及び地山土を僅かに含む暗褐色壌土の単一層という埋積状況を確認している。

SD02

調査区の中央西寄り、X 02, 03 － Y 03 G r に位置する。規模は長さ 320㎝・幅 14 ～ 25㎝・深さ５㎝を測り、南北方向に沿って延びている。土層の観察では、炭化物及び地山土を僅かに含む黒褐色壌土の単一層という埋積状況を確認している。

SD03

調査区の中央北西寄り、X 02 － Y 04 G r に位置する。規模は長さ 420㎝・幅 15 ～ 32㎝・深さ５㎝を測り、南北方向に沿って延びている。土層の観察では、炭化物を僅かに含む暗褐色壌土の単一層という埋積状況を確認している。

SD04

調査区の中央北東寄り、X 02 － Y 05 G r に位置する。規模は長さ 128㎝・幅 12 ～ 15㎝を測り、南北方向に沿って延びている。

SD05

調査区の中央北東寄り、X 02 － Y 05 G r に位置する。規模は長さ 110㎝・幅 15 ～ 30㎝・深さ６㎝を測り、南北方向に沿って延びている。溝上端部は不整形を呈している。土層の観察では、地山土の混じる黒褐色壌土の単一層という埋積状況を確認している。

SD06

調査区の中央東寄り、X 02, 03 － Y 05 G r に位置する。規模は長さ 100㎝・幅 20 ～ 25㎝・深さ５㎝を測り、北東～南西方向に沿って延びている。土層の観察では、炭化物を僅かに含む黒褐色壌土のほぼ単一層という埋積状況を確認している。

SD07

調査区の東、X 02 － Y 05 G r に位置する。規模は長さ 81㎝・幅 20 ～ 25㎝・深さ 13㎝を測り、北東～南西方向に沿って延びている。土層の観察では、上層に炭化物を僅かに含む暗褐色壌土、下層に褐色壌土という埋積状況を確認している。

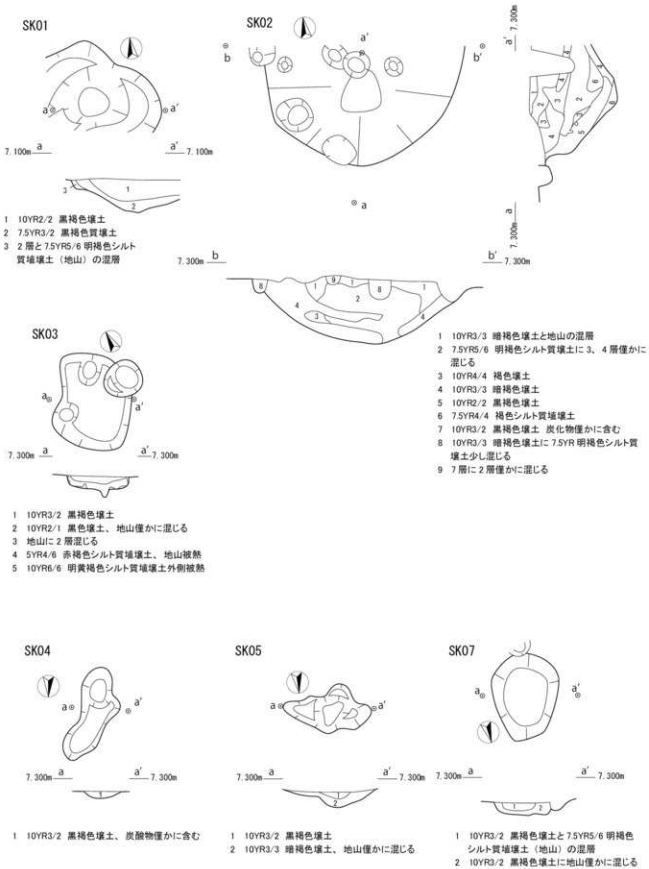
SD08

調査区の南東、X 03 － Y 05 G r に位置する。検出された規模は長さ 65㎝・幅 17 ～ 25㎝を測り、南北方向に沿って延びているもので、溝の南端は攪乱により消失している。溝底面は段状を呈している。

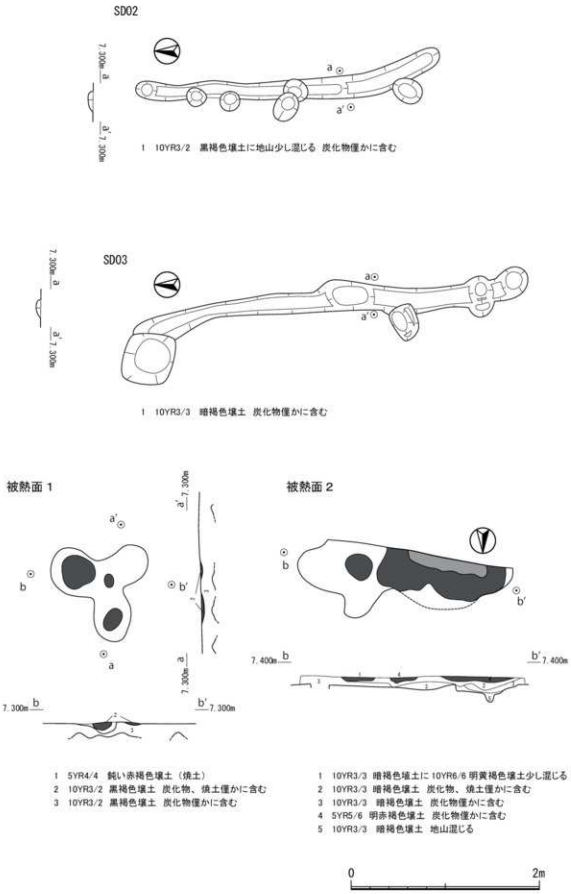
（溝の実測図については、代表として SD02・03 を本報告に掲載）

4　被熱面

X 02 － Y 04 G r 内と X 03 － Y 04 G r 内の２ヶ所において、被熱面が検出されている。それぞれの被熱範囲と断面を図化しているが、これらを説明し得る遺構・遺物までは確認できなかったため、その性格は不明である。



第 48 図　矢田新遺跡　SK01~07　実測図（S=1/40）



第 49 図　矢田新遺跡　SD 02,03, 被熱面 1, 2 実測図（S=1/40）

第４節　出土遺物

１　須恵器（１～48）

１～３は坏Ｈ蓋で、いずれも破片である。端部径は 12.9 ～ 15.8㎝に収まるもので、２が最小値、３が最大値を測る。中でも２は天井部の器肉が厚い。４～６は坏Ｈ身で、器形の統一は見られないが、全て古代Ⅰ１期に位置付けられるものである。７は鍔蓋で、外面に自然釉が付着している。８はハソウで、口縁端部の破片であるが、TK10 形式期と古相に位置付けられる遺物である。９～ 15 は高坏で、いずれも破片であったため、図上では一部の復元にのみ留まっている。９・14・15 は坏部、10･11･12･13 は脚部である。高坏全体としては、TK10 形式期から古代Ⅰ１期までの時期幅をもつ。16 ～ 21 は坏Ａで、器形の特徴から埦形の 16･18･20･21、丸底形の 17、扁平形の 19 と大別できる。また胎土は南加賀窯産が多数を占める中で、17 は能美窯産である。概ね古代Ⅴ２期からⅥ２期までの時期幅をもつ。22 ～ 27 は坏Ｂ蓋で、破片が多いため、器形の全体まで窺い知れる資料ではなかったが、古代Ⅳ期からⅥ１期に位置付けられるものである。28 ～ 31 は坏Ｂ身で、法量や高台の属性により、古代Ⅴ２期～Ⅵ２期に収まるものと考えられる。31 の底部外面にはヘラ記号の線刻が認められる。32 ～ 41 は盤Ａで、遺物の中でも取り分け出土量の多いものである。32 は古代Ⅳ２新期、33 は古代Ⅴ期と、やや古手の様相を示す他は、古代Ⅵ１～Ⅵ２期に属すると考えられるもので占められ、当該期の盛行が窺える。また 33 は坏Ａでも確認された、能美窯産のものである。また底部外面にヘラ記号の線刻が認められるものに、40・41 がある。ともに図化しているが、40 については やや判然としない。42 は盤Ｂで、古代Ⅴ２期の所産と考えられる。43 は小瓶で、口縁部の小破片である。全体の器形が不明なため、時期の比定は難しいが、概ね古代Ⅴ期からⅥ期に位置付けられるものであろう。44・45 は長頸瓶で、44 は頸部、45 は胴部と、それぞれの部位での残存状態は良好である。44 の内外面には自然釉の付着が認められる。45 は上部を欠損しているが、胴部はソロバン形を呈す。46 は厚底鉢で、古代Ⅴ期の所産と考えられる。47 は横瓶で、頸部のみ完存しており、胴部は欠損している。古代Ⅳ２期からⅤ期に収まるものと考えられる。48 は甕で、胴部破片を図化したものである。時期は不明だが、外面には格子タタキが施されており、余り類例を見ないものである。

２　土師器（49 ～ 65）

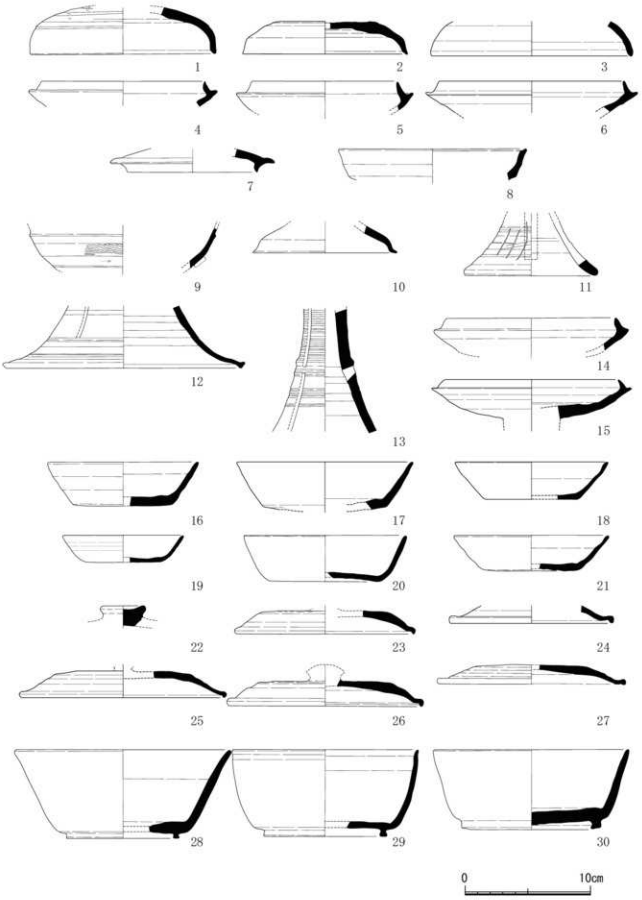
49 は埦で、内面は黒色、外面は赤彩の処理が施されている。50 は高坏で、脚部を残し、坏部は失われている。内外面ともに赤彩処理が施されている。51・52 は甕で、いずれも古墳時代期の所産と考えられる。53 ～ 58 は小釜で､時期は古代Ⅵ１期からⅥ２期に収まる一群である。59 ～ 61 は鍋で、いずれも底部を欠損している。器形の特徴により、古代Ⅴ期からⅥ２期までの時期幅が与えられる。62・63 は甑で、それぞれ底部・口縁部を残す。明確な時期の比定は難しいが、古代Ⅴ期からⅥ２期に収まるものであろう。64・65 はサヤ鉢で、64 は口縁部、65 は底部の破片である。いずれも古代Ⅵ１期からⅥ２期の所産と考えられる窯道具である。

３　縄文土器（66 ～ 68）

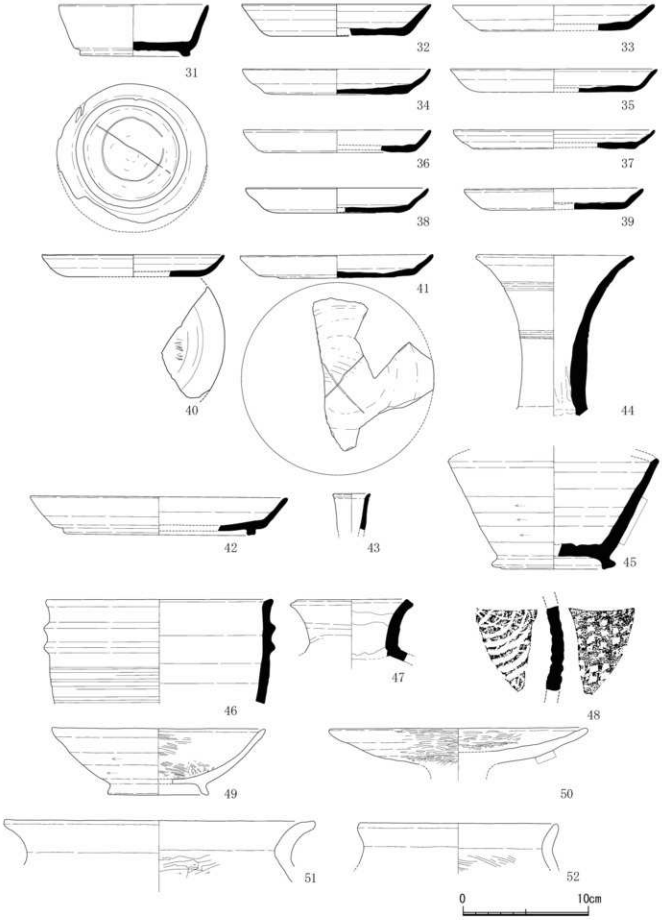
土器片３点が出土している。66 は包含層、67・68 は攪乱からのものである。いずれも全体的に摩耗が著しいが、外面に 66 には縄目文様が、67・68 には沈線及び刺突文様が確認できる。

４　土錘（69-74）

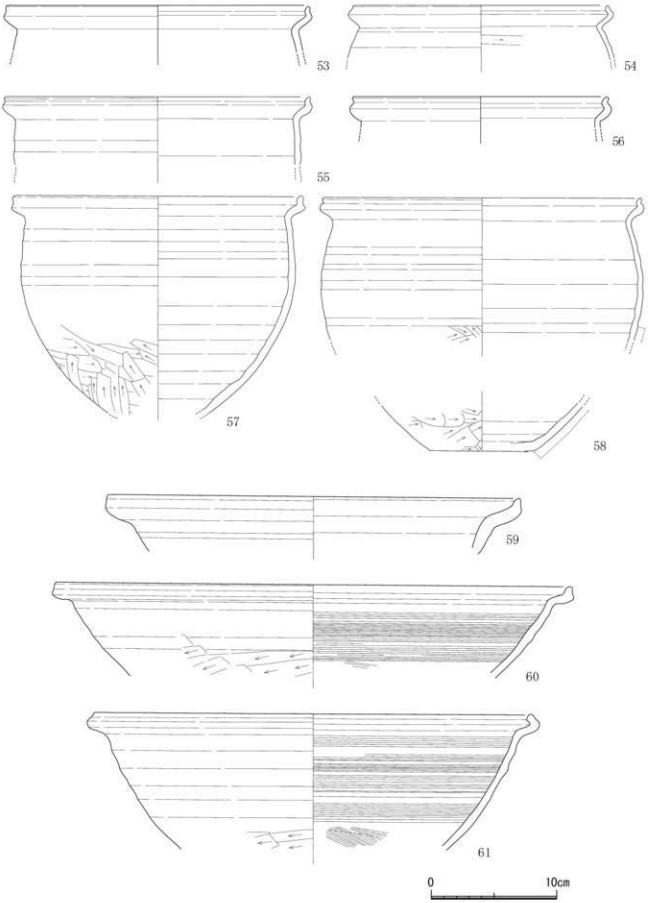
６点が出土している。69 ～ 72 はほぼ完存しており、73・74 は欠損品である。形態による分類では、69・70 は側縁部が膨らみ、長さが幅の２倍より短い。71 は側縁部がやや膨らみ、長さは幅の２倍よりも僅かに長い。72 は側縁部が膨らみ、長さは幅の３倍より長い。73・74 は側縁部が直線



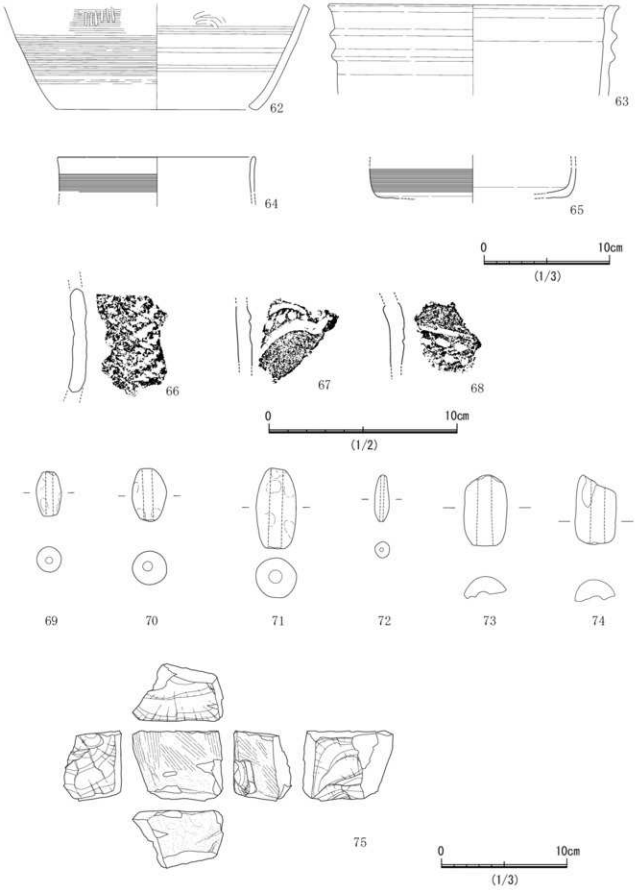
第 50 図　矢田新遺跡　遺物実測図 1（S=1/3）



第 51 図　矢田新遺跡　遺物実測図 2（S=1/3）



第 52 図　矢田新遺跡　遺物実測図 3（S=1/3）



第 53 図　矢田新遺跡　遺物実測図 4（66~68 は S=1/2, その他全て S=1/3）

的で円柱状をなし、平面形態は隅丸長方形をなす。

5　砥石（75）

1点が出土している。破片であるが、砥面が3面に確認できる。全体的に赤味を帯びており、被熱によるものと考えられる。

第5節　小結

今回の調査において検出された遺構は、掘立柱建物7棟・土坑8基・溝8条・被熱面2面である。また、調査区の全面に多数の柱穴が確認されており、特に掘立柱建物は、全て把握できなかった可能性も残る。これら遺構について特記すべきものとしては、まず調査区の北東部と西南部で、柱穴を含む遺構の分布状況に差が認められることである。遺構は北東部に多く見られるが、西南部では柱穴数も減じ、遺構の数も少ない。また溝として検出されたものについては、南北方向に延びるものが大勢を占めている。

また遺物は須恵器・土師器を中心に、縄文土器・土錘・砥石が出土している。須恵器・土師器は、土器形式でTK10形式から古代Ⅵ2期までの時期幅で展開される。特に食器の類では古代Ⅵ1期からⅥ2期に比定されるものが多く見られ、本遺跡が盛行した時期を示す資料群との位置付けも可能であろう。加えて少量であるが、縄文土器・土錘の出土は、当地域での古くからの活動の痕跡を示すと思われるが、遺構の検出にまでは至っていない。

いずれにせよ、今回の調査は遺跡の一部、222.96㎡という狭小な範囲であり、今回の調査結果を直ちに遺跡全体の性格として結びつけられないが、従来、矢田新遺跡の知見が少ない中にあって、貴重な成果となるものである。

第8表　矢田新遺跡　遺物観察表・凡例

1.「実測」は実測番号を示し、出土品整理の遺物分類時に使用したもので、右表のように付している。
　なお実測した遺物の内には、本報告書未掲載のものも含まれている。

3.「胎土」の鑑定で「南加賀」とあるのは、小松市南部丘陵地に所在する「南加賀古窯跡群」産であることを表している。

4.「焼成」で示す用語はそれぞれ以下のものを表している。
「堅」＝堅緻：焼きしまりが強いもの
「普」＝普通：焼成の還元状態が適正のもの
「生」＝生焼：焼成の還元状態が不良で軟質なもの

5.「色調」で示すものは、外面色調を基準としている。

6.須恵器・土師器については、望月精司氏（小松市理蔵文化財センター）による鑑定・教示を頂いた。

分類1	分類2	名称	実測番号
A　須恵器	A　食器	01　坏H身	001～003
		02　坏H蓋	001～003
		03　坏A	001～007
		04　坏B身	001～004
		05　坏B蓋	001～006
		06　盤A	001～010
		07　盤B	001
		08　高坏	001～007
		09　鉢蓋	001
	B　貯蔵具	01　ハソウ	001
		02　長頸瓶	001～002
		03　横瓶	001
		04　小瓶	001
		05　甕	001
		06　厚底鉢	001
B　土師器	A　食器	01　埦	001
		02　高坏	001
	B　煮炊具	01　甕	001～002
		02　小釜	001～006
		03　鍋	001～006
		04　甑	001～003
	C　窯道具	01　サヤ鉢	001～002
C　その他の遺物	A　土器	01　縄文土器	001～003
	B　漁労具	01　土錘	001～006
	C　石製品	01　砥石	001

第９表　矢田新遺跡　出土遺物観察表

図版	番号	実測	出土位置	分類１	分類２	名称	法量（cm）	胎土	焼成	色調	残存率	備考
48	1	AA02001	X02-Y02　包含層	須恵器	食器	坏Ｈ蓋	端部径 14.6　残存高 3.7	南加賀	生	灰白	端 11/36	ＴＫ 10
	2	AA02002	X02-Y04　包含層	須恵器	食器	坏Ｈ蓋	端部径 12.9　残存高 2.6	南加賀	生	灰黄	端 1/36	Ⅰ１
	3	AA02003	X02-Y04　包含層 X02-Y05　包含層	須恵器	食器	坏Ｈ蓋	端部径 15.8　残存高 2.75	南加賀	普	黄灰	端 6/36	Ⅰ１
	4	AA01001	X02-Y03　包含層	須恵器	食器	坏Ｈ身	口径 13.0　受部径 15.0 残存高 2.05　口高 0.7	南加賀	生	灰黄	口 5/36	Ⅰ１
	5	AA01002	X02-Y03　包含層	須恵器	食器	坏Ｈ身	口径 11.5　受部径 14.0 残存高 2.3　口高 0.95	南加賀	堅	灰	口 8/36	Ⅰ１
	6	AA01003	X03-Y06　包含層	須恵器	食器	坏Ｈ身	口径 14.6　受部径 16.8 残存高 2.5　口高 0.9	南加賀	生	灰褐	口 4/36	Ⅰ１
	7	AA09001	X02-Y03　P179	須恵器	食器	鉢蓋	残存高 1.85　端部径 13.0 返し径 10.3	南加賀	生	灰黄	端 5/36	Ⅰ１
	8	AB01001	X02-Y03　包含層	須恵器	貯蔵具	ハソウ	口径 14.9　残存高 2.5	南加賀	普	灰	口 2/36	ＴＫ 10
	9	AA08001	X02-Y02　包含層	須恵器	食器	高坏	残存高 3.3	南加賀	堅	灰	2/36	ＴＫ 10
	10	AA08002	X02-Y03　包含層	須恵器	食器	高坏	脚端部径 11.4　残存高 2.1	南加賀	普	暗灰	端 4/36	ＴＫ 10
	11	AA08003	X02-Y03　P181 X02-Y04　包含層	須恵器	食器	高坏	脚端部径 10.6　残存高 4.45	南加賀	普	灰黄	端 7/36	ＴＫ 10
	12	AA08004	X02-Y02　包含層 X02-Y02　P24 X02-Y03　P157	須恵器	食器	高坏	脚端部径 19.3　残存高 4.9	南加賀	普	黒褐	脚 3/36	６Ｃ後半
	13	AA08005	X02-Y04　包含層 X02-Y04　P279 X02-Y05　包含層	須恵器	食器	高坏	残存高 9.8	南加賀	普	灰褐	7/36	６Ｃ後半
	14	AA08006	X02-Y04　包含層 X03-Y04　包含層	須恵器	食器	高坏	口径 13.4　受部径 15.4　残存高 2.6　口高 0.85	南加賀	生	灰白	口 2/36	Ⅰ１
	15	AA08007	X02-Y04　包含層 X03-Y06　包含層	須恵器	食器	高坏	口径 13.8　受部径 15.9　残存高 3.1	南加賀	普	灰黄	口 8/36	Ⅰ１
	16	AA03001	X02-Y03　包含層	須恵器	食器	坏Ａ	口径 11.9　器高 3.5　底径 7.9	南加賀	生	灰白	口 4/36	Ⅴ２
	17	AA03005	X02-Y05　包含層	須恵器	食器	坏Ａ	口径 14.0　残存高 0.7 底径 10.0	能美	堅	灰	口 5/36	Ⅴ２、辰口産
	18	AA03003	X02-Y04　包含層	須恵器	食器	坏Ａ	口径 12.2　器高 2.95 底径 7.2	南加賀	生	灰白	底 10/36	Ⅵ１
	19	AA03002	X02-Y04　包含層 X02-Y04　被熱 NE X01-Y04　包含層	須恵器	食器	坏Ａ	口径 14.3　器高 3.2　底径 9.0	南加賀	生	灰褐	底 11/36	Ⅵ１～Ⅵ２
	20	AA03004	X02-Y04　包含層 X02-Y04　被熱 SE X03-Y04　包含層	須恵器	食器	坏Ａ	口径 12.8　器高 3.65　底径 9.0	南加賀	堅	灰	口 22/36	Ⅵ１～Ⅵ２
	21	AA03006	X02-Y05　包含層	須恵器	食器	坏Ａ	口径 12.2　器高 2.8　底径 7.3	南加賀	普	灰	口 15/36	Ⅵ１～Ⅵ２
	22	AA05005	X03-Y04　包含層	須恵器	食器	坏Ｂ蓋	つまみ径 3.6　つまみ高 0.9	南加賀	普	黄灰		Ⅳ
	23	AA05006	X03-Y04　包含層	須恵器	食器	坏Ｂ蓋	口径 14.0　残存高 1.85	南加賀	生	褐灰	口 3/36	Ⅴ１
	24	AA05002	X02-Y03　包含層 X02-Y04　包含層	須恵器	食器	坏Ｂ蓋	口径 12.8　残存高 1.4	南加賀	普	灰	5/36	Ⅴ２
	25	AA05003	X02-Y03　包含層 X02-Y05　包含層	須恵器	食器	坏Ｂ蓋	口径 16.0　残存高 2.1	南加賀	普	黄灰	口 5/36	Ⅴ２、内面墨痕
	26	AA05004	X02-Y05　包含層	須恵器	食器	坏Ｂ蓋	口径 15.2　残存高 2.2	南加賀	普	黄灰	口 5/36	Ⅴ２
	27	AA05001	X02-Y03　包含層	須恵器	食器	坏Ｂ蓋	口径 14.7　残存高 1.55	南加賀	普	灰	口 3/36	Ⅵ１
	28	AA04002	X02-Y03　包含層	須恵器	食器	坏Ｂ	口径 17.6　器高 7.0 高台径 0.9　高台高 0.4	南加賀	生	灰白	底 10/36	Ⅴ２
	29	AA04001	X02-Y02　包含層	須恵器	食器	坏Ｂ	口径 14.8　器高 6.9 高台径 9.8　高台高 0.5	南加賀	普	灰黄	底 12/36	Ⅵ１～Ⅵ２
	30	AA04003	X03-Y03　包含層	須恵器	食器	坏Ｂ	口径 15.3　器高 6.3 高台径 11.0　高台高 0.7	南加賀	生	灰白	口 13/36	Ⅳ２
49	31	AA04004	試　掘　坑　No.２ X02-Y03　包含層	須恵器	食器	坏Ｂ	口径 11.8　残存高 4.05 高台径 8.75　高台高 0.4	南加賀	生	灰	19/36	Ⅳ２、ヘラ記号
	32	AA06009	X03-Y05　P486	須恵器	食器	盤Ａ	口径 15.0　器高 2.5 底径 11.4	南加賀	生	灰黄	口 12/36	Ⅳ２新
	33	AA06010	X02-Y02 P46	須恵器	食器	盤Ａ	口径 15.9　器高 2.05 底径 12.0	能美	普	灰	口 5/36	Ⅴ
	34	AA06005	X02-Y02　包含層 X02-Y04　包含層 X02-Y04　被熱 SE	須恵器	食器	盤Ａ	口径 15.0　器高 2.0 底径 11.6	南加賀	普	灰	口 11/36	Ⅵ１
	35	AA06001	X02-Y02　包含層	須恵器	食器	盤Ａ	口径 16.4　器高 1.8 底径 13.0	南加賀	普	灰	底 16/36	Ⅵ１～Ⅵ２
	36	AA06002	X02-Y03　包含層	須恵器	食器	盤Ａ	口径 14.9　器高 1.8 底径 12.4	南加賀	生	灰	口 4/36	Ⅵ１～Ⅵ２
	37	AA06003	X02-Y03　包含層	須恵器	食器	盤Ａ	口径 15.9　器高 1.5 底径 13.0	南加賀	普	黄灰	口 3/36	Ⅵ１～Ⅵ２

図版	番号	実測	出土位置	分類1	分類2	名称	法量（cm）	胎土	焼成	色調	残存率	備考
49	38	AA06006	X02-Y05 包含層	須恵器	食器	盤 A	口径 14.4　器高 1.95　底径 9.6	南加賀	生	灰黄	口 9/36	Ⅵ1～Ⅵ2
	39	AA06008	X02-Y05　包含層 X03-Y04　包含層	須恵器	食器	盤 A	口径 14.0　器高 1.65 底径 11.5	南加賀	普	灰	口 3/36	Ⅵ1～Ⅵ2
	40	AA06004	X02-Y04　包含層	須恵器	食器	盤 A	口径 14.3　器高 1.8　底径 10.4	南加賀	生	灰黄	口 9/36	Ⅵ1～Ⅵ2、 ヘラ記号？
	41	AA06007	X02-Y05　包含層	須恵器	食器	盤 A	口径 15.3　器高 1.8　底径 12.4	南加賀	普	灰	口 2/36	Ⅵ1～Ⅵ2、 ヘラ記号
	42	AA07001	X02-Y03　包含層 X02-Y04　包含層	須恵器	食器	盤 B	口径 20.4　器高 3.0 高台径 15.4　高台高 0.45	南加賀	生	黄灰	底 9/36	Ⅴ2
	43	AB04001	X02-Y02　包含層	須恵器	貯蔵具	小瓶	口径 3.0　残存高 2.9	南加賀	生	灰白	口 9/36	Ⅴ～Ⅵ
	44	AB02001	X02-Y05　包含層	須恵器	貯蔵具	長頸瓶	口径 12.05　頸径 5.3 頸高 12.1　残存高 12.8	南加賀	普	灰	口 4/36	Ⅱ3～Ⅳ
	45	AB02002	試掘坑№ 2	須恵器	貯蔵具	長頸瓶	胴径 16.7　有台径 9.8 有台高 1.05　残存高 8.75	南加賀	生	灰黄	底 30/36	Ⅳ2
	46	AB06001	X02-Y02 P46	須恵器	貯蔵具	厚底鉢	口径 17.9　残存高 8.3	南加賀	堅	灰	口 8/36	Ⅴ
	47	AB03001	X02-Y02 P46	須恵器	貯蔵具	横瓶	口径 8.65　頸径 7.0　頸高 4.2 残存高 4.9	南加賀	堅	灰	口 36/36	Ⅳ2～Ⅴ
	48	AB05001	X02-Y05　包含層	須恵器	貯蔵具	甕	胴部破片	南加賀	普	灰黄		時期不明、外面格子タタキ
	49	BA01001	X02-Y05　包含層	上師器	食器	埦	口径 16.9　器高 5.25　高台径 7.8　高台高 0.85		普	浅黄橙	口 6/36	Ⅵ2、内黒・外面赤彩
	50	BA02001	X02-Y03　P50	上師器	食器	高坏	脚端部径 20.6　残存高 2.8		普	橙	脚 20/36	Ⅴ、内外面赤彩
	51	BB01001	X02-Y02　包含層	上師器	煮炊具	甕	口径 24.6　頸径 21.0 頸高 2.6　残存高 4.8		生	明黄褐	口 1/36	ＴＫ 10
	52	BB01002	X02-Y05　包含層	上師器	煮炊具	甕	口径 15.6　頸径 15.0 頸高 1.9　残存高 3.5		生	明黄褐	口 4/36	６Ｃ代
50	53	BB02001	X02-Y04　包含層	上師器	煮炊具	小釜	口径 23.9　頸径 22.4 頸高 1.9　残存高 3.6		普	浅黄橙	口 1/36	Ⅵ1
	54	BB02003	X02-Y04　包含層	上師器	煮炊具	小釜	口径 20.1　頸径 19.3 頸高 1.7　残存高 4.3		生	浅黄橙	口 3/36	Ⅵ1
	55	BB02004	X02-Y04　包含層	上師器	煮炊具	小釜	口径 24.1　頸径 22.6 頸高 1.8　残存高 5.4		生	浅黄橙	口 6/36	Ⅵ1
	56	BB02002	X02-Y04　包含層	上師器	煮炊具	小釜	口径 20.1　頸径 19.0 頸高 1.9　残存高 2.4		生	浅黄橙	口 4/36	Ⅵ2
	57	BB02006	X02-Y04 P261 X02-Y04 包含層	上師器	貯蔵具	小釜	口径 22.8　頸径 21.1　頸高 1.8　胴径 2.8　残存高 17.25		普	浅黄橙	口 16/36	Ⅵ2
	58	BB02005	X02-Y04 P261 X02-Y04 包含層	上師器	貯蔵具	小釜	口径 25.2　頸径 23.8　頸高 1.7　胴径 25.6　底径 8.2		普	浅黄橙	口 7/36	Ⅵ2
	59	BB03001	X02-Y02　包含層	上師器	煮炊具	鍋	口径 32.6　頸径 29.0 頸高 2.3　残存高 4.5		普	明黄褐	口 2/36	Ⅴ	
	60	BB03002	X03-Y04 被熱 SE X03-Y04　被熱 NE	上師器	煮炊具	鍋	口径 40.6　頸径 38.0　頸高 0.9　残存高 7.3		普	橙	口 2/36	Ⅴ2
	61	BB03003	X03-Y04　被熱 NW	上師器	煮炊具	鍋	口径 34.4　頸径 33.0　頸高 1.7　残存高 10.8		普	明黄褐	口 1/36	Ⅵ2
51	62	BB04001	X02-Y04　被熱 SE	上師器	煮炊具	甑	底径 16.0　残存高 8.1		生	浅黄橙	底 5/36	Ⅴ～Ⅵ
	63	BB04002	X02-Y04　被熱 NW	上師器	煮炊具	甑	口径 22.7　残存高 7.15		普	橙	口 3/36	Ⅵ1～Ⅵ2
	64	BC01001	X02-Y04　被熱 NW	上師器	窯道具	サヤ鉢	口径 15.5　残存高 2.7		普	橙	口 3/36	Ⅵ1～Ⅵ2
	65	BC01002	X03-Y04　P214	上師器	窯道具	サヤ鉢	底径 15.2　残存高 2.4		普	橙	底 3/36	Ⅵ1～Ⅵ2
	66	CA01001	X02-Y04　包含層	その他	土器	縄文土器	甕胴部破片		普	浅黄橙		
	67	CA01002	X04-Y05　カクラン	その他	土器	縄文土器	破片		普	明黄褐		
	68	CA01003	X04-Y05　カクラン	その他	土器	縄文土器	破片		普	浅黄橙		
	69	CB01001	X02-Y02　包含層	その他	漁労具	土錘	長さ 3.3　幅 1.8　孔径 0.55					重量 8.68 g
	70	CB01004	X02-Y04　包含層	その他	漁労具	土錘	長さ 3.75　幅 2.4　孔径 0.7					重量 20.16 g
	71	CB01003	X02-Y04　包含層	その他	漁労具	土錘	長さ 5.7　幅 2.8　孔径 0.95					重量 41.19 g
	72	CB01005	X02-Y05　包含層	その他	漁労具	土錘	長さ 3.7　幅 1.1　孔径 0.25					重量 4.89 g
	73	CB01002	X02-Y02　包含層	その他	漁労具	土錘	残存長 5.7　幅 3.35					重量 30.73 g、破片
	74	CB01006	X02-Y05　包含層	その他	漁労具	土錘	残存長 5.3　幅 3.2					重量 28.37 g、破片
	75	CC01001	X02-Y02　包含層	その他	石製品	砥石	残存長 7.1　残存幅 5.5　残存厚 4.6					重量 197.91g、安山岩質凝灰岩

調査前風景

表土除去

包含層掘削

遺溝検出作業

SD01 完掘状況

調査区全景

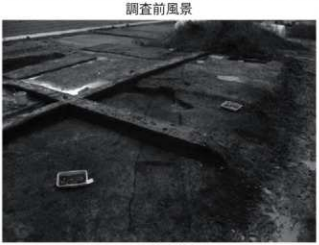
埋め戻し作業

出土遺物

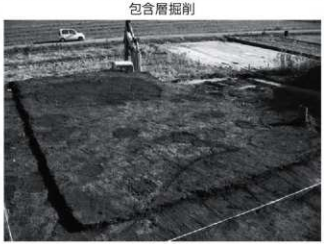
写真図版2　矢崎宮の下遺跡　発掘調査1

調査前風景

包含層掘削



SD01 検出状況

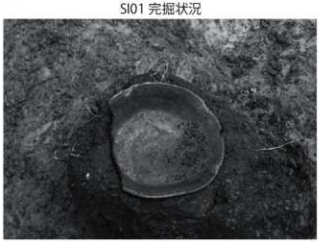


遺構検出状況

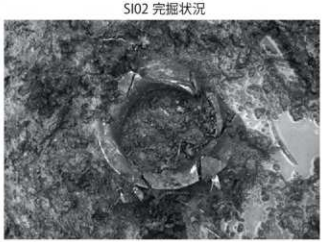
SI03 掘削状況

SI01 完掘状況

SI02 完掘状況



SI03 内土器状況（図 40）



SI03 内土器状況（図 48）

SI03 完掘状況

SD01 完掘状況

調査区全景（北から）

調査区全景（斜上方 北から）

古墳時代中期の陶邑窯産須恵器（SI02 他）

飛鳥時代末土師質馬形（包含層）

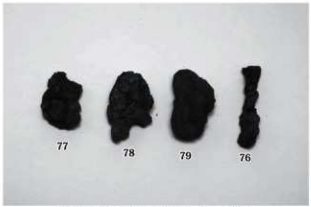
古墳時代後期の南加賀窯産須恵器（SI02 他）

飛鳥時代末の北陸型長胴釜（SI03）

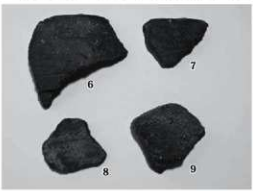
古墳時代中～後期の土師器手づくね土器（SI02 他）

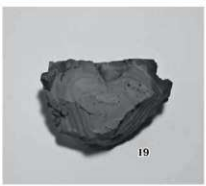
鍛冶関連砥石（SI02）

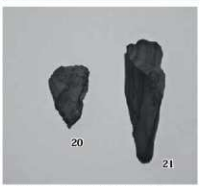
飛鳥時代末の焼き歪んだ須恵器坏B身（SI03）



鍛冶関連遺物と鉄製品（SI02他）







縄文、弥生時代の遺物

調査区A区完掘状況

調査区B区完掘状況

SI05 完掘状況

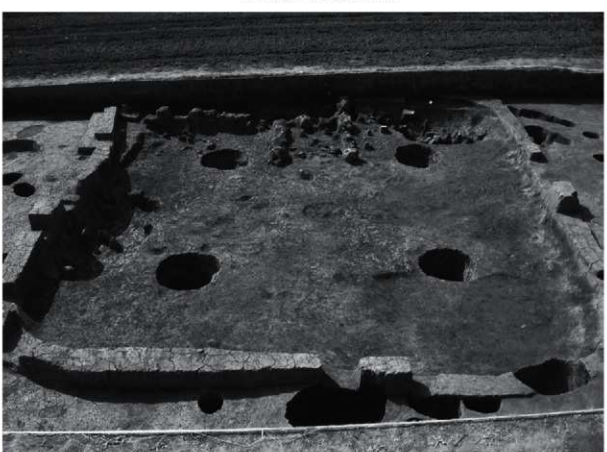
SK11

SB09 P1 の状況

SI12 カマド完掘

SI12 完掘全景

SI11 完掘（南西より撮影）



SI11 完掘（南東より撮影）

SI11 L字型カマド完掘

SI11 L字型カマド（焚口より）

SI11 L字型カマド 煙道の状況

SI11 L字型カマドと手前P5の状況

SI11 L字型カマド埋土土層Dライン

SI11 カマド崩壊土検出

SI11 カマド掘方Ｆライン土層断面

SI11P5 土層断面

SI11P6 土層断面

4　須恵器坏Ｈ

11 刀子破片

14　土師器埦Ｈ

18 土師器内黒高坏Ｈ

22 土師器小釜

24 土師器小釜

32 土師器釜

33 土師器甑

34 土師器甑底の桟

38・39・40 カマド形

41・42・43 砥石

44 コップ形

46 鉄製品（鑿か鏨）

54・55・56 須恵器坏Ｈ

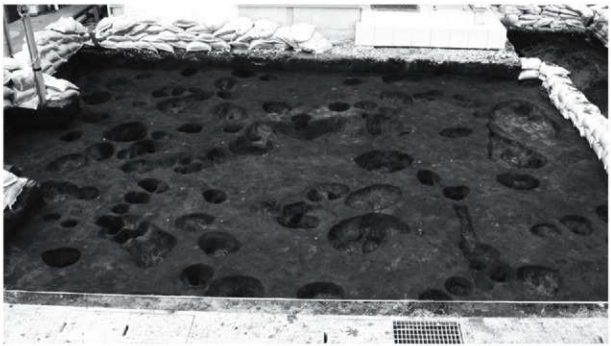
62 古墳中期 高坏脚

66・67 椀形鍛冶滓

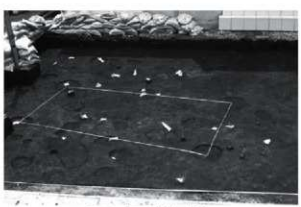
縄文土器

弥生土器

石器

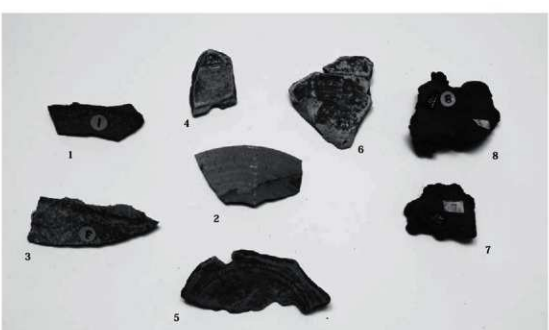


調査区完掘状況



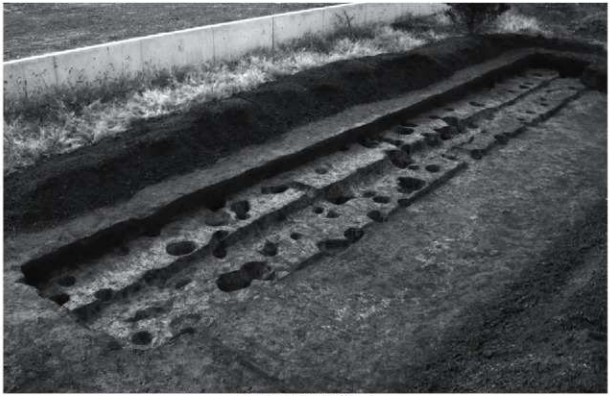
SB10 プラン検出状況

調査区完掘状況



出土遺物

国庫補助対象調査区



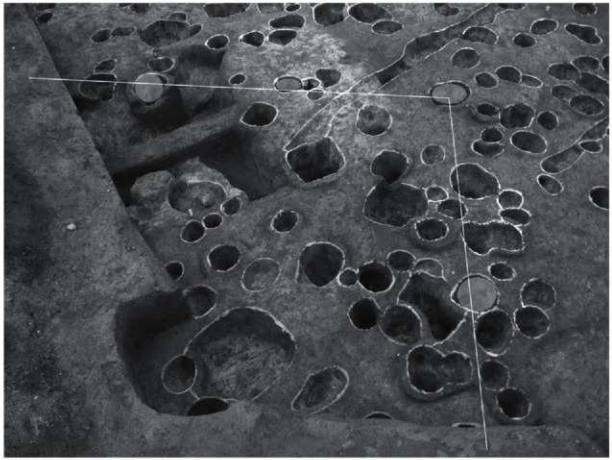
事業者直営対象調査区

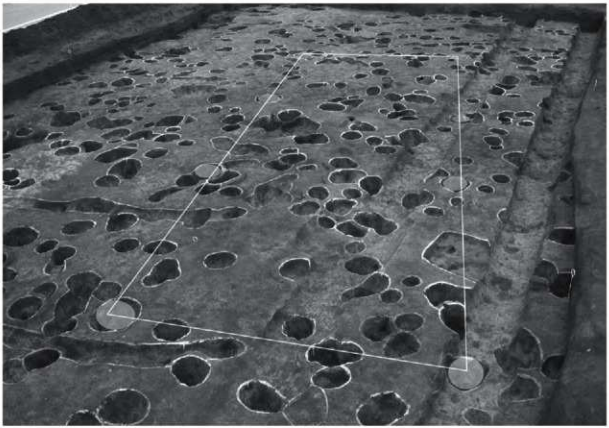
調査地

表土除去

遺構検出状況

遺構掘削状況


SB01



SB03

SK03　断面

X02-Y04Gr　被熱面検出

SB07

埋め戻し作業

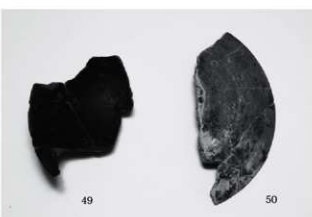
1
5

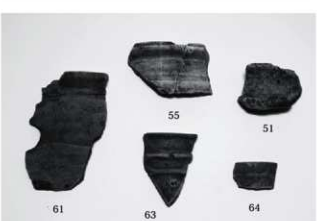
13
7

26
20
31

42
41

45
47
48
43
8
46


49
50


55
51
61
63
64

69
70
71
72
73
74

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ７
書　　名	小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ
副 書 名	白江遺跡・矢崎宮の下遺跡・薬師遺跡Ⅴ次・薬師遺跡Ⅵ次・矢田新遺跡
巻　　次	
編・著者名	岩本信一・大橋由美子・下濱貴子・宮田 明・望月精司
編 集 機 関	石川県小松市教育委員会
所　在　地	〒923－8650　石川県小松市小馬出町 91 番地　TEL (0761) 22-4111
発行年月日	西暦 2011 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
白江遺跡	石川県小松市白江町	17203		36° 24′ 12″	136° 28′ 20″	2007.06.04～ 2007.06.25	92	個人住宅建設
矢崎宮の下遺跡	石川県小松市矢崎町	17203		36° 21′ 47″	136° 26′ 00″	2007.11.15～ 2007.12.10	108	店舗併用住宅建設 (個人事業)
薬師遺跡 Ⅴ次	石川県小松市矢崎町	17203	03138	36° 22′ 11″	136° 26′ 13″	2007.04.09～ 2007.05.09	125	個人住宅建設
薬師遺跡 Ⅵ次	石川県小松市矢崎町	17203	03138	36° 22′ 11″	136° 26′ 12″	2008.05.19～ 2008.06.04	65	個人住宅建設
矢田新遺跡	石川県小松市矢田町	17203	03108	36° 20′ 42″	136° 24′ 28″	2007.05.21～ 2007.07.12 2007.10.29～ 2007.11.05	222.96	個人住宅建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白江遺跡	散布地	奈良～平安	溝１	須恵器、土師器、砥石	
要　約	漆町遺跡縁辺部にあたる。				
矢崎宮の下遺跡	散布地	縄文～弥生		縄文土器、弥生土器、石器	
	集落跡	古墳・奈良	竪穴建物３、溝１	須恵器、土師器、鍛冶滓、砥石	
要　約	三湖台地における古代集落群の出現が古墳時代中期に遡る可能性が高まった。類見町遺跡類似の８Ｃ初頭段階のＬ字型カマド付設壁支柱竪穴建物の発見。				
薬師遺跡	散布地	縄文～弥生		縄文土器、弥生土器、石器	
	集落跡	古墳～平安	竪穴建物３、掘立柱建物２、土坑３	土師器、須恵器、鍛冶滓、砥石	
要　約	今回の調査で、当遺跡における２例目のＬ字型カマド付設建物が発見された。				
矢田新遺跡	散布地	縄文		縄文土器	
	集落跡	古墳～平安	掘立柱建物７、土坑８、溝８、被熱面２	土師器、須恵器、砥石、土錘	
要　約	古墳～平安時代にかけての集落跡を確認した。				

小松市内遺跡発掘調査報告書 Ⅶ

白江遺跡・矢崎宮の下遺跡・薬師遺跡Ⅴ次・薬師遺跡Ⅵ次・矢田新遺跡

発　行　日　　平成 23 年 3 月 31 日

編集・発行　　石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町 91　　TEL (0761) 22-4111

印　　刷　　株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町 2-32　　TEL (0761) 22-7031